

# 川柳塔

創刊大正十三年 通卷八五九号



白川協加盟

No. 859

十二月号

# 予 告

## 川柳塔創刊75周年 記念川柳大会

平成11年3月20日(土)

於 ホテル・アウィーナ大阪

### 第五回 全日本川柳誌上大会

日本の全柳人がだれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を開催します。全日本川柳大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の權威ある三大行事ですので、こぞつてご参加ください。

#### 課題と選者(各題2句・連記)

「自 分 史」	唐沢 春樹	遠山 可住	共選
「勇 気」	猿田 寒坊	野口 初枝	共選
「ポランティア」	河内 天笑	秋山 静舟	共選
「定 年」	清水 惣七	佐藤真砂延	共選
「脇 役」	山本 翠公	佐藤 曙光	共選

#### 参加費

2000円(投句料・『平成柳多留』第5集代)

#### 賞

平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・経済  
広報センター会長賞・(社)全日本川柳協会  
長賞・全日本川柳誌上大会賞

#### 締 切

平成10年12月12日(土)

#### 発表・表彰

平成11年6月・第23回全日本川柳秋田大会

#### 参加方法

所定用紙(二枚一組)に各題2句と雑詠1句を

書き、参加費と共に左記へご送付ください。

(用紙はご請求くださればお送り致します)。

〒530  
-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX (06) 352-2210

# 今年を顧みて

橘高 薫風

四季の巡りの少しずれて、不順すくめ  
の一九九八年も残るところ僅かで、はや  
一年を振り返る時期となった。

柳界を展望してみると、先ずNHKの  
川柳選評の番組が、BK発進からAKに  
移ったことである。六十数年の歴史ある  
番組が匆匆のうちに変更になったのは、  
まことにあつげなく残念でならないが、  
川柳選評が消滅したのではなく、東京で  
の担当者の活躍に期待を寄せたのだった。  
日川協主催の全国大会は六月に萩市で、  
国民文化祭の川柳大会は十月に湯布院町  
で開催されたが、十月三十一日と十一月  
一日の両日に亘り盛大に開かれた第五十  
回西日本川柳大会の意義を催しは私の  
大きな関心事であった。

三十一日の川柳サミットは、青森県の  
風の町蟹田町、新津市、伊予市、地元の  
久米南町のパネラーと、基調講演をされ  
たコーディネーターとの息の合ったディ  
スカッションで、川柳による人と町づく

りの経過、現状、将来の展望を認識させ  
て頂き、「全国川柳サミット宣言」採択で  
全国ネットへの来世紀の発展を願った。

麻生路郎、中島生々庵両先生の句碑の  
前で、この山間の小さな町に四百人も  
の柳人の集まるパワームは何かを思う。

古くとも僕には仁義礼智信 路郎

「川柳は人間陶冶の詩」この町の一人  
一人の川柳愛の積み重ねであると思つた。  
川柳塔社関係では、三月の八五〇号記

念大会、十月の第四回川柳塔まつりを予  
想を遙かに越えた出席者で盛会にして頂  
いたこと、殊に最近の参会者の眼の色の  
生き生きとして、会を楽しんで下さって  
いる様子が、主催者に伝わってくるのに  
感慨を深くした。

一月に仲間づくりのプロジェクトチー  
ムを結成し、各地へ呼びかけた成果で、  
川柳塔まつりには七十二名の新同人を紹  
介、ずらりと並んで頂いた壮観には胸の  
熱くなる思いがした。

川柳塔、水煙抄の作品も充実して質的  
向上の目標に沿っているようで、これが  
最も大切な私の責務、新春号からは秀句  
鑑賞の頁を貰って、私の主張を書くこと  
になる。二賞選考の方法もすっかり形の  
変わったものになるが、それも新春号で

発表になる。各自の個性尊重の意図だ。

合同句集、個人句集の発行もようやく  
増えて行く傾向にあるが、今年は路郎先  
生の旧著「川柳とは何か」の復刻版が出  
た。これは先生畢生の名著で、初心者ば  
かりでなく、指導の立場にある人も必携  
の価値あるものと思う。テキストとして  
利用して頂きたい。

平成元年に建立の川柳塔碑も十年の歳  
月を経た。今年も十一月十四日に参詣、  
今年度の物故者八名の合祀法要を行った  
が、歳晩に当り改めて諸霊のご冥福をお  
祈りする。

年賀状に添える一句を案じ、千二百枚  
の宛名を書く労力のひと山を越えて、心  
静かに除夜の鐘を聞く。そして新年の爽  
やかな光を迎える。健康を取り戻す闘い  
の半年であったが、ご先祖の加護でまだ  
まだ活躍出来そうである。

来年も川柳塔飛躍の年であります様に。

バイアグラ養生訓へつけ足され  
アメンボは股立ち取って急ぐなり  
その中で猪口持つは良し酔羅漢  
毎朝の一人散歩は若い寡婦  
秋の暮れ今の名句が神隠れ



座右の句

ふたつめの衛星がこれ男の子

(薰風)

私の句

指ダコが昔むかしを恋しがる

坂田 和歌子

## 川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 今年を顧みて

橘高薰風 …… (1)

世界遺産への旅

田中正坊 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

橘高薰風選 …… (4)

自選集

大空のころ (95) …… (52)

川柳の群像 森下冬青

橘高薰風 …… (55)

古川柳歳時記 『歳末風景』

東野大八 …… (56)

先輩 ↓ 後輩

清 博美 …… (58)

小西雄々・本吉宗光・小島蘭幸・森井菁居

尼れいじ・竹治ちかし・田口虹汀

水煙抄

河内天笑選 …… (66)

秀句鑑賞

内海幸生 …… (60)

同人吟

森田文 …… (87)

水煙抄

同人吟

## 世界遺産への旅

田中正坊



去る九月、カナダ七日間のツアーに参加した。これまでアジア、ヨーロッパ方面ばかりだったのが今回はアメリカ大陸。と言ったことは、今まで西回りの空路であったのが初めて東回りとなる。しかも太平洋上に日付変更線があるので、往きは一日が二日、帰りは二日が一日となって元に戻るというややこしき。東回りはしんどいとは聞いてはいたが、聞きしにまさるきつさで、往復とも機中泊というおまけまで付いた。

行程は第一日は空路、バンクーバーで乗り継いでモントリオールへ、第二日はローレンシャン高原を観光、メーブル街道をドライブしてケベックに着いた。第三日は市内を見学して空路、トロントに飛び、第四日は今回のツアーの目玉であるナイアガラ観光、滝壺の間近まで行く「霧の乙女号」にも乗船し、心ゆくまで世界一有名な大瀑布を眺めた。第五日は終日、専用バスでカナディアン・ロッキーに遊び、第六・七日は往路と逆コースで、カナダ国内と太平洋を横断した。

澎湖抄……………	八木千代選……………	(88)
茴香の花……………	西出楓楽選……………	(92)
「ぜいたく」……………	近藤豊子選……………	(94)
一路集「学ぶ」……………	井上富子選……………	(94)
「失う」……………	西村黙光選……………	(95)
初歩教室「出発」……………	吐田公一……………	(96)
■エッセー「ハリコフ強制収容所の思い出」……………	岡本久峰……………	(91)
讃岐・淡路の句碑めぐり……………	古今堂蕉子・志田千代……………	(98)
第50回西日本川柳大会……………	高杉鬼遊・高田美代子……………	(100)
十一月本社句会……………	……………	(102)
各地柳壇（佳句地十選／米田幸子）……………	……………	(106)
十二月各地句会案内……………	……………	(119)
柳界展望……………	……………	(120)
■編集後記……………	……………	(122)



座右の句  
抱き合った形に草の芽が伸びる  
（螢）

私の句  
恋の森 理性の針が狂いだす  
永井 三津子

これらの観光地のうち、ケベックはユネスコの世界文化遺産、カナディアン・ロッキーは世界自然遺産に登録されている。世界遺産は、「人類が責任をもって保護し、次世代に残すべき普遍的な価値を有する文化・自然遺産」となっており、ケベックは一七五九年、英仏軍の決戦の舞台となった町で、当時の要塞であるシタデルがそのまま保存され、旧市街には十八世紀が今も生きている。

カナディアン・ロッキーはバンフからジャスパーまで、世界有数の山岳道路が通じており、キャットスル・マウンテンやレイク・ルーズなど、数々の美しい山や湖を觀賞、北半球最大のコロンビア大氷原に遊び、雄大なスケールの大自然をたっぷり味わうことができた。ナイアガラは、なぜか世界遺産に指定されていない。

今まであちこちと海外ツアーを重ねながら世界遺産ということに気にとめていなかったが、去る五月、カンボジアのアンコール・ワットを訪れ、ここが名だたる世界文化遺産であることを知った。そう言えば昨年、一周したスペインには古都トレド、アルハンブラ宮殿があり、フランスのベルサイユ宮殿、イタリアのフィレンツェ、バチカン・シチー、中国の万里の長城など、多くの世界遺産を見てきている。顧みると、海外ツアーは世界遺産への旅であったと言えるかも知れない。

# 川柳塔

## 橘 高 薫 風 選

守口市 森 川 まさお

警官も秋のさびしき言うており

まっすぐな道で疲れがどつと出る

曼珠沙華しがらみ多い年になり

夏帽子手に持ち日陰から日陰

お遍路は折目正しく礼を言う

赤とんぼ運河のそばを離れない

和歌山市 木 本 朱 夏

爪ばかり伸びてわたしは空っぽに

やわらかい桃の匂いのするからだ

痛む夜は亡母が添い寝をしてくれる

旅をして水の匂いのする手紙

黒猫の爪研いでいる十三夜

カマキリの生きながら枯れ風の中

弘前市 佐 治 千加子

ずぶ濡れの天上天下唯我の孤独

月青く誤解はとけぬまもらしい

風のいろ突然変る出会いかな

名月を見上げるしばしのどほとけ

何を疑う礼儀正しく猫座して

あれはあれでよかったのだよ猫の顔

和歌山市 牛 尾 緑 良

抜け出した迷路に続いでる迷路

ヘルメット今は平和に慣れている

鬱の日の鉛筆 丸が描けない

小豆粥米寿の父はゆっくりと

休耕田いま仕返しを練っている

解き玉子その運命を弄ぶ

竹原市 小 島 蘭 幸

また肥えて十一月の扇風機

髪切った娘と自転車を押している

十九歳"のぞみ"で逢いにいっちゃった

妻と二人とんぼ返りの旅もよし

はがき一枚の温さを男知っている

ひたすらに妻の一句を待っている

箕面市 岩 津 ようじ

長銀と防衛庁で今日も暮れ

まだなんか隠してへんか防衛庁

うれしくも孫と一献今日の喜寿

糖尿の酒 仲居にも叱られる

宇野さんが羨ましがるクリントン

横浜高に勝てるやろうかタイガース

鳥取県 新家 完 司

生きていることは楽しい参加賞

からだが違うところが違う君と僕

鶏の糞ませて元気な土にする

がんばった褒美に貰う菊日和

この世とは美しきもの罌雲

にんげんだからていねいにおとむらい

鳥取市 武 田 帆 雀

同情も隣の柿の葉も嫌い

寄らば隠れるデパートの円柱

外国の地ならキッスをお受けする

自慢する身の重症に気付かない

コップ酒蠅一匹を友にして

一年の労作晒す菊の天

藤井寺市 吉 岡 美 房

満月を掴めと孫を抱き上げる

秋深し少し狂って時計鳴る

うどん屋に秋の女を置いてみる

夢買いに行くと出たまま帰らない

老人と言われたくない薔薇を購う

裸木になる一瞬の蕙紅葉

茨木市 藤 井 正 雄

学校で習った嫁の茶碗蒸し

その昔梅田の地下の小劇場

秋の蚊が不倫を叱るようにくる

ラウンジで横顔ほめて飲むワイン

くるくると柿剥く祖母の里自慢

フルムーン箸割ってやる機内食

吹田市 古 川 喜 美 子

筋通すためにしばらくもぐる地下

年金の通知書がくる火蛾も来る

母よりも姑に似てきて五十年

子算編成三途の川に地下道を

骨のない墓を覆った曼珠沙華

追伸に財布落した事を書く

岡山県 山 本 玉 恵

節くれた指から過去の苦が洩れる

嘘そつと加えて老母をよろこばせ

灯をけしてひと日の心整えり

父の樹をゆすりつづけている無策

黙禱をよぎる悲の声世紀末

今言えば言えばといつか石になり

和歌山市 桜井千秀

想像を逞しくしてこころ病む

人間の灰汁に戸惑う雪月花

終焉を飾る気骨は軋ませず

第六感へひびく謂れの無い噂

再生紙減私奉公する気かな

壁の穴丁度わたしの目の高さ

吹田市 石原靖巳

ペアルックほどに揃わぬ夫婦仲

ちちろ虫聴いて独りの秋を酌む

秋が好き飾る言葉はなくていい

故郷はいいな仮面がなくて済む

ヒリもよし他人の生きざまよく分かる

運のない男がつくる阿弥陀くじ

唐津市 山門幸夫

夕焼けに恋しさ募る遠い故郷

黄金波かくれんぼしている雀たち

捨てられた仔犬と遊ぶ散歩径

ごめんねと路傍の萩を手折りけり

自販機用新券揃え旅支度

おまつりへ来たよ来れたよ手を繋ぎ

北国の残暑の中に孫生まれ

岩木山気高く見える誕生日

初対面生命を合わす呼吸つめて

微笑みも泣くも欠伸も人なみに

人形に似ている孫のつぶらな瞳

メンデルもあつと驚く福耳よ

尼崎市 春城年代

萩の乱れに蝶のいのちを思うなり

蚊がいつびき住みついている台所

誕生日くすぐったくて言い出さず

やつと解ったわたし元々怠け者

幼い頃を話してくれる人がいる

ねむれない夜は心の旅をする

松江市 川本 畔

鉛筆を削って秋を待っている

秋風が力を抜いて近づけり

年ごとに用心深くなる走り

切り出せぬ言葉が秋の野を駆ける

人生の秋は顔くものばかり

そのままの女でいいと寝待月

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

鬼あざみコップの水が減っている

道草も柵越えたのも一度切り

潮時を忘れてしまう古時計

弘前市 櫻庭順風

アリバイはふたりの指紋ついた鍵

男の名たたんで入れてある財布

お財布と言われて鈴を付けられる

鳥取県 岩崎 みさ江

まだ熟れぬ株は残して手刈りの田

人間の素晴らしさ見る千枚田

さまざまな机があった膝小僧

海と会う日までは只の水だった

亡き人を思い出せとやまんじゅしやげ

ぜんざいを食べしあわせを取り戻す

寝屋川市 角野 仁 清

忘れ物ですかぼんやり昼の月

還暦のあつちこつちが痒くなる

年金の額を息子に見せておく

ぼんやりと記憶が戻る解凍魚

考える葦が湖沼を埋め立てる

四つ足の眼におぞましい二本足

豊中市 田中正坊

海越えて秋を先取りするツアー

城壁に要塞 中世ここに生き (ケベック・シティ)

しぶき浴びその名も霧の乙女号 (ナイアガラ)

黄葉の彼方キャッスル山そびえ (カナディアン・ロッキー)

妻と手をつないで歩く雪の上 (コロンビア大氷原)

氷河湖のブルーの水に手を浸す (レイク・ルーズ)

ヒ素ニュースに飽いて名月をさがす

鯛ぐも山家の住いしたくなり

月見だんご買うて薄を貰いけり

通販でがまんしているおしやれです

病気にはめげしまへんでひとり言

諦めへまだ車椅子ありという

東大阪市 谷口 義

真夜中に花と目が合う時があり

花言葉知らず振られたのも知らず

仏さんの花を売ってはいない花屋

おぼろ月聞こえなかつたことにする

時々腹の虫にも酒飲ます

漱石も住所が変り明治村

八尾市 宮西 弥生

新しい仏の夢を見る夜明け

折づるが吉を指して飛ぶ夜明け

秋の夜は女とことん呑んでいる

どんぐりが寄って白紙をくり返す

引き際は墨絵のごとくして消えず

約束の一つに秋は火をつける

大阪市 清水 絹子

花柄の服が目につく喪明けごろ

温室のバラも夢みる四季の風

風呂上がり誰か来ないかい月夜  
ギンナン拾う樹をゆするのは父の役  
平成の嫁から習う整理学  
退院へお辞儀ばかりの姉夫婦

京都市 大河 未佐子

やわらかき孫の髪編む秋日和  
名月に庭下駄何度履いたやら  
哀れなり産卵終えし猫跨ぎ  
憎まれ口きいて最後はがんばれよ  
この愛を受けてみよとて曼珠沙華  
未だ癒えぬ傷に色なき秋の風

富山市 島 ひかる

ブロッケン現象神に成り済ます  
人生の歩幅と同じ山歩き  
テンションの高さで結ぶ仲直り  
地の塩になれよと母の笑い皺  
一隅を照らす炎の芯となり  
一本の串太からず細からず

宝塚市 嵯峨根 保子

明治村セントヨハネで鎮まれり(旅二句)  
美濃なれば御菓子司 如庵買う  
もう欲の無い人だから花ギフト  
セミロング熟女は裾をひるがえず  
奥さんはキャスター並みに知っている  
生きのびてバツタおんぶで温め合い

砂川市 大橋 政良  
脱線をした欲望という電車  
かすり傷程度で妥協してしまふ  
平凡な定規を当てる妻がいる  
言う言葉これだけしかないありがとう  
奢りだと言えば割勘だと吐かす

弘前市 高橋 岳水

たぎるもの失せて余白が擦り切れる  
サラ金の轍たどればシャイロック  
飛び過ぎて傷めた羽根がためない  
一本の白髪に続く下り坂  
宝くじの森で空砲ばかり聞く

弘前市 一戸 ツネ

番組にによきによきと湧く好奇心  
焼鳥を噛んで懺悔の般若湯  
秋雨に笑顔くずさぬ地藏さま  
ひとり独楽回っています数珠の輪に  
もみじ散るそつと受けよつてのひらに

弘前市 斉藤 劔

台風がそれてよかったなありんご  
りんご挽ぐ絵ばかり見てる車椅子  
山ひとつ登山ばやしに包まれる  
スイスイと整形外科に来たトンボ  
やや不良誰も嘆いてくれぬ稲

弘前市 高瀬霜石

温室で育ったせい影がない  
逃げ水を追って帰らぬピアスの子  
風まかせしかしいっぱん芯はある  
男いっぴき引き際だけは譲れない  
お辞儀しているのがわかる電話口

弘前市 富士慕情

まほろばの北の縄文輝けり  
土器散乱縄文の声切れ切れに  
縄文の尺度で伸びる巨大柱  
縄の土器ポツリポツリと語りだし  
褒棺の転生祈る蒼い月

弘前市 須郷井蛙

ゴムまりの孫が危ないクラクション  
治療費の値上げ痛さに耐えている  
誘拐もされぬ女房と住んでいる  
夕食時家族会議をしています  
クラス会おんなはみんな染めてくる

弘前市 今愁女

小春日にたんぽぽ天向き返り咲く  
リストラという現代の島流し  
ばついちも茶髪も昇格 辞書にのる  
神さまの後を十月出雲旅  
余生とや塞翁が馬もたかが知れ

弘前市 小枝ふさふ

一つだけ母が逃げ道探しあて  
ライバルの影が二三歩先を行く  
不景気か声が聞こえぬ秋の虫  
豊かさに本当の夢見失う  
鼻筋の通ったお方も花粉症

弘前市 蒔苗果林

開け放すドアー待ち人秋風か  
迷い文と秋霖の人同じ家  
中秋の風に五体を透視させ  
蠅一匹一人ぼっちとわかるらし  
再婚はお岩木山とするつもり

弘前市 相馬銀波

一日を括る日誌は手抜きする  
読み書きに体内時計眠くなる  
日が暮れてからは農婦が主婦になる  
続投を強いると会議連れ出し  
策を練る策の溺れに気付かない

弘前市 中山雅城

見てみたい八方冴の榧碁盤  
武家屋敷蚊除けにもなる榧碁盤  
碁盤から飛び降りて立つ着袴の儀  
血だまりに口出し無用と書いてある  
一局と言った碁盤に熱くなる

八戸市 島田昭治

敬愛の兄貴みたいな友が逝く  
恩返し少しも出来ぬ中に逝き  
花好きな笑顔奥さんの色っぽさ  
片想い生きる励みになつて  
おはようの後一言ふたことたのしくて

十和田市 阿部進

勝ち越しの味かみしめる新入幕  
我が人生生きてる限り青春だ  
庭先へ仏の好きな花を植え  
風の子が親離れして弾んでる  
倅せは妻と二人で飲める酒

黒石市 相馬一花

町内で憎まれている毒キノコ  
深刻な話を止めて抜くボトル  
サバイバルゲームに変わるクラス会  
罪のないアリの潰している嫉妬  
赤ちゃんも顔をしかめる紙オムツ

青森県 西谷大吾

ときどきは真面目な顔も見せておく  
死ぬときのために死に様考える  
止まり木に座れば影がしゃんとする  
両の手に雀をのせている案山子  
末席で裏の本音を解いている

仙台市 川村映輝

除夜の鐘終えれば私は九十五年金のおかげ悠々閑居する  
古い二人三食食べるのが仕事  
壊れ物のよう大事にされて動かれず  
退屈と戦っている怠け者

大宮市 八田敏

リハビリの痛みに堪える妻健気  
少しずつ手足萎えゆく妻あわれ  
骨粗しよう背骨潰れて縮む妻  
団地住み子育ての日が蘇る  
ママ厳し孫が来たがる爺の家

町田市 竹内紫鏑

追悼文濃し病名は聴かぬまま  
翻訳の弟子 日々受けたダムの水(加古先生を憶う)  
OB画展 地球儀まわすような題  
孫よ足せ西暦入りで糸図書く  
音楽時計 鎌倉路いま商の道

八王子市 播本充子

絶対の自信へ呼吸整える  
プライドへ男が子供染みてくる  
誘わない理由は協調性にあり  
小心の仲良しごっこまだ続く  
肩書きの女の子しい男には見せず

横浜市 菱田満秋

動物園牙むく獅子が喜ばれ  
留守電が相手で出来ぬ長話

一流でないからブランドで固め

尻切れの夢の続きが眠らせぬ

しみじみと暖房便座へ秋を知る

横浜市 清水潮華

引き際のもたつき晒す自己嫌悪

流行と言われ枕木庭に敷く

唇にピアス何とも恐ろしい

何気ない仕草に年を測られる

国旗掲揚座ったままが悪びれず

横浜市 後藤早智

次男待つシカゴへ一路翼つけ

シカゴへの旅落日を追いかけて

机上より氷河の名残り見る夜明け

華麗なる淑女の如きビルの顔

キャンパスがミシガン湖をも一人占め

横浜市 菊地政勝

良い妻に恵まれ勤め無事終える

ほほ笑みも言葉のひとつうなずいて

うつろいを花に感じて山歩き

手をつなぐ温みに言葉などいらぬ

初雪の便りに心引き締める

静岡市 安本晃授

小さい釘打って見返す妻の塞  
肩の力ぬいて風向きたしかめる

頼もしい敗者復活戦に起つ

遮断機が上がり駿馬の蹬踏む

涙腺をたどれば母の笑顔あり

富士宮市 渥美弧秀

食いしげる真顔の孫と腕相撲

傘寿よし詩と音楽が命綱

拳開くロマンはすでにこぼれ落ち

然り気なく妻はおしゃれの浴衣がけ

秋雨の寝椅子に柳誌小半日

静岡県 蘭田漠杏

病窓に無名の寺の鐘の音

屋上で付き添いと見る明けの月

名月もまつりも入院中に過ぎ

大部屋で病歴ざんげ果てしなく

病院も痛くなければ良い処

羽咋市 三宅ろ亭

毎年を同じ賀状で通すらし

いさかいをしてまで心の奥さらす

恥知らず誤字を毎回連ねてる

ざつくばらん品位が落ちて人が寄る

賀状から新年らしい創意盛る

富山市 舟渡杏花

悔いがないなら泣くなと叱る電話口

唯我独尊一合の飯が吹いてくる

あとの祭り守護神がノラだったのか

雨にも風にも負けてしまった日向ほこ

百歳をはみ出す皺にただ見とれ

富山市 酒井輝

好き嫌いして食べるのも愛の膳

諦めて見ている父が娘に好かれ

日本語と思ひカナ語を子が喋り

打ち解けて見せる笑顔の怖い読み

いい風が通る障子のことも部屋

大山市 早川盛夫

さてそこで先立つものは金である

生きてきた自信へ生きて行くつもり

タバコ喫う目がいっせいにこちら向く

酒よりも盛り上がってるウーロン茶

大学へ何しに行ったフリーター

京都市 都倉求芽

日々に幅違う 世間を渡る橋

冬支度ひとに構わず山は散る

よく喋るひとだが手紙もこまごまと

親馬鹿を心ゆくまでして帰り

ソーサに拍手判官びいきです

京都市 山海友熙

十二月川の流れも人嫌い

亡夫に逢うことを忘れて十二月

キリストもネネも師走の高台寺

十二月産寧坂の十二月

十二月ジングルベルよありがとう

京都府 稲葉冬葉

邪念の恋を鳩尾に溜めている

絵日記の太陽さんの目鼻だち

ゲートボール完全武装して出かけ

義理人情今日一日が長かった

きれいに死ねることばかり考える

奈良市 天正千梢

かくれんぼしていてぱつと曼珠沙華

群がって咲いて淋しい曼珠沙華

行者みち名水わきて苔むしぬ

手のひらの上で遊んでくれる人

ころぶのをこわがっている子供達

奈良市 米田恭昌

大和路のボクにも読める八一の碑

自販機で背すじ伸ばしていた千円

ひかえめでいつも省略されている

拙くとも活字にまさる温い文

絵手紙の孫も手伝うナススイカ

生駒市 麻生 アート

ゴミ出したかえり暫く虫を聴く  
パチンコへ目刺しのように並びおり  
インザムード虫がうたうよ秋の空  
自己批判えんえん続くこの齡で  
憶いださせる言葉はさけて笑い合う

大和高田市 岸本 豊平次

気楽さと不安が同居するひとり  
飽食の生ごみ狙う猫鳥

奈良町の駄菓子屋子供の声がない

夜明け前に電話娘が子の熱で

台風の過ぎてまだ雨青シート

大和郡山市 坊農 柳弘

長寿国祖母百歳の手まり唄

好不況どうあれ師走やって来る

波荒れて若狭ゆつくり冬化粧

吐く息もやんわり白い山の朝

北の宿雪を肴に月見酒

和歌山市 川上 大輪

青春に時々出会う散歩道

燭台の位置仕来りを守り抜く

座禅組む一人芝居と見られても

ペン先から洩れているのは悲鳴だな

双六の上がりに建っていた墓標

和歌山市 榎原 公子

小魚の頭哀しみ蘇る  
哀しみの音譜が染みているからだ  
病院の四角い秋よ娘も老いる  
水澄んでいる空になる雲になる  
嵐の日街は素顔を取り戻す

和歌山市 木村 初子

世渡りの下手さを笑うちびた靴  
ゆつくりと一人を生きる深呼吸  
泣くもよし笑うもひとり寂しいね

天衣無縫気配りもせず媚もせず

哀楽の皺をきざんできた八十路

無になれば足の軽さよ身の軽さ

和歌山市 山根 めぐみ

おいでおいで仏も鬼も呼ぶすき

ポックリと土中にかえりたい生命

荒削りだけど私は勇ましい

用心棒だつてわが家の素浪人

和歌山市 池永 正匍

朝刊も日暮れと共に故紙となる

標的で動かないのもあるらしい

回顧展 洗濯板が懐かしい

戦後とは応仁の乱からどすえ

機械なら油を差せば動くのに

和歌山市 細川稚代

りりんんと鈴振る虫に人恋し

屈託がないのかおはぎの二つ三つ

やつと来た神も仏もみはなさず

カレー皿やつと出番の秋深む

五十回忌耳底にある三部経

和歌山市 福本英子

山頭火のように生きたしすき原

四季の花やはり気位高い菊

仲裁に入ってくれた国訛り

蛇口から一滴も出さず外は雨

災害に揺り起こされた車井戸

和歌山市 川上富湖

ほこほこと幸せになる栗ごはん

地底への入り口があるマンホール

起き上がり小法師が動かなくなつた

巡回バス親切そうな人攫い

それ以上差せばビニール傘が泣く

和歌山市 堀端三男

本論より枕と取りを覚えてる

ベテランは客の訛りに合わしてる

歩きましようさつきと先をゆく女

強いのはお酒だけではないらしい

終幕を飾るバックは紫に

和歌山市 青枝鉄治

イエスノーはつきりさせる無位無冠

悲しみは見せぬピエロの厚化粧

金借りに来たに態度がでか過ぎる

拝まれる神も横向く社の不況

「うらら」から川柳好きになつた友

和歌山市 宮口克子

違うがな人類愛という区別

ネオンキラキラあなたキラキラまた明日

特性を見抜けなかつたのは上司

お嬢さま僕まじいこと言つたかな

ありがとう言うて替えますカレンダー

和歌山市 玉置当代

栗ご飯家族の話弾みだす

ミニトマトあなたは可愛すぎないか

ミニトマト君にアタックしたくなる

焼き茄子の香りに晩秋を惜しむ

攻められた背中勞う靴磨く

和歌山市 楠見章子

どんなご馳走も新米には負ける

いい知らせ郵便受けの前で読み

ちようつがい外れて笑い転げだす

鼻を擽むティッシュ銀行から貰う

ボタンひとつ外して話聞いてやる

和歌山市 古久保 和子

街路樹は鳥の時間に慣れている  
鑑定ごっこ漬物皿も出してくる

よろこびの日から写真が好きになる

御神木の瘤に似ている老父の顔

インターチェンジ降りて出合った秋まつり

和歌山市 山口 三千子

子にエール送る花道いばら道

物差しも時にのびたりちぢんだり

曼珠沙華この世の未練断ち切れず

アミダくじ引いてしまった回り椅子

黄昏れて情けは人の為ならず

和歌山市 堀畑 靖子

おつくうな日なり汚れの目立つ窓

赤ちゃんのほわんほわんとした温み

孫という命授かる秋の天

撤退をして少しでも生きのびる

深呼吸して反撃に出る私

和歌山市 福井 桂香

小石ほつほつ拾うて帰る秋の中

恋人のあおい吐息かだまし川

虫歯またチクチクチクとする甘え

虫の音に諸行無常を説くなかれ

捻子を捲く今日のいのちを点すよう

和歌山市 田中 みね

方向音痴みなに遅れてゆく浄土  
気配りを見せて気を引く初デート

言いたい人に言わせておけば他人事

肩書が泣くよモラルに欠けてます

髪染めても顔はと言いたげな鏡

海南市 三宅 保州

尻尾振った痛みは消えることがない

肩書を抜いた名刺をくれますか

私を縛るネクタイ腕時計

言わないで私口が軽いから

身体ひねって地図確かめる現在地

大阪市 渡部 さと美

名月よこの月生まれありがとう

誕生日また来年へ元氣出そ

したたかにそのうち変る高島田

温泉ツアーおんな変身朝化粧

不況なりに女もつづく忘年会

大阪市 西出 楓楽

現実ばかり見つめ空しくなってくる

服買えば行きなくなった美術展

ウォーキングお腹ひっこめひっこめと

苦瓜の苦さは生きている苦さ

小糠雨歩きたくない母の道

大阪市 神夏磯 典子

いやだけど来るものが来た十二月  
どんぐりが大差で勝つてからの坂  
すぐ消せる鉛筆だから本音書く  
近回り冒険心は捨てました  
フルコースラストの皿へありがと

大阪市 板東倫子

素っぴんもマツチヨもゲットする広辞苑  
横綱の重みが家族の絆断つ  
弾劾へ涙かくさぬ権力者  
どたん場になって詭弁で押し切られ  
平和ボケまだ醒め切れぬ孫と嫁

大阪市 田中節子

自由なれどなきに等しきピエロなり  
たかが紅<sup>ベニ</sup>されど紅葉を恋うて行く  
夢の中わたし亡夫のたまごっち  
生きてゆく癒やしが欲しい負の心  
愛の錯覚苦とも思わぬ娘の哀し

大阪市 本間満津子

すつと無になりたしひたすら天に請う  
亡母恋し古い大阪弁遣い  
思うほど体ほいほい付いてかず  
なにもせぬ日が有っても良いのではないか  
強いこと言うてしもって肩すぼめ

大阪市 川久保 睦子

飾る事いらぬ善人への弔辞  
図書館へ酸素しつかり吸いにゆく  
ひとり居の目覚し時計止めてある  
歌合戦去年は夫と笑うて観た  
浦島も鯛も唐津のおくんちへ

大阪市 町田 達子

熟女たち時どき悪女にもなって  
長身の観音に逢う博物館(百濟)  
川柳塔「奈良」創立へ王寺ゆき(H、10、10、10)  
亡姉に似た和服の女に目を見張り  
縁談に冷めた目をする時代かな

大阪市 北 勝美

目をつむり口開け妻の無表情  
病床の花瓶の花に秋を知る  
年金と福祉で八十路を生きのびる  
食事後の軽いいびきにある安堵  
せめての辛 慰むもの有り一行詩

大阪市 中田 あい子

年月が理想の妻を凡妻に  
忙しい嫁はよく食べよく笑う  
忙しさ生き甲斐にした日は遠く  
実る恋破れた恋が運命わけ  
あざやかな紅淋し彼岸花

大阪市 松尾 柳右子

新聞の明るい話題捜して  
不況下に物欲しそうな鳩が来る  
今年中しなかった事何だった  
年末へ体力なりと蓄えて  
反省の年にちよっぴり良い事も

大阪市 稲本 凡子

今の幸せ逃がさぬようにふり向かぬ  
前向きになるとわたしは血が躍る  
弱虫で冬眠からは出られない  
言うことのきかぬ手足をもてあます  
外面の仮面に替えて家を出る

大阪市 川端 一步

平行の線路は心ひとつなり  
砂時計あしたのことは教えない  
拝啓の後のそがねば季は移る  
廃線のコスモス僕を呼びとめる  
孫送る老いの涙の美しき

大阪市 河井 庸佑

筋通る話でないとか聞かぬ父  
懸命にやっつて失敗明日の糧  
辛抱が賢明策と耐えている  
善男善女納め大師へ続く列  
木枯しへ柚子の香りは仕舞風呂

大阪市 杉澤 汀

濁流の案山子最後の袖をふる  
そろばんを持った案山子の不安顔  
和菓子やの亥の子餅買いた母想う  
携帯につながれてこそ正社員  
進歩的とは義理人情を欠くことか

大阪市 辻川 慶子

菊人形菊の吐息が洩れてくる  
秋の天食べる割には太らない  
髪切ってどんどん進むいい話  
コスモスもわたしもころ揺れて秋  
生き甲斐を自問自答の花ばさみ

大阪市 井上 白峰

清濁を吞んで広げた老いの視野  
澄み切った心に愛が溶けていく  
反論を吐けば火の粉が振りかかる  
躓いてやっつと気付いた自己過信  
夢一つ抱いて人生黄昏れる

大阪市 小糸 昭子

太陽が昇る音たてて昇る  
闇の中何時かは明ける明日がある  
彼岸花その赤天まで届くだろ  
真夜中に小腹減ったりたこ焼屋  
にんげんはボール一つで抱き合える

二年越しの値札をとってコート着る  
大阪市 大塚節子

目の澄んだ難民の子に笑顔なく  
後厄のぜんざい今年も祖母が炊く  
去年から数が減ってる忘年会  
若夫婦 一夜飾りも気にならず

大阪市 津守柳伸

没頭のできる居職へ世間の眼  
好事魔が多く子期せぬ俄雨  
たじろがぬ昭和一桁年の暮れ  
ござっぱりできて眉間に曇りなし  
色即是空むかしばなしを読み返す

大阪市 福岡雅楓

地下街のもしやは思わぬ事にして  
掛け値して自分の値踏みしたような  
地下へ潜る思想もあつた今むかし  
千円で薬しべ長者の道おもう  
人間の間で揺れるやじろべえ

大阪市 奥田良子

手さぐりで明日のいのちを生きている  
小うさぎの母に甘える十三夜  
十三夜乙女の黒き洗い髪  
身にしむや一人のための夕仕度  
落日の浜で大きく亡母を呼び

外定が店閉じ船場黄昏れる

子を背負い一途に回る百度石

不況風へこたれまいと小商人

台風禍ひっぱりだこの宮大工

初松茸女医手作りの盛り茶碗

大阪市 津村志華子

ふり向けば悔いは山程ついてくる

切り株に腰かけている森の精

花柄の傘がときめく花時計

陰口は蜂の一刺しかと思う

淋しい日亡夫に話すひとり言

(母送る 五句)

時計止めひたすら母の足さずる

眼も耳も閉ざされた母遺言す

大往生それは他人の言う言葉

七本の扇の要はじけたり(七人の子)

野辺送り彼岸花 彼岸花の中

堺市 宮本かりん

告白をされ手助けをさせられる

実らないわたしを秋の陽に晒す

迷いまだ両手合わせた中にあり

自己主張してる間は大丈夫

相手にもされぬが闘志だけはあ

大阪市 岡本久峰

堺市 近藤 豊子

こども連れさいふのながか気がかり  
ジーンズをふれば小銭が鳴ってます  
枯草のなかに野菊の道つづく

手をつなぐおさな児の手にちからあり  
手作りの品惜し気なきバザーかな

堺市 柿花 紀美女

いつか来る終の別れへ蟬時雨  
忘れたい事へ真夜中本を読む  
余生には手頃な畑を持っている  
修羅いくつ母の形見の金指輪  
安心の形で眠る屋根の下

堺市 山本 半銭

昔裂綴り合せて刻停る  
オレンジに夕空そまる月の出よ  
立待ちの傾くまでの物思い  
待っていたようにぼとりと楓の葉  
柿喰うからす嘴赤く染め

堺市 黒田 真砂

風の町夫と訪ねる旅プラン  
風抱いた冬木は父の面影か  
風まかせひとりになった雲の彩  
春の風やさしくベッドの母見舞う  
食文化変り老いには慣れぬ味

高石市 浅野 房子

メッキ剥げ背伸びするのは止めました  
通じぬジョーク戻ってこないブーメラン  
口下手が得した話など聞かぬ  
己らの手は汚さない机上論  
身の程は弁えている冬木立

和泉市 岡井 やすお

疝気筋突いても景気良くならず  
球打って走って月に二千万  
優勝への糸は切れても首位いじめ  
ハットトリック相手次第と知りました  
大工方びよんぴよんと跳ぶうさぎ年

和泉市 西岡 洛醉

定退のまだ生き残る歩幅かな  
米を研ぐ妻懸命に生きる顔  
片ちびの靴あく事なき父の貌  
泥んこの或る日に湧いて来た自信  
背の筋をしゃんと伸ばした日の道化

貝塚市 池田 寿美子

渡るより眺める橋の素晴らしさ(明石大橋)  
台風と共に来た孫無事に去る  
娘と孫と夕闇迫る花手桶  
のぞかせたセンスが光るたのもしき  
白萩のこぼるる風にあすを生き

岸和田市 芳地狸村

旅人に人気パークの二頭馬車

(ノーザンホースパーク)

新しい顔がうけてる時計台

(札幌)

札幌の顔になつてる赤レンガ

(田北海道庁)

出迎えにてんやわんやのコンコース

(千歳空港)

連絡のメモ紙に妻の顔がある

岸和田市 岩佐 ダン吉

死刑台だれもが神になると言う

次の世も会おうと母の手を握る

わざとらしい咳で母さん言うてくる

名人芸いつの間にかやら勝つてはる

さようならわざと手紙に書いてみる

岸和田市 高須賀 金太

柳友がちよつと行こかと言えば酒

甘言を飲むと悪酔いしてしまふ

遊ばれているとも知らず空く銚子

緩下剤ぐらいで下りず秋の鬱

クレームのついた私を売りに出す

岸和田市 原 さよ子

金婚を祝う旅行を子等がくれ

冗談を呆けて来たか子等案じ

二代目も親の血を引く祭好き

冷却期間おいた小言は間が抜ける

孫にする答えは夢も足してする

岸和田市 田中文時

留守番になるのかボメの高軒

赤目吊り金金の世紀末

スーパの裏で老舗が肩で息

遺跡掘り機械使えぬもどかしさ

出棺の柩に庭の花弁散る

岸和田市 寺田 甚一

たんぼ道だんじり走る穂が揺れる

要塞は古つわもの夢の跡

軍歌から童謡歌い宴閉じる

大学は出ただけ何も身につかず

博士様金釘流の字を恥じぬ

岸和田市 藪野 けい子

冷静に布団の中で伸びをする

冷却が私の時間を取り戻す

醤油に老練の味衰えぬ

美人にはわざと足踏む通勤車

千円の扇子が役立つ満員車

岸和田市 井齋 一齋

忘年会我が家は妻の鍋料理

ご破算を何度やっても赤でした

大晦日社長の汗は脂汗

ジングルベルびくともししない買い控え

道聞くと邪魔くさそうなる暮れ

岸和田市 古野 ひで

ひとり住み新規に余生まきなおし

秋風が吹いて詫状書いてます

嵯峨野には涙を誘うお墓あり

世も末と不況の風に喘いでる

ふと我にかえると私八十路坂

岸和田市 長谷川 呂 万

退職金五分の権利へ指輪選る

大仏へ賽銭五円小さすぎ

OLの電車は動く化粧室

梨むいて芯までとってくれた女

隣席の漫画のぞいて読み終る

八尾市 内海 幸 生

ライバルに一札をしてちから水

負け戦自分を褒めるきつい酒

鬼の血と仏の心似せて生き

牧場で撫でた羊を食いますか

秋晴れや金融破たん耳塞ぐ

八尾市 高橋 夕 花

菩提樹の繁るあたりに亡母の顔

視力減退大きくなった目玉焼き

つんつんと私の横を行つたひと

秋のいろを着ても秋になりきれぬ

十五夜に一族達で生きてます

八尾市 吉村 一風

秋はいい虫の音色で酒がのめ

山門の向こう真っ赤な秋が呼ぶ

日傘たたんで水たつぷりと法善寺

障子貼り猫を二三度たたいとく

仲直りまだよう言わず秋深し

八尾市 高杉 千歩

有終の美とせん千歩の絵を飾る

残り火だろう密やかに燃える

お札状ばかり書いてる十二月

古稀すぎてこの忙しさは何だろ

善人もまき添えにして不況風

八尾市 宮崎 シマ子

娘の家に泊るつもりも旅のうち

村はずれ一軒家にも祭りの灯

萩刈って少し淋しい庭になり

夫の日記どのページにも私の名

鍵にぎる男背中でものを言う

八尾市 村上 剛 治

どんな実をつけるか若い樹が育つ

回転木馬時間が逆に回りだす

正論が青いと数に押しきられ

電話より手紙書きたいときがある

幸運がそんなに続くわけがない

八尾市 村上 ミツ子

有無を言わず義兄を連れ去る彼岸花(義兄急逝)

予告なしつつかい棒を外される

妻や娘や母を想うて振り返り

愛犬と花咲く道を浄土まで

亡母を恋うこころいや増す一周忌

八尾市 大内 朝子

生きのびる靴のかかとを打ちなおす

ポロポロと落ちる背伸びをした飾り

娘の夢がむすんでひらくワンルーム

年金を小出しにいのちつないでる

振りむけば苦楽みーんな夢芝居

八尾市 神原 まさと

引き出しで怒っているのは万歩計

コスモスに子犬と少女よく似合う

御堂筋銀杏潰し証券マン

鶏頭が一本天から贈物

独りなら気にもかけない病気だが

八尾市 生嶋 ますみ

保母の腕園児守って遮断機に

恋の気配交わす言葉のはしはしに

障りなき息を確かめ合う夫婦

音程がまだ定まらぬ声がわり

子が帰るビール一本飲み合せて

藤井寺市 高田 美代子

松茸と秋刀魚をじつと見ていたり

般若寺も秋コスモスは今見ごろ

くつ下もおんなも本当は弱い

真夜中の旅人となり流れ星

ご自愛を下さいなどと書いてくれ

藤井寺市 中島 志洋

関白も掃除手伝う年の暮れ

不況風 人情までも吹き飛ばす

忘れずに加茂の川原に都鳥

尼寺の鐘は優しい音で鳴る

除夜の鐘今年のドラマ締めくくる

藤井寺市 福元 みのる

こまねいて待つ運ろくなものはない

運勢は自作自演のものど知り

洗い浚いぶちまけてから仲がよい

言い勝った独り善がりやを悔いて居る

狂ってるのは世の中でなく自分

羽曳野市 榎本 吐来

やるだけはやった同期の古稀の顔

タクシーで飛ぶ懐かしの通学路

スケジュールのいの一歩にある墓参

墓石へ無神論者の貌でなし

偉いのがみな悪者となるニュース

羽曳野市 吉川寿美

松原市 玉置重人

一寸先わからないから生きられる  
身のほど知らずの穴をせっせと掘っている  
美味しい言葉の裏もとっくりごろうじろ

小癩にも雅号がボクの前を行く  
一碗の恩の深さよ萩が散る

羽曳野市 福田満州

松茸もびたつと来ない定年後

稲倒れ涙湧くごと雨つづき

電話せず駅でビニール傘を買い

同窓会風の便りにしんとなり

ケーキさげてきて誘惑せんといて

羽曳野市 三好専平

BGMにベーターベンが流れてる

杞憂とは笑えぬほどの雨が降り

説教のウラを見抜いている子供

これ以上禿げるところのない地球

花剪った缺で爪も切っている

羽曳野市 酒井一壺

表札に並んでいるがひとりです

駐在は白いコスモス咲かせてる

何の芽か鉢にもちゃんと水をやり

花好きの妻へ答える花が咲き

七回忌伯父が残したサルスベリ

こけるのもカゼを引くのも法度です  
長寿国うちの金魚も負けてない  
鯛焼きの餡が気になる秋深し  
ネクタイもシャツも父の日敬老日  
平凡な暮らしが好きな靴すべり

松原市 小池しげお

利食いでノーネクタイに隙がなし  
弱点があつて人間らしくなる  
失敗を黙って見てる怖い人

新聞が来て郵便が来て誰も来ず

金貯めるのが趣味と言えるかどうか

富田林市 藤田泰子

地球一周してきたらしい流れ雲  
めぐりめぐって昔の石が飛んで来る  
四捨五入しないで下さい誕生日

気の長い男が好きで熟し柿

お嫁さんにすべて手渡す虎の巻

富田林市 片岡智恵子

富田林市 片岡智恵子

献体へ墨絵ぼかしのこのからだ

鈍行に乗るとうつすら見える過去

無責任な噂他人だから愉快

水車からから葬儀場もれる白い菊

学生が輝きだした文化祭

富田林市 松本 今日子

長い雨想い出などと遊ぼうか  
台風一過大きなランプ買いいに行く

取柄なしただ正直に生きている

病室を区切るカーテン寒々し

フリーター出掛ける時はブランドで

河内長野市 加島 由一  
飲まなきやあい人ですと惚れている  
留め袖にとても似合いの涙声

笑いつつ妻小姑を手なずける

恋だつてバリアフリーにして欲しい

この家の力関係分かる犬

河内長野市 井上 喜酔

温かい人情が好き握り飯

脇役の口が滑って出た本音

生きるのが邪魔くさなつたと嘘ばかり

独りなら気にせず出来る途中下車

横顔が美しすぎて風も避け

枚方市 前 たもつ

みなみの地下で見た宇宙人

本物の落款無造作につかれ

通園バス孫は笑顔で降りてくる

訃報聞くひととき雨の音も止み(姪交通事故で逝く)

現実わが娘焼く火に手を添える

枚方市 海老池 洋

向日葵の挙手の見送る無人駅

よれよれの鬼が金棒放さない

これでいいと言う捨て石のひとり言

炭坑節 忘れはしない山の月

僕だけはビール飲みたいコーヒード

枚方市 寺川 弘一  
長生きがしたくてジョギングシューズ買つ

この世ではこの世のことだけ考える

悲しい時悲しい言葉は呑みこもう

初孫がからだ全部で喋ってる

終着駅白菊一輪あればよい

枚方市 森本 節子

秋場所を見ながら青い蜜柑むく

皇后さまのビデオ折しも月下美人の香

白と黒なおざりにしてはならぬ色

小一時間歩けばストレス消えている

新しいパジャマ入院用にとつておく

東大阪市 指宿 千枝子

秋空の心で居たい老いの日々

それからは暮らしも旅も一人なり

旅四日宗谷岬にわれ立てり

稚内の岡サハリンは幻か

ブラジャーをした乳牛に大笑い

東大阪市 森 下 愛 論

松茸で熱燗とろりたまらんなあ  
嬰鏢と老いて朝酒昼の酒

活火山ばりに飲んで気勢挙げ

法善寺包丁一本句碑を読み

お不動の乾く暇なし法善寺

交野市 山 川 日 出 子

十五夜にお酒の丸い味を知る

探してた水中眼鏡秋に出る

あやとりを知らぬ子供が増えている

若貴は阿曇仁王の顔に似る

パレードで夫婦はぐれた御堂筋

寝屋川市 江 口 度

秋には始める本当のダイエツト

長生きしよう墓のバーゲンあるまでは

日曜日今日もマラソンやっている

美しい訣れが出来る菊の花

世界中くしゃみをうつし合う不況

寝屋川市 岸 野 あやめ

老母さんは古い家から動かない

柵のひとつを断って老いてゆく

会社とは堅いだけではないところ

歳月が経たねば癒えね傷もあり

うかうかと生きて師走となりにつけり

寝屋川市 森 茜

ちちははと見た日のようならうろこ雲  
泣きだしてしまえそうです月が澄む

行列の前後異国の家族づれ

父の机に聖書ひらいているも秋

花鏡 藤沢周平に滲む

寝屋川市 酒 井 勇 太 朗

嫁ぐ日に履き初めの靴母がくれ

挫折して宙を彷徨う志

クラス会名残りを惜しむ師は卒寿

奇跡かも妻と出会って半世紀

五人目の孫で祖父母も板に付き

寝屋川市 柴 田 英 壬 子

吸盤のような葉脈蔦が這う

場違いなジンの香りのする不思議

虫がむさばると松葉の粉が散り

口惜し涙払って投句締切日

十二月は赤ワインでも嗜もう

寝屋川市 坂 上 高 栄

伊吹山雲鉢巻きに冬仕度

おじぎする角重たかろう奈良の鹿

朝星の影踏む朝刊ポトリ来る

酔ったふり本音は吐かぬしたたかさ

御堂筋パレード不況吹き飛ばせ

寢屋川市 籠 島 恵 子

腹立ちがなくなるまでの寡黙です

気付かないふりもステキな逃げ上手

流すにはおいしいチャンスと思ひ込む

警棒のように携帯持ち歩き

帰ったばかりの息子にハガキ書いている

寢屋川市 堀 江 光 子

顔洗う朝夕別な思いあり

居眠りが上手に駅を降りてゆく

訳をきけば果して笑うだけの人

逆らわず流されずゆく友は風

秋灯下これよりの事過ぎたこと

寢屋川市 後 藤 黎之助

初孫が教えてくれた笑い顔

最下位も勝てば一面飾ってる

算術の頭にパソコンアレルギー

お互いに視線をそらすエレベーター

稲実る隣マンション 駐車場

寢屋川市 平 松 かすみ

ピーチボールについて細胞活性化

心配の種は繁殖させぬよう

あれこれと沸騰好きの週刊誌

だれだろうポチが真似てる救急車

耳元でだんだん孫も乙女なり

寢屋川市 北 岡 波留吉

幸せが近い茶柱立っている

美しい故里が待つユーターン

ためらわず再婚せよと子が急かす

出世街道草させたのは女

旅人が花に水やる無人駅

高槻市 川 島 諷云児

七人の敵に寿命で勝つただけ

伸びのびの返事答へは×だろう

うしろの正面に妻が居る安堵

沈黙の深さへ石を投げてみる

年金に申し訳ない日々徒食

高槻市 傍 島 克 治

立読みの続き気になるサスペンス

千羽鶴つむじ曲りも二羽三羽

達磨に目入れて庶民に背を向ける

敵よりも味方へ先に塩贈る

雨降れど林檎狩りするバスツアー

高槻市 井 上 照 子

雨男晴れ女いてちよūdい

満月をじっとみつめる過去みてる

現況を報告亡夫の酒の友

好きですと言いたいこともある私

ブティックに若いと着たい服ばかり

茨木市 井上 森 生

いが脱げば苦勞忘れて栗ごはん  
敬老のカードはやはり長寿でね  
ナンクロは強い私の四字熟語  
救えると思えぬバンのひとり言  
粒揃いしたマスカットの生いたちよ

茨木市 堀 良 江

小さくてもなくてはならぬネジ一つ  
まな板の秋刀魚私を見えています  
洋なしがあけびの横にでんと居る  
寅さんの気ままな旅に望の月  
あの人に進上 練り紅 京みやげ

茨木市 島 元 ふ み

上げ膳据膳とも限らない子と同居  
ストレスを風に飛ばしてペダル踏む  
若者の前のつり皮遠慮する  
御遺影を輪の中に置く今日の宴  
翔んでいる母と安心してる向き

吹田市 山 本 希 久 子

お陽さまと共に起き出す孫二歳  
恋をなくしてそれでも川は流れゆく  
化粧落とせば情熱も色褪せる  
古き良き絆も歳をとりました  
関所のようにケーキ屋がある帰り道

吹田市 栗 谷 春 子

気に入りの孫の嫁ぐのも又この月  
晴れ姿また涙目で見なければ  
あの人もまたこの人も思い出に  
喜びと涙半分かくれては  
手を借りて唯しっかりと立つけいこ

吹田市 瀬 戸 ま さ よ

美味しいと声出して飲む林檎汁  
霜月の夜寒夜長の季節好き  
孤独感ひたひた迫る夜の秋  
夜の思い昼の私にない自由  
一夫一婦制人間のエゴかも知れず

吹田市 茂 見 よ 志 子

衣替え秋の女へ花匂う  
連れ立って城撮る夫と趣味の旅  
庭の草今年新種も混じり引く  
生活の記録凡句の数が増す  
焼いもの温さ家まで胸に抱き

豊中市 安 藤 寿 美 子

老いの手に似合う朱骨の奈良扇  
鶏鳴におどろかされた山の宿  
ケーキより梅干し食べることにする  
しあわせはおいしく出来た栗ごはん  
みほとけの慈悲のおん手にすがりたや

豊中市 吉田 あずき

ふれるもの秋の体温持つてくる

喝采はまばろしひとり古稀を舞う

人生のどこまで続く更衣

朝霧へ生きてるミルク瓶の音

笑い声まさかカラスじゃなかつたら

豊中市 井上 直次

地下道で女性のうしろ行かぬこと

妻と娘の連帯固い地下組織

引き際も取分だけは忘れない

試されているな吊橋渡り切る

引受ける癖へ隣室妻の咳

豊中市 江口 明光

孫達の育つ早さで祖父母老い

人生ぶらり森林浴の好きな午後

酒やめてそれから無口な父となり

本棚を廊下にもおく本のかず

性は善何時か真心通じます

豊中市 湯浅 馬洗

井の中の蛙と知った塔まつり

塔まつり一人で来たが連れができ(本間満津子さんを知る)

わが一生進むことばにせつつかれ

何飾る老いの品格問われても

自分史に悪夢の時代語り継ぐ

豊中市 滝北 博史

庭の椿 黒沢映画見た記念

不景気の主因はたぶん低金利

松茸の季節に竹の子の話

ホームラン六十六本二位も良し

ガーデニング紫式部抜こ抜かぬ

箕面市 出口 セツ子

人間が好きで未来を信じます

見る位置で悪が正義になる不思議

自己防衛無口になっていく都会

愛に飢え人を恋いますクリスマス

昨日の殻捨てて明日へ日記買う

池田市 栗田 久子

茶の花は土ばかり見て実を結び

デイナーショー霧困気に酔い人に酔い

雪のない聖夜さっさと寝てしまふ

妖精のように風花ワルツ舞う

まな尻を少し下げればゆるむ口

池田市 岡本 吉太郎

豚足好き痛風と同居しています

横にいただけでよい妻大切に

都市化して小川に蓋しトンボ消ゆ

いが一番名前呼ばれてドキッとす

世の事は大声出した者が勝つ

池田市 藤井計光

肩書きは中退ですが良い社長  
人間味だけでは日本変えられぬ  
三味の音はデザートのよう京の夜気  
段々とカレー煮詰まる過疎の里  
金という魔物に嘘も躍らされる

大阪府 榎山隆盛

春夏秋冬 酒が伴走してくれる  
馬肥える重量制限待っている  
家事一切ひとりになった日の備え  
雑巾をしぼって広げ春へ干す  
新世紀の音とかさなる除夜の鐘

大阪府 八十田洞庵

母おんな妻とかかえて太い指  
騒音に流れてしまふ正義感  
辛そうな背中だ父に不況風  
寂しさの数だけ集めコケシ棚  
留守電にとても悲しい計が入る

大阪府 米澤俣子

流言もまぜて売れてる芸能誌  
どなたにも見せぬ私のゴミ袋  
こわいのは自分自身が見えぬ時  
身長差で負けても体重勝っている  
ロボットに指図される日やがて来る

神戸市 中村ゆきを

一輪車倒れて少女へ木の実降り  
難儀なこと薬を飲むと安定し  
走りまわる子ママは雑誌に夢中です  
チャルメラをベランダで呼ぶ冬銀河  
句が出来ず木枯しの町へ飲みに出る

神戸市 山口美穂

ストレスを溜めないように愚痴を吐く  
嗜好きの人には相槌が打てぬ  
神戸の鬱空港なんか要りません  
片眼片耳塞ごうストレス溜まるから  
「おやすみ」は犬もねむむたい瞳で答え

芦屋市 黒田能子

パーティーの指輪キラキラ主役なり  
美人だと思ふ電話のいいお声  
ほとぼりがさめて大物地下を出る  
よく弾む毬を手元に置いておく  
二二三度の違い涼しい朝となる

芦屋市 水田民平

雷の声がこの頃年をとり  
行く末を読むめがねが欲しくなり  
おみくじの吉と出た娘は目が優し  
飽きっぽい娘がボランティアする花壇  
待ち呆け雨雲ぼつり涙した

西宮市 林 はつ 絵

雑沓のみんなに帰る家がある  
手術後の瘦せた手足の人生観  
駄馬なりの励まし方の母の声  
どうしても猫奴に負けることがある  
孫たちに囲まれ童話読んでいる

西宮市 奥 田 みつ子

ぶつかつた壁におじぎをして抜ける  
さくらもみじ焚けば聞こえる亡母の琴  
明日こそ飛ぶと駝鳥が駆けまわる  
土を買うペランダに薔薇ねぎトマト  
猫じゃらしコップに挿して虚ろなり

西宮市 亀 岡 哲 子

友と来て落鮎でよし野菊咲く  
ミルクティー濃いめにマロンケーキなり  
どんぐりをもう喜ばぬ孫であり  
コスモスの川辺春には菜種咲く  
秋思とはすすかけの舞うテラスにて

西宮市 門 谷 たず子

しまい湯で感謝の両手合わす癖  
感情がすこしあらわに父の老い  
倅せな中にしっかり寝ておこ  
風向きがどう変ろうと血の絆  
小引出し妻にはつまの内緒ごと

西宮市 秋 元 てる

誇るもの持たず気の合う旅仲間(船の旅)  
ワガママな母よろしくと子も五十  
葉書一枚出し何と言う気の軽さ  
二度目には二度目の良さよ あそう湾  
授乳する島の母子の大らかさ

西宮市 牧 淵 富喜子

満月や皇后さまを想いけり  
正面の月をしばらく見る二人  
海豊か鰯がこんなに肥えている  
佐多稲子 姑同年の背筋持ち  
空しさは本の頁にあるレシビ

西宮市 山 本 義 子

どちらへもありがとう言う敬老日  
ほどほどのプライドもいる老いの坂  
秋が良い冬も好きだと生きている  
異常気象どこも言うてくところ無い  
痛みわけ引きずらないで寝ることに

西宮市 緒 方 美津子

熱燭で夫婦喧嘩を鎮圧し  
地下街になれすぎ見えぬ非常口  
運動会ビリのビデオは顔ばかり  
喪の庭に懸崖菊のまばら咲き  
消費税連れ歩かれる小銭入れ

西宮市 井上 信子

地下鉄は立派貧しい国になり

地下鉄の一駅歩くほうが楽

地下街で思考パタリと止まります

ティファニーでグッチの財布お支払い

死ぬるまでプライドと財布はなさない

西宮市 菊池 トミエ

打止めの花火にほっと手をつなぐ

卒園の孫はこれから坂いくつ

三代も続いた老舗孫が変え

よろよろと風に歩いて蜂が行く

新米のふつつ釜の音が浮く

西宮市 井上 松煙

よれよれの古い意気だけはさかんなり

年金で買物上手また楽し

家を出て鍵が気になる後もどり

名月をさうつとり賞でる古い二人

海へ来て森とは違う空気吸い

伊丹市 山崎 君子

娘の距離ものびたようたとひとり言

言わざる見ざる従姉は平和に暮してる

マネキン人形もう春風の中にいる

金木犀まだ夕顔は咲いている

パスポート十年前の細いあご

尼崎市 春城 武庫坊

番外があつて人生生きる徳

波に乗れぬが平凡凡で沈まない

虫の声聞こえず秋に彩がない

部品修理にまだ脈があり夢を抱く

呆け封じの寺で帰りの道を開く

尼崎市 長浜 澄子

秋風の疼きへ朱い紅を引く

ときどきは逃避がしたいアイマスク

いつとき笑顔信じてはならぬ

跳んでみないか共に限りのある命

女々しさは男にもある栗のイガ

尼崎市 的場 十四郎

送り出し送るかえして一人旅

どん底のピンチで悟る義理人情

喉元が無性に乾く日の孤独

ひと声をかけ合い和む散步道

野辺芒ゆれて満月押し上げる

尼崎市 住谷 石舟

わたしにも竹の柔軟さが欲しい

愛される年寄りばかり多くなり

政治屋のように近ごろ妥協癖

秋風となら友だちになれそうだ

正論を大人になれと曲げられる

川西市 松本 ただし

懸命に生きて残った無精髭

水平線そこから明日が湧いてくる

調子よい話にあぶくたんと浮く

ドル ポンド マルクと相撲してる円

針の無い棹で釣ってるような運

川西市 氏林 洋敏

体調が良いとスラスラ嘘がでる

自分史の一句一句にある戦

視力表全部読めそう秋の空

わからないことは秘密にしておれぬ

お隣に聞こえるように自慢する

宝塚市 吉田 笑女

ひと目だけ見たいな孫の晴れ姿

初孫の嫁ぐ日迎えて落着かぬ

我がままに育った孫も今日嫁ぐ

宮様と同じ日だった子の結婚

嫁ぐ朝電話で行って来ますと孫

姫路市 古川 奮水

柏手が歓喜に響くご来迎

霊峰の山下りてから富士を見る

このはな館過保護の花に蜂見えず

車からヌツと飛び出すジャンプ傘

急ぎ足反省させる改札機

鳥取市 植田 一京

もう母は迎えに来ない里の駅

きょうだいを繋ぐちはのはの思い出

兄の折る紙飛行機はよく飛んだ

働いてロボット一つ手に入れる

接ぎはぎの見栄がべらべら剥がれだす

鳥取市 倉益 一瑤

幸せは大きな傘の中にいる

紙吹雪いい人ばかりいる幸よ

お茶点でてひとりの刻の流れたり

びしょ濡れの心労る鬼という

有情無情浮世に謎が多すぎる

鳥取市 谷口 次男

白壁がきれいな街をプロデュース

戦争も平和も知っている土蔵

だんだんと大きくなった壁の耳

どこからか平和の鳩が飛んでくる

この茶碗夫婦喧嘩をけしかけろ

鳥取市 石上 悦子

体調が悪いと先に言われちゃう

お互いに無風地帯の顔をする

笑顔だと嬉しくなってくる鏡

悪声のカナリアだけど歌が好き

目印は手首のホク口右にある

鳥取市 春 木 圭一郎

鳥取市 岸 本 宏 章

囲碁クラブ今の私のオアシスだ  
負けた夜基石ぐるぐるの夢に出る

桜湯に両家の見栄が浮いてくる  
上品に焼けたサンマがもの足りぬ

盤外の雑音着手狂わせる

孫の守り自宅勤務も楽でない

かや盤を買った時から腕上がる

豪邸に住めば犬まで品が良い  
ガラクタも宝も倉でよく眠る

正座して対局勝ちが多くなる

鳥取市 岩 原 喬 水

鳥取市 岸 本 孝 子

カラオケは苦手軍歌は間違えぬ

しきたりを守る本家の嫁の意地

中年の女の恋は苦手です

秋の夜はしみじみ想うことばかり

愛情で長い苦勞に耐えて居る

生活の苦勞知らない土踏ます  
天才の頭ときどきシヨートする

手遅れにならず手術でまた飲める

美しい姿で飛んでみてもらう

悪い虫つくぞ急いで嫁がせろ

縁なくて恋した人は征ったきり

鳥取市 美 田 旋 風

鳥取市 福 田 登 美

老人と歯抜けの街が増える過疎

赤いバラ触れると過去もついて散る

親と子の絆強める保証印

ありったけ自己主張して咲いてみる

お迎えは序列がなくて頑張れる

やわらかい言葉で隠す嫉妬心

少子化はどこ吹く風かミニトマト

待ち侘びた秋をそっくり娘に送る

どの旅もオバタリアンに当てられる

待ち侘びた秋をそっくり娘に送る

鳥取市 杉 本 孝 男

鳥取市 坂 田 和 歌 子

金持つと他人の顔がうまくなり

びくびくと休暇願いをかいてます

引き抜いて来たエリートが働かぬ

秋風に自慢話がよく進む

立ち読みの冥利斜めに読む速さ

今以って亡姑の名言句にできぬ

いざという時の仲間が足揃う

いくつもの恋を知ってる赤い壁

婆さんの耳学問がよく喋る

布団からはみ出た足は寝ていない

鳥取市 近藤佳子

悪妻だが主人の靴は光らせる

占いの吉のどこだけ頼りきる

飛びたつて還らぬひとよ吾も老ゆ

徘徊の叔母に血縁重ねみる

ついて来い一度言われてみたかった

米子市 政岡日枝子

綱引きの罫に嵌った椅子である

勇気を出して矢印の向きかえてくる

出合いがしらに涙上手に流すひと

もひとりの私単細胞通す

鬼と遊んで段々鬼になつていく

米子市 光井玲子

吉日だ今日は私のバースデー

飛んでとんでやつと古里はぐれ鳥

大切なもの置いたまま始発駅

うっかりと乗る孫たちの誘い水

欠けもせず夫婦茶碗がいとおしい

米子市 茂理高代

味噌汁に涙が落ちる膳作る

静かなら静かで涙流れます

あなたには涙なくては書けませぬ

涸れもせず泉の如く涙あり

沢山の友と涙を分かち合う

米子市 澤田千春

つらい時味方と思う土踏まず

河口には人間臭い杭がある

千円の地図が光つた迷い道

鼻打たれ人間らしくなってきた

バスの窓匂い漂う醤油蔵

米子市 野坂なみ

万里の長城いまさわやかに見る下界

勲章一つ飾ると二つ欲しくなる

千円がいよいよやをする赤い羽根

大将は目上の瘤を消したがる

傘の下でもノーをはつきり言い切ろう

米子市 石垣花子

戦場の話今でも目をぬらす

きな臭い政治へ女も気がもめる

枯れて立つすすきへ明治の祖父を見る

兄嫁のゆとり雑音聞き流す

肩叩きされて女が意地を見せ

米子市 田中亜弥

でのひらに誰にも見せぬ蔵がある

よく笑いよく寝てわたし七十三

光り輝くところに母を座らせる

人間をやめたい時が二度三度

バケツいっぱいなたたき売りの茶ワン

米子市 白根 ふみ

秋海棠いまひかえ目に燃えはじめ

台風をさけて紫苑の天高し

七かまど異変に赤を出しかねる

葉鶏頭秘密だらけで燃えさがる

燃えつきる夕日がすべるすすき野に

米子市 林 瑞 枝

美しい観音さまの顔で病み

鷹の子が巣立った樹から樹に飛んで

天紅の巻き紙秋の相聞歌

かつて九人の家族の米のあつた蔵

趣味三味 玉虫色となる余生

米子市 木 村 富美子

灯台と岬の仲は波にきく

海鳥はやさしい岬知っている

灯台が消えて岬に荒い海

太陽をいつも忘れているひとり

同じ陽の下に産まれて争うか

米子市 青 戸 田 鶴

強そうな花があんがい脆いもの

浄土まで道しるべにと彼岸花

新しいほとけも水がほしかろう

よく進む時計に支配されている

栗ごはん秋は私を太らせる

米子市 中 井 ゆ き

父と乗る赤いケットの人力車

青すぎる空に夢かく筆さがす

レモンしぼりすぎ逢瀬がきしみだす

ガラス玉私の笑顔とじこめよう

歳月が洗ひ男の顔にした

米子市 永 井 三津子

興信所私の知らぬ彼を知る

アルバムに気付かなかつた幸を知る

胸の奥夕陽が沈む子の巣立ち

淋しいと過去をべらべら捲りだす

かあさんだ夕焼けこやけまたあした

倉吉市 山 中 康 子

天の邪鬼つきおとされて目が覚めた

三人になると炎がもえてくる

約束を交わした孫娘に夢一つ

ときどきは嫁もたじろぐ大笑い

ご免ねと勇気を出してみる和解

倉吉市 山 本 玲 子

ほら吹き満足そうなあめ笑顔

浮き草につっかい棒はおせっかい

裸の付き合以上半分が見えただけ

茶柱を呑み込んで出た万歩計

目を閉じて聞く説法は雲の上

倉吉市 最上和枝

気忙しい割に仕事ははかどらぬ  
気忙しいと言いつつ止まぬ立話

あちらにもこちらも立てて煮え切らず

大根を輪切り切れ味確かめる

派手に舞う陰に涙の跡がある

倉吉市 米田幸子

ネットレス安物だとは気がつかぬ

助っ人が来るまで藁にしがみつく

修身の鑄型に合わぬ子が切れる

迷惑をかけた分だけ肩がこる

履くことの無い靴だけど磨いとく

倉吉市 野口節子

目も耳もホップステップまだ確か

舟出する子に赤飯の天こ盛り

飛びすぎた衣ゆっくり干して秋

一波乱ありそう壁の向こう側

騙されてあげる私の思いやり

鳥取県 乾喜与志

父母よ妻よこの歌聞いているか

名を忘れた人の笑顔をうろ憶え

温泉に浸り程好人のかお

ゆめ夢に追いまくられた呆け頭

死亡宣告だった娘が帰国して

鳥取県 土橋睦子

通り抜け出来る裏道教えよか

紅葉狩り後部座席に陣を取る

海鳴りは浜の汚染の呻き声

春を待つ千両万年青実をつける

柚子熟れて母のメニューがひとつ増え

鳥取県 土橋はるお

耳栓をして母さんの小言聞く

苦しゅうないと貧乏神がおっしゃった

辛い日はりんごの歌をうたいます

坊さんが念珠わすれたでは済まぬ

恋をして気忙しそうになる娘

鳥取県 太田幸枝

仕来たりを守った倉が朽ちははてる

因習の壁を破って村を捨て

天職にプライド持って平どまり

姥桜咲いて乱れた頃もある

健康で大きな壁も抜けて来た

鳥取県 土橋螢

作法にはなかったお茶の零しかた

白壁に落書きをするやんちゃくれ

ホテルより安い和風の宿探す

小三の孫に学んだABC

五七五の奥の細道へと続く

現代史とところどころに飛ぶページ  
母埋めた土が湿りをはなさない  
国引きの土にセイタカアワダチ草  
運勢欄吉方の窓あけ放つ  
死ぬのにも蔵の暗さはちようどよい

鳥取県

原 みさを

里芋の親を畑に捨てて来た  
すみません面目がない仏さま  
浄土から戻ったような事を言う  
老いらくの桜ほんのり紅をひく  
婿入りのトンビは蔵にあるはずだ

鳥取県

乾 隆風

急いで逝くも愛の証と言えるかも  
人生を独り身用に創り替え  
平凡を至福と思う歳の秋  
生き過ぎた女ぬけ殻山と積む  
第三幕ここぞ定位位置迷うまい

鳥取県

埴 寛子

おはようと真夜中のKDDは  
朝三時一喝しているのは五体  
おきまりのこの信号で紅を引く  
助手席に癒えたばかりの夫が寝る  
十日経ち眼光叱咤小うるさい

鳥取県

吉 田 孔美子

古いの身を大事にされてありがたし  
点滴のぼとりぼとりと神の声  
天上のひと恋しくて香を焚く  
温もりを伝える友が居てたのし  
豊作に案山子も浮かれ踊りそう

鳥取県

山本 正光

求めなくてもいつも変らぬ母の愛  
粃がらの軽さと母の軽さ哀  
同居して音一つにも気を遣い  
夫の忌の帽子と揺れるものを抱く  
青春へもどすナツメロ口ずさむ

鳥取県

さえき やえ

言い分があつてウロコを立ててみる  
みよちゃんもよっちゃんもこい柿熟れる  
腑に落ちぬことあり今日も墓参り  
とりもどす命へひそと咲かす花  
歩き遍路の杖が生きよと呼びかける

鳥取県

国 森 武子

賞状を全部下ろして子の代へ  
賞一つ人に言えない苦勞秘め  
悪かったなど絶対と言えぬ人  
あちらにもわけありそうで案をのむ  
骨箱が私の膝で冷えてゆく

鳥取県 津村 八重子

学ぶ子の清い目つきがたのもしい  
向かい風きつくてそつと座をはずす  
野心等抱かぬ瞳が愛らしい  
辻に立つ地蔵の笑顔まねて生き  
穂すすきもなびき枯野も秋深し

鳥取県 田村 きみ子

湯どうふに生姜たつぷり酒チビリ  
座りだこ何処に消えたか見当らぬ  
今日も無事ライスカレーを盛っている

鉛筆のBで自由に書く小鳥  
安定剤は息子夫婦という強み

鳥取県 西原 艶子

いつの日かライバルとなる弟子を採り  
頼もしい弟子がひとりはいて欲しい  
妻の座の無風地帯で米を研ぐ  
シグナルは赤 恋は迷路の中を行く  
姑米寿 仏のように丸くなり

鳥取県 石尾 かつ乃

亡き母の未完の句集生きて秋  
苦も楽も聞いて話していい仲間  
解けましたあつさり竹を割ってから  
遮断機が上がる筈はまだ出ない  
無造作なお庭が好きな花の種

鳥取県 橋本 多哥由

横むいて半分度胸ついてくる  
浜にきて夕日を見れば気が晴れる  
若い気でいても老いばれ影法師  
胃薬を飲んで深酒してしまふ  
正座して太陽に干す心あり

鳥取県 上田 俊路

富士山をまたいで拜む空の旅  
招かれた月下美人と酒を酌む  
ドンファンに出会った日からジャズが好き  
休耕の土が謀反をそそのかす  
リストラに真つ先雑魚の首が飛び

鳥取県 石谷 美恵子

一輪挿しに心祝いが活けてある  
学問の道へ手遅れなどはない  
母ちゃんの念力通りみな動き  
応援に来たのはみんな高齢者  
記念樹へ抱いた大志を嗤われる

鳥取県 近藤 春恵

満月がきれいで口説くこと忘れ  
動脈静脈私が生きる血が流れ  
妻の目がとどかぬとこで吞んでくる  
身勝手な願いに神もそっぽ向く  
人生の坂道寡婦にきびしすぎ

鳥取県 羽津川 公乃

足るを知る老いの美学は葬られ  
踏んばりの利かぬ見事な長い足  
土地下落相続権は放棄する  
科学では解明出来ぬ欲の皮  
破れない記録に母の子だくさん

松江市 舟木 与根一

日本をまだ見残している蛙  
爪楊枝くわえ得意の分野です  
飯粒をつけて大の字頼もしい  
太公望心得今日も明日もある  
年金で足らず焼酎に替えている

松江市 浦辺 静江

まだ惚ける年ではないと赤ワイン  
自分の影追っかけ弾むランドセル  
どしゃぶりで暇もて余す草刈機  
冗談を真に受け拗ねるお人好し  
卵と寅と馬が合ってる半世紀

出雲市 竹治 ちかし

満州で生まれた誇り持つ引け目  
見る人の心で変わる海の彩  
柳友の生きた証が書架にある  
子に翼与え二人で守る家  
子の居ない家が時々軋み出し

出雲市 吉岡 きみえ

うたかたの夢からさめたこぼれ萩  
この位置で石さえくぼむほど耐える  
豪快にしてもさみしさかくせない  
ひとり酒めざしの頭よ佗しいネ  
事のあるたびに他人とめしを食う

出雲市 石倉 芙佐子

早々と柿の木坂に日が暮れる  
女ひとり越せそうにない雪の坂  
二人三人と連れ立って来る坂の上  
坂道の中程に咲く彼岸花  
二人居て二つのテレビ聞いている

出雲市 園山 多賀子

塩壺を満たすと旅がしたくなる  
栗御飯お萩に姑の稀少価値  
返り咲く桜に未練はあるまじき  
これしきのミスで足元掬われる  
反骨かもしれぬ無花果がない

出雲市 小玉 満江

去年より陣地広げた彼岸花  
パイパスも良いがふる里真つ二つ  
もう少し言いたい虫をおさえてる  
心配をした程よけい腹を立て  
何や彼や言って出かける老人会

出雲市 岸 桂子

身の上が似ていて同じ話する  
老母病んで鼻緒の切れたままの下駄  
笑わねば今日一日が無駄になる  
悲しみの数は折らない母の指  
ゆるやかに神話の里に秋おける

出雲市 富田 蘭水

初孫のしぐさ話題を丸くする  
神に願 私一人のものじゃない  
常識の境界線が揺れ動く  
婚前の交際父は聞かぬ耳  
松茸が売れずに残る不況風

島根県 伊藤 寿美

がらくたかもしれないぬ私を掘りおこす  
秋の階段踊り場がまだ見えてこぬ  
へビースモーカー禁煙室で初孫を抱く  
母のようになれよと父の御立酒  
灯台も句碑も夕陽に飾られる

島根県 小砂 白汀

折れそうな枝で太ってゆくりんご  
アメンボが軽々歩く水の上  
爪弾けど鳴らなくなつたわが心  
灯が消えてしまったようなり孫娘の留守  
兄弟もいろいろあって茄子胡瓜

島根県 松本文子

あとけない手からコスモスを貰う  
大事にしてくれるが子等と違う道  
箱が小さいのかケンカばかりする  
おおそうだった古い杖があつたはず  
忘れたことにして新しい船に乗る

島根県 堀江 正朗

名月の見えない僕は飲んでます  
目が見えるような気をする秋祭り  
いただいた歳が教えてくれたこと  
白杖とえっこらやっさ趣味の道  
生きる幸動けぬ木にも花は咲く

島根県 堀江 芳子

夫婦箸泣いて笑っている幸に  
妹か おんなじ位置に光る星  
川柳日記老いの旅路の光とも  
息子と父だから徹底した議論  
酔うた夫を寝かす私の誕生日

島根県 森 茂美

秋日和心に残暑のこすまじ  
登る度彩の変つて山の秋  
鎌を手に棚田の秋や夫婦みち  
携帯を持って親子が疎くなり  
良心を捨てたときから飢えはじめ

島根県 榎原 秀子

あれつきり茶室の庭の萩の花

一足ちがい会わずじまいの秋の雨

病友の私わかる日わかからぬ日

少しずつわがままになる術後

オカリナの音色私のティータイム

岡山市 川端 柳子

生きてゐる内だけんかもしておこ

お疑いならば三度のまばたきを

見ることもなく子孫の顔想う

お見舞は先ず気配りの笑顔から

行く水や影とわたしのハーモニー

岡山市 井上 柳五郎

知事さんも街頭へ立つ赤い羽根

齢も秋冬へと動く日は続き

いつまでも生きてゐるよういう誤算

うたた寝の顔はテレビに向けた妻

人生のどの節目にも山と河

倉敷市 田辺 灸六

千円を貸せとは返さないつもり

扁平足進軍ラッパが好きでない

地球上一番怖いのは人間

上辺より心の花を飾りたい

辛抱が強い味方となる老後

倉敷市 小野 克枝

人間である証明の笑い顔

方針を無理に押し込むおもち箱

波立ててこっそりのぞいている他人

真つとくに生きよと風が囁いた

しなやかに有終の美を飾りたい

倉敷市 井上 富子

人生の苦味をプラスしたあなた

母さんの味方律義な電気器具

検査して急に濃霧の出たハート

イペントがひけて静かな星月夜

補聴器をはらはらさせるサスペンス

岡山県 大石 あすなろ

花びらは踏めぬ心が痛むから

瞑想がお好き腕組むポーズとる

同じミス上司が渋い顔をする

自信過剰のバラのストレス気付かない

自分史を少し飾った春のペン

岡山県 矢内 寿恵子

鳩尾に打たれた杭が効きすぎる

不足など言えぬ涅槃へあと僅か

働けるよろこび若くしてくれる

働いて忘れるほどの恋らしい

秋彩の中で老春炎えている

岡山県 江口 有一朗

目に見えぬ神に仕える難しさ(某神宮)

人間を語る響きのサキソフォン

個人の個孤の字の影が濃いくなり

母子父の序列 少なくする対話

隣との対話が温い村豊か

岡山県 小林 妻子

一寸だけ明日を磨いてから眠る

貧乏を知ってるなんて嘘だろう

対岸の灯気にせぬことにする

痛い歯をかかえ順番待っている

青い果実に今夜も電話取られたり

岡山県 二宗 吟平

ぼけないぞいろは歌留多の丸覚え

自由主義桜が秋の土手で咲く

負けぬ気の寿限無寿限無と声を練る

敬老会休み吟大会に出て吟じ

玉拾う役もせわしい体育祭

岡山県 富坂 志重

米蔵をこわしぞくぞく出る昔

嫁と母 中の私はヤジロベエ

鉛筆で書いた便りに鞭の音

精一パイ生きた枯葉に嵐くる

暗やみに落した心探せない

岡山県 福原 辰江

迂闊には言えない鬼が睨むから

胎動へまさか二人も居ようとは

迂闊にもつて尻尾を掴まれる

梅干の紅が嬉しい夏がすぎ

敬老の歳そうかと自問自答して

広島市 森田 文

コスモスの視界いっぱい揺れて秋

十人十色うちは二色で許し合い

ひと言の電話に今日が晴れてくる

恥ずかしい挨拶をした人違い

重い靴ときどき脱いで干して履く

竹原市 森井 菁居

誰も知らない人生の落し穴

青春を返して欲しい磯に佇ち

自分史の本に定価がついている

ギャンブルを断った日からのさわやかさ

老人病棟やたらと花が多過ぎる

竹原市 三宅 不朽

千枚田父の肋に見えてくる

円空の鈍目のような愛もある

あしもとのおぼつかなくも菊は菊

生花展うごく萩焼備前焼

リズムですちやらんぼらの強かさ

竹原市 時 広 一 路

誰よりも他力本願知る風車

家族って何だろ今は夫婦きり

空気が無償御礼を言ったことがない

一日の長短人間勝手なり

水を遣る花の笑顔が見たいから

竹原市 岩 本 笑 子

ししおどし秋の音する竹の里

マンガ本夫のトイレ長いなり

平和だな同じ職なり作業服

種のあるブドウだったと種を出し

資金繰り電話に出ないことにする

竹原市 石 原 淑 子

川柳とは師の情熱を秋夜長

秋の陽に二人の歩調ゆったりと

キティちゃん齢はきかぬことにする

カレーから怖い事件がまだつづき

何ことも無かったように芒ゆれ

呉 市 榎 田 英 詩

四股踏んで老人バワーお見せする

眉の型親子の絆だと思ふ

気の弱い男に檄の向かい風

お喋りに拍車がかかるコップ酒

ピンク着て妻合唱の列にいる

広島県 藤 解 静 風

必要のない人 妻の眼と出合う

必要のない人 保険屋も見捨て

必要のない人 もいる政界図

必要のない人 茄子の絵がうまい

必要のない人も歳は一つとる

柳井市 弘 津 柳 慶

手造りの肩掛けじいちゃんを喜ばせ

言い訳を女は鼻で笑ってる

強気出せと悪友がそのかし

雲の流れが想像の絵を書いてくれ

受話器を置いて二号邸あわて出し

宇部市 平 田 実 男

保証印絆太くも細くもし

鏝にならなかつた子の養育費

日本の政治へ欲しい大魔神

アフリカに賞味期限がありますか

税金を入れる袋の底が抜け

下関市 石 川 侃 流 洞

お隣は何する人ぞ都市砂漠

火葬場もダイオキシンの気を遣う

訂正印誤記を直しただけのこと

SLの頃を忘れぬ無人駅

ドングリココロ孫のポケットをあふれ出る

香川県 山地 マツエ

後戻り出来ぬ女の始発駅

子の瞳澄んでるウソではないらしい

蛇口全開琵琶湖の水がほとばしる

ネギ刻む音に目覚める実家の朝

味見だけして素通りの梨売場

香川県 川崎 ひかり

ふる里に老母の歩いた道がある

へそくりの場所を覚えてる安堵

道草で少し覚えた嘘の味

約束が指からするりと逃げて冬

行き暮れて流転の宿で聞く時雨

香川県 工藤 吟 笑

母の愛つぎつぎ宅急便で出る

寒空に心を読まれそうな月

充電はしたがエンジン掛からない

四代の君に仕えて悔いはなし

一筋に愛を信じて七十年(幸寿)

香川県 木村 あきら

大戦で死なすバブルに殺される

極限の文化地球が壊れだす

早起きは空気がトツテモ美味いから

野仏が独り笑顔で過疎守る

来る初春を信じて今日も万歩計

香川県 池内 かおり

グイェット好きな熟女のサウナ風呂

小さくなった老母の体を拭いている

巻きもどし出来ぬ新婚の妻よ

浮御堂バックに合吟した旅路

霧深き比叡で身体清められ

香川県 成重 放任

好転がほしい景気のない時世

趣味手芸玄人はだしの出来具合

震う声叙勲をソツと知らされる(あきら氏叙勲 二句)

亡妻と受けたかったろこの叙勲

悔いはない自分の決めた道だもの

香川県 神保 坊太郎

停年に鎖を持った妻が待つ

それぞれが持つ物差が折れ合わぬ

七転び八起き人生万華鏡

痛いこと繰返してゐるのが人間

修羅場をぬけると明日へつづく道

松山市 宮尾 みのり

固すぎる絆自立を妨げる

いぶし銀の人へお金がついて来ず

やきいものは高いと思う戦中派

命とは神とは生命維持装置

半分つこ大きい方を好きな人

松山市 丹下 美津子

登山ブーム甘く見るなと山の神

古希ですよまだやれますかポランティア

リラックスばかりの孫が気にかかり

天寿全う八人の子に囲まれて

亡父の待つ椅子迷わずに逝きなされ

今治市 矢野 佳雲

孫四人好きな順序は言えませぬ

妻に残されるとえらいことになる

防壁のように酒屋はピンを積み

呼びものが田舎料理というホテル

五十年無事で妻との化かし合い

今治市 野村 京子

十五夜のすごさに許す花の道

疵口を洗うに海の無表情

やさしさの芝居に慣れた欠け茶碗

置きざりの日傘疲れた顔をする

レモン切る女でいたいなと思う

今治市 越智 一水

生きてきた重み戦を語りつく

子に頼る心は捨てて子を信じ

外孫の顔を見に行く風の中

知らぬ地で子のあいさつが温かい

部屋部屋に背筋を伸ばす鏡おき

高知県 北川 竹萌

八十路越す妹車でふるさとへ

ふるさとへ余命感謝の誘い来る

氏神へお墓へ帰郷里の道

ふるさととの自然懐古のものいくつ

里清水分けて元気にさようなら

高知県 赤川 菊野

仏壇の夫と結婚記念日を

草原でりんどろ小ざく凍と咲き

上げ底のような世相におどらされ

草原の風に抱かれて眠りたい

お悔みを聞くのがいやでとじこもる

北九州市 梅田 宣司

エンジンがやつとかかるともつ日暮れ

ああそうかパタリと閉じた広辞苑

ワイフとは歩調の合わぬ百貨店

不器用で動脈瘤がふくれ出す

夜神楽で太古の神のエロを見た

唐津市 市丸 晴翠

柀が入り敬老会の仲間入り

ボケ防止夫に投げる変化球

樹の話聴いて一日森に居る

高齢化熟女の幅も広くなり

星屑のシャワーを浴びる終の家

唐津市 田口虹汀

平和な道を都市計画が掘り返す  
啄木の蟹がつぶやく貸ししぶり  
純綿の妻と二人の年の暮れ

曳山囃子ハハア今日から神無月  
映ること聞くことすべてひと日ぎり

唐津市 久保正剣

減反にタウン頁を繰る案山子  
秋の空見上げて歎く端株持ち  
カップリングの風が俺には合っている  
ライバルの名前がふえるポトル棚  
露払い今日はいらないツーショット

唐津市 仁部四郎

正座して書き出す賀状一人め  
海だろう空だろうか恋模様  
なるほどもそうだそうでも顔が無い  
羽化の日を夢に路上のギター弾き  
平凡に数え三百六十五

唐津市 山口高明

お供日は違法駐車もお目撃し  
数字なら訊き飽きました億と兆  
寝たままでゴキブリ体操して居ます  
後継ぎが出来て院長急に老け  
父さんは真面目人間胃酸過多

唐津市 山門タミ

聞き違い言いそびれから戸が閉まり  
夫の手にすがりステッキ旅に出る  
耐えしのぶ心をくれた亡母の声  
ほほえましアヒルの散歩我が友よ  
ああ人生仏の慈悲と鬼の面

熊本県 永田俊子

夢買いに恩師と歩く宝塚  
うれしくない祝辞が長い敬老日  
じゃんけんにも勝ってきた百歳  
テポドンだ不倫だ毒だ世紀末  
恍惚という消しゴムを持たされる

熊本県 高野宵草

広報車声の切れ端置いてゆく  
絶対忘れずにくる税通知  
怒らせた妻の言葉が他人めき  
ローマ字が読めて看板面白い  
検札へほんとの年齢を子が喋り

熊本県 岩切康子

話したい事が待ってる散歩道  
ある時はロボットになり渡世術  
それからは赤い服にも慣れて着る  
冷蔵庫に中味を貼って旅に出る  
スマートな国宝一号にする合掌

不揃いの時計で酒に酔いすぎる

一人居のトイレで電話鳴り続け

ほろほろと酌げばポロポロ出る涙

消費税から利息を引いている通帳

百歳へ意欲をもやす万歩計

こころの眼開けずあさる欲の色

人生の階せかすきた平和

曲り角明日を模索の米を研ぐ

秋桜と団地に命名賞でている

景観に我が物顔の自家用車

名月の明かりを背に草むしり

双眼鏡突然舞込む番鳥

弘前市 小寺花峯

弘前市 岡本花匠

十和田市 小笠原敏人

青森県 諏訪柳々

可児市 板山まみ子

捨てられず又しまいこむ衣替え

滑らせた口が払った高いつけ

始めれば季節が見える万歩計

打ち解けて話のはずむ露天風呂

台風一過銀杏樹下がさんざめく

名月に寺の狸が落着かぬ

七五三飾る晴着の持ち回り

百貨店主婦が現に戻る地下

菊日和心に泉湧く写経

餌ねだる鹿に微笑の甘茶仏

帰ったら元のやんちゃに七五三

細工見事食べるに惜しい飴細工

車車車淡路エリアは花盛り

政界は銀行救うのがお好き

タコ焼が一番好きな浪花っ子

十二月景気だんだん左前

日系の苦勞話に貰い泣き(アラジル 二句)

日系の情け深さが身に沁みる

安心の保険に危険忍び寄る

敬老と一日限りの大騒ぎ

うちの妻蟻年ですか目がまわる

一台のトラックミエで六号車

指輪など自分で買ったことはない

新婚で泊った部屋へまた泊る

大阪市 小林周信

大阪市 川原章久

大阪市 清水利武

大阪市 川内叭笑

大阪市 寺井東雲

大阪市 鈴木 トヨ子

コスモスが人恋しがる無人駅  
ふらつきもしたが射止めた的古希  
秋の空約束ごとが多すぎる  
膝枕忘れた温み夢に見る

堺市 神原 文

のちの世までと契りしふたりちぎれ雲  
るんるんのタイムへ亡夫じやまをする  
バンクーバー真っ先に行く美術館  
金木屋不景気の風抜けて吹き

岸和田市 加藤 基

失業し田圃を継ぐという報せ  
別れたい絵馬が泣いてる縁切寺  
歳よりも遅い老化と自慢する  
老練な耳が言葉の裏を聞く

岸和田市 原 苑子

変化ない夕餉に皿を変えてみる  
写経する気分で違う筆の先  
ほがらかな子も神妙になる受験  
弁当にゆうべの残り主婦パート

八尾市 篠原 いつふみ

ひとりから色いろあつてまた独り  
ラッシュ時に座った前に杖の人  
先逝きし友を愚痴ってひとり飲む  
十二月キリスト教が増えてくる

八尾市 長谷川 春蘭

叱りすぎだった寝顔の涙拭いてやり  
さよならで消せないことが一つある  
萩すすき隣の墓にも声をかけ  
秋風に吹かれるものに我もあり

河内長野市 植村 喜代

虹の橋極楽からの落し物  
時々は夢かと思う孫の顔  
台風も知らずすすやすやすや赤ちゃん  
孫帰り孫の泣き声耳につく

東大阪市 安永 春

寄席がえり笑いの影がついてくる  
ひと休みところに響く滝の音  
岬までペダルが弾むふたり乗り  
釣糸に岬の夕日沈みかけ

枚方市 二宮 山久

ストレスを取りえぬままの趣味多忙  
ふる里の味覚分けあう両隣  
割勤へ飲みほすお酒ちびちびと  
定年はまだまだ先と妻元氣

寝屋川市 太田 とし子

明日がある信じるあすが恐くなる  
ぜいたくは森で遊んで元氣です  
古里はひとりぼっちになるところ  
彼岸花一家団欒する墓石

吹田市 野下之男

木犀の香りは風と仲がいい  
訛りある大阪弁を褒められる  
赤ワイン薬と言えば納得し  
おおきにな思わぬ人と法善寺

箕面市 椎江清芳

健康とお金と髪の毛も欲しい  
年寄りの出る幕はない塾通い  
立ち直るチャンスに父の釘が効き  
医者よりも看護の心効いてくる

豊中市 松岡久留美

虎視たんたんとチャンスをねらう古狸  
一粒の種を大樹にした歓喜  
温かい便りがとどく青い空  
内緒ごと無くして明るいうちの家

神戸市 池田善守

社内報 知らない名前多くなり  
わが人生晴れだった日々忘れてる  
犬猫も人に負けじと高齢化  
一枚の葉にも裏あり表あり

神戸市 木村貴代子

電話線つないでほしい母は居ず  
品行方正けなし言葉に聞こえる世  
無印良品さあれかし吾子よ  
あと何度夫婦げんかが出るだら

西宮市 西口いわゑ

彼岸花遙かな亡母よ見てますか  
野心持つ女のそれは美しい  
ハイビスカスだんだん小さくなって秋  
五年日記年を重ねたなと思う

西宮市 久保まさお

良夜かなアバートの灯も皆ともる  
遅咲きの夕顔涼し月を待つ  
暗い世だ憂さ晴らさむと虫時雨  
十月の寒波ゆさぶる萩すすき

西宮市 刈田泰司

猫族も失樂園があるらしい  
校長も市長も来てる甲子園  
幸運の女神はいつもいけずする  
不運な隣で止まるルーレット

伊丹市 小熊江美

老いてなおパワーをもらうイヤリング  
無料パス用も無いのに良く出掛け  
村を出た少年茶髪でアルバイト  
亡き夫の年を数えて倍も生き

宝塚市 黒台伊佐武

雨上り堰を切ったか虫時雨  
ちちろ鳴く闇の深さよ恋悲し  
患うた医師を見舞って力付け  
ボチボチで程々が良い世渡りは

二度おほこ団子一つに伊部焼き  
相生市 中塚礎石

言い訳が過ぎて気がつく伸びた爪  
見えぬ癌なんのこれしき生きている  
ネクタイをたまに締めると風さわぐ

兵庫県 大谷 幸次郎

下宿代送るばかりの片便り  
空っぽの倉が見栄はる白い壁

神さまに大吉などとおちよくられ

エリートが天道さまを軽くみる

鳥取市 西村 黙 光

樂焼きのチヨコで女房と酌み交わす

汚れ行く地球気に病む土の精

ぶつかった壁に根性試される

誤字脱字脳細胞のテストする

鳥取市 富山 檳榔樹

連れ舞いの紋白蝶に風が止む

灯には虫人間欲に群れたがる

ご先祖は遺産隠せと言わなんだ

長短の人生運は星が知る

米子市 鷺見 正子

背をまるめ影がため息ホツとつく

華やいだ宴の後の夫婦箸

乾杯の盃にいたちちろ虫

悪妻としみじみ思う秋の冷え

大吉のおみくじ抱いた七五三  
今めげた陶器のかけらついで見る  
もみじして呼吸ととのえ春を待つ  
大安日選んで服を着初める  
米子市 木村 春枝

整然と針目の揃う老母の生き方  
住めば都二人の墓地は決めました  
天職と定めた父の木挽き唄  
しみじみと割ったお皿の価値を知る  
倉吉市 淡路 ゆり子

東北の旅にて  
山頂のお釜の水の青さかな(蔵王)  
津軽弁夢見ごちで聞いている  
磐梯の影を映した五色沼  
鳥取県 権代 康女

十和田湖の乙女の像の清らかさ  
ねらったた賞品からは見放され  
終了が延びてそろそろ陽が落ちる  
引き時が探せないまままだ喋る  
とぼとぼとすればあつちに追いやられ  
鳥取県 西川 和子

思い出のリボン宝として残す  
弥次馬が人の盲点突きたがる  
騒ぐのは止そう名指しにされるから  
悲しみの通夜に遺産で揉めている  
鳥取県 幸家 單車

鳥取県 林 露 杖

朝と夕に風情それぞれ秋の風  
ジョギングの少女と会釈風は秋  
めらめらと音たて燃えるものが欲し  
一年がストーンと老いの十二月

松江市 佐野木 み え

温泉に入り見渡す日本海  
旅人が朝の砂丘にしばし佇つ  
湯の宿で親子で飲んだ酒の味  
カーテン引き自問自答を繰り返す

松江市 安食 友 子

トロフィーに拍手を贈る好敵手  
トランプを愛してつづくひとり酒  
マラソンの孤独な汗に引かされる  
半額に躊躇している見栄っ張り

出雲市 板垣 夢 酔

芸のない僕は酒注ぎ専門官  
たつぷりと喋って時計見てあわて  
不況風 株も預金もないわたし  
逢いたくて一気 吊り橋渡りきる

出雲市 小白金 房 子

出かせぎの電話も重い不況風  
財宝はないが心の富築く  
彼岸法要 心の鬼と寺まいり  
羽根のばし遊ぶ女の赤い爪

出雲市 久 谷 まこと

安らぎを希って今日も香手向け  
ときどきは歳に似合わぬ派手づくり  
強すぎて相手でみんな火の玉に  
胃カメラのひそひそ話疑われ

岡山県 荻 野 鮫虎狼

螢籠子供なかなか寝つかれず  
本心を捨てた男の無言劇  
淋しい日捨てた夫の顔がある  
小波の間平和な世を眺め

竹原市 古 谷 節 夫

台風が予報通りに来る怖さ  
レイアウトどおりにゆかぬ六十路坂  
お喋りとでしゃばり魅力ないオンナ  
情熱の火花を知らず陰とイン

美祿市 安平次 弘 道

人格はどうあれ小金ためている  
泥舟に乗れば女が強くなり  
嘘一つ書けば自分史嘘になる  
宇宙旅行夢の続きを見えています

第34回川柳塔きやらぼく忘年句会

と き 12月6日(日) 10時開場・12時半出句締切

と ころ 米子市観光センター(皆生温泉行きバス終点)

題 耳・板・中・回る・塩・ティー・そして・暦

会 費 4000円(昼食・懇親宴共)各題2句

連絡先(林)

☎0859・22・4213

# 自選集

遠山可住

腰痛に効く体操を三日ほど

もう飲んでいいのよ墓前のワンカップ

旧道の夕陽に溶けるわらべ唄

みんな供えてすっからかんのありがたさ

いろいろとあったが秋の風になる

藤村 女

ほんとうの歳がささやくイヤリング

いやなこと忘れなさいと風が言う

いくつもの迷いを抜けて来た米寿

四代を生きても悔いない座りだこ

新世紀生きるつもりのお土ふまず

波多野五楽庵

紫の色淡かりし消えやすし

軽蔑に耐えて雪など如何にせん

自動ドア雪は無限の一字のみ

予定から未定に変わる雪ざらし

自殺未遂テレカ一枚落ちたまま

野村太茂津

戦友の御霊師走に香焚いて

あれから四年まだ物を言う腹の痕

軽い眩暈で妻も時々音をあげる

体力は無いが気力は年を越す

来年は来年こそはもう一度

藤井明朗

秋の食欲通り過して商店街

菊の香りが日参させる品評会

爽秋へ自信が湧いてきた健康

歳のせい言訳にするわびしい身

十二月節約ムード言い聞かせ

松川杜的

大声で喚いているのは向日葵か

風の盆 風の盆という銘菓買っ

「日本百名山」標高なら未だ覚え

「きょうの健康」12チャンネルを見ている

サロンパス女の電話まだ続く

恒松町紅

生き残りの話が出逢う喜寿二人  
ワープロは埃を被りペン達者  
着こなしも上品血筋争えぬ  
痛くないから孫馬鹿を續けてる  
こんな年振り返りたくない師走

辻白溪子

お隣の花を供えている仏間  
お粗末なサインを嬉しがるファン  
待たされる時間を知っている吸殻  
外は雨うれし かけ込む店がある  
父に似た脳の悪さをあきらめる

小林由多香

飲んでから話す内緒は洩れやすい  
休肝日誘い断るのに迷う  
少年が堂々たばこ吸う歪み  
松茸の出る場所それは秘密です  
日記帳散髪だけで今日終る

西田柳宏子

小さい夢抱いて傘寿の新春迎う  
世渡りが下手です不況生き延びる  
凄んではいるがタメイ傷ばかり  
元値です原価切れです儲けてる  
欺すより欺されている方がいい

月原宵明

石鎚を仰げば心大きなる  
時代劇好き悪人が消えるから  
親も子も頑固おんなじ血が通う  
年金へ遂に増税通知来る  
残りものひと時おいて食べる母

正本水客

指先に今年も秋が生きている  
弱虫の自分に気付きおかしかり  
結び目がわからぬままに冬がくる  
犬連れて昨日と同じ道があり  
深呼吸大事な事を思い出す

野田素身郎

句数やつと揃い深夜の床につき  
何もかも予定が狂う孫が来て  
偶然か運命なのかまた出会い  
残念ながら出る幕がない来世紀  
術後五年杖にも馴染む後遺症

金井文秋

日々思う元氣米寿になったとて  
夢を持って集まり夢が消えて散り  
思い切った対策聞いて久しいが  
テレビで受けるやんちゃ腕白おてんばも  
糸切歯そんなんあったなと入歯

銀杏散る視線へ一会ある重み  
七光り無いが飛びたい竹とんぼ  
意地出して火の彩の画布ひきさこ  
風向きが変わり二人は元の鞆  
相好を崩し夫婦の茶番劇

小西雄々

黒川紫香

ひとつ目の辻で待ってた片えくぼ  
妻の居ない日だゆっくり飲んで行け  
体温が伝わるような肌の色  
だんだんと忙しくなつて来て冬に  
機が熟す僕から先に動かされ

宮口笛生

国産の松茸買える値ではない  
台風に泣かされました農作業  
秋夜長友が一升持つて来る  
休肝日作れと医者のお親切  
正論をもみ消しにする多数決

高杉鬼遊

落合も野村も去りぬプロの秋  
舌うちをしたとて変わらぬ政治  
酒買いにゆく観音とすれちがい  
奥さんの方が偉いと何を言う  
白い嘘そんな顔する夫なり

あなたもう齢ですなあと膝が言う  
どこに魅力あるのか野良犬ついて来た  
ポックリ寺のツアーで老人よく喋る  
済んだことくどくどと言う妻になり  
無位無冠しんどい仮面取りました

阿萬萬的

板尾岳人

爪を切る風と暮らして十二月  
走っても走らなくても十二月  
十二月板尾岳人は十二月  
五十年振りに登った千里山(関大一高五〇周年同窓会)  
商品券早く下さい十二月

八木千代

券売機余分な券も出してくる  
中央特快降りて迷えば同じこと  
地下ホームなるほど地底まで降りる  
四谷怪談などと階段からひよろり  
逆方向に乗っても一人ならよろし

河内天笑

僕のモノサシであなたは裁けない  
議員さんあくどい手本見せすぎる  
天下る日を指折って数えとる  
五〇〇キロ上から絶景かな地球  
生ビール夏が逝っても夏が逝っても

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(95)

橘 高 薫 風

この年の路郎先生の雑詠は先に紹介したが、ここで句会での課題吟を抄出する。

先生の作句の上の個性が垣間見られると思ふのである。

止むを得ず遊んでいるに十二月

裏口でしっかり借りた五十銭

呑まされている訳知らぬ善人さ

猪はお地藏さんで道を変え

牡蠣船でさっきのつりをあらためる

あの巡査焚火仲間にされている

死の間際までジャンケンをしていた子

父が出す金と知ったで言いそびれ

手後れへ博士すげのう立ち上り

手後れと言わずやんぬるかなと

茶屋の拂いこれも不渡りかと思

二階のに聞かされている河豚の味

禁酒して名所も寒いとこにされ

足並を乱す一人に社長の子

自動車でおちよやんひとり戻って来

チヨコレート春の日永を思わされ

拳手の礼道頓堀はどちらです

西部戦線わが重貞に異状なし  
酔醒の又忠孝を説く身なり  
花婿へはこりたたきの音もよし  
金借りに来たのも連れて松竹座

僕等ばかりの送別会と又誘い

長襦袢廊下の端の端へ消え

染直しして女房の紋になり

浪人をして支店へだけは寄り

支店とは名のみ丁種と二人きり

さびしさは洋傘の影老いの影

職人の吹く尺八の天の川

職人と見えぬマントへ身を包み

晩酌は虫が鳴こうが鳴くまいが

次いで路郎選による川柳塔欄の句、この時

代は作品の最も充実した頃と思っていたが、

案外に低調で一月号からの半年間でやつと三

十句、期待外れであった。(新版名遣いに改める)

昼の月なんば新地で引つばられ 須崎豆 秋

直角に質屋の中へ折れ込んだ

ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる

拳手の礼道頓堀はどちらです

なにゆえとなき淋しさの本を閉ず 山本丹 路  
かかる夜の雪女さえしたわしく  
御ン歳は三十がらみ観世音  
大濱で呑んで蛤の籠寒し 西田 艸 染

ちと変にあまえる夜なり松の内

昼よりは夜を恋う身なり哀れなり 増位汀 柳

人待ては待つ人に似た人多し

姑は揃え直して履くのなり 喜多春 秋

帽子の名川村太郎という子だな

野猪の如くにと日記に書きしかな 日野華 水

二人切りになったその時鳩時計 大鶴喜 由

金言の額が裸体にかわつてた 明石柳 次

宿下駄のまんま祭の人となる 福田山雨楼

腹の皮のばして冬を歩き見ん 西いわを

名人の名刺も出さず帰るなり

春団治さっぱりわやになりける 吉田水 車

電燈を上げたり下げたりする暮し 江戸みつる

威厳とやらに関する如く笑わない 市場没食子

静物の一つ老僧歩めども 関本雅 幽

飯は子に炊かせ国防婦人会 後藤青 児

一天の曇りなき日の朝辰り 朝田新 水

あやまちがあやまちですむいい若さ 荒井英賀夫

脳病院窓から菜種見えるところ 曾我部宵 明

伯耆から出雲へは入る風にあい 三鴨美 笑

鉄瓶が沸いて来るのもしず心 安川久流美

君の青私の青と違つ也 麻生霞 乃

## 森下冬青

東野大八

に相通うものがあって、一茶の作品と豆秋作品が握手しているのである」（『川柳雑誌』昭36・5刊）。作品は人間である。森下冬青）  
いささか長文の引用で恐縮だが、この筆者の川雑誌上で唯一の寄稿文は、これ一篇だけで、この人の豆秋作品の入れこみ様がただならず、この豆秋追悼文を読む底に、語り手の川柳観がそくそくと胸をうつ。

この川雉と疎遠の森下冬青が、川雑誌32・9刊誌上に「川柳家の二十四時」No.15に写真入りで掲載されている。その冬青一日の動静を興味深いところだけ左に抄録しておく。

「金沢柳界では、冬青は坊主になったとの噂がとぶ。火のないところから煙はた、ずだが勿論坊主を職としている訳ではない。在家教壇の機関誌編集でちよいちよい法話に行く。ここらが噂の種らしい。宗教機関誌編集、新聞柳壇、雑誌「蟹の目」61号の編集……」

「昭和26年1月頃から神経痛を病み、本職の染画工とともま、ならず休職。他人から「職業は？」とたずねられると、うっかり「川柳作家」と返事する。収入は煙草錢ぐらい、税務署の対象には全くなり得ず……」

ここに奥美爪露著「石川近代川柳史」というのがある。著者から惠贈を受けたものだがなかなかの力作。筆者の一級資料だ。ここに

「二、三の若い作家が、先輩作家に評論が無いという。これはもつともな話でよく解る。それにしても、先輩連中に理論が無いというよりか、まず大いに理論を吐いたり書いたりすることを若い人はやるべきだ。先輩作家の吊り上げでもよい。詩論でも芸術論でもよい。ただ理論は作品向上の理論ではなく、川柳作家と自負するならば、作品向上とは程遠い理論のお遊びであつては困る。と若い人達に言ったことがある。

須崎豆秋さんは、私の知っている限りにおいて、余り理論を川柳誌上に書いていられなかった。でも豆秋作品が無言で今日の川柳作家に教えていられる。で、理論を書く人、理論を吐く人、理論を言わない人、人それぞれの個性であつて、要は川柳作家の自負が主点

でなければいけないと私は考えている。

また川柳作家として一家を成すべきである——というなら一体全国でどれだけ一家をなす方が居られるのか私にはわからない。然しながら須崎豆秋さんこそ一家を成した方であつて作品からじみ出るところの豆秋さんの人間が浮き彫りになっている。作品において嘘がない、おどかしがない、それに風呂上りのように人生社会の汗とアカを落した、サツパリしたのも感得できる。

波乱万丈の小林一茶の65年間の生涯を私は知らないけれど、豆秋さんの69年間の生涯はやや似ているものであるにしても、同じでは決してないはずである。

結局、作品から読者の胸をノックするものは、温かさ、懐かしさが一茶作品と豆秋作品

は冬青をめぐる石川県川柳界の歴史が詳細に記述されている。その中の冬青略歴。

明治37年6月14日金沢市生れ。本名治作。

別号冬声・白々坊。冬青の句が見えるのは、大正11年7月の北部川柳社月例句会からで、義弟の白葉子の尻押しと思われる。金沢新報

柳壇選者の酒井雅楽頭に師事して川柳革新運動に刺戟を受け、革新川柳と称する。『そよこ』

『海鳴』を發刊したが、やがて息が切れ、昭和6年雅楽頭の後を継いで新報柳壇選者となる。昭和8年秋山海生主宰の『擬宝珠』客員同人に迎えられ、同誌に影響を与えている。

昭和18年頃、東京の和田天民子らの俳詩運動に共鳴して、広瀬佳鳳らと俳詩石川支部を設立した。終戦直後の昭和21年、早くも「蟹の目川柳社」を興し「蟹の目」を發行。一時「自画像」と改題して冬青個人誌となったが、再度「蟹の目」に誌名を戻した。現在も通巻四〇〇号を超えている。

冬青は生涯にわたり、川柳の文芸性向上を志し、川柳を通じ觀念の世界を透視すること人間性の探求を続け、晩年は在家仏教者として宗教即川柳の境地にあった。

初代石川県川柳作家協会の会長に推され尽力するなど石川の柳壇史上に輝かしい足跡を残した。句集『うみなり』随筆集『ぼかたん

人生』等がある。

昭和60年5月29日鉄芽性貧血症という珍しい病名で石川県立病院で死去。享年81歳。

生前の麻生路郎川雑主幹は、筆者との酒談でよく金沢の旅のなほしを愉しそうに口にされていたが、その中の一くさりに

「戦後程なくのことだったが、西本三笑という友人宅で、安川久留美や、森下冬青らと愉快に一パイやったが、その時に出た。『さしあみいわし』のうまかったこと、よう忘れんよ。冬青は、金沢名物の友禪の手描き職人だったそうだが、病気でやめて川柳一筋で通すといったのにエラク感心したが、久留美といい冬青といい、金沢にはスジ金の通った見事な川柳人の多いことに感心したよ」というのがあった。

ともあれ食糧事情の悪い敗戦直後のわれわれは、旅先で不意に出会った地元名物のあれこれこそ珍味佳肴として舌先に躍動するのだが、戦後も半世紀の今では、こんな生き甲斐のあるうまいものに出会うことも少ない。

麻生路郎川雑主幹も、この金沢のさしあみいわしの味を忘れ兼ね、森下冬青を、川柳家の二十四時」の写真つき二頁の川雑に冬青の席を設けたわけでもあるまいが、幾度も訪れた金沢の味は、今も、さしあみいわしは別と

して、忘れ兼ねるエピソードは沢山ある。

山田良行日川協理事長にあえば

「金沢はうまいものがいっぱいある。そこに住んでいられる貴方はホンにしあわせものですね」

とよく言ったことである。

筆者らも一度、金沢で川柳大陸同窓会を開いたが、未だにこの加賀百万石の味、川柳のだいご味に添えた郷土自慢の金沢の味はあれもこれも記憶に新しい。

右の同窓会では、山田良行会員の地元とあり多くの川柳人との出会いがあつて、ホンのワンカット、黒い背広姿の冬青大人と顔を合わせたが、鮮明な記憶にはない。

以下『石川近代川柳史』上から冬青作品を拾っておこう。

一輪の花をのぞけば蟻が居た

遠い女だった膝の冷えを撫で

黒をかき分け黒より何も見つからず

箱の中その空間で阿呆かいな

弱い魚もいて海は夕焼ける

銃口の暗さへ命ながれ続く

善悪の溶け合い妻と僕の畳

花たくさん戴き寝棺の重さかな

誰だ おれの屍をかつぐ冬の花

▼次号は「三浦秋無草」

## 『歳末風景』

清 博 美

師走半ばともなれば、世間は急に騒がしくなつて来る。目の前に控えた新年を迎えるために、人々は大わらわになる。

## ○煤払い

師走の煤払いは概ね十三日と決められていた。『増補江戸年中行事』十二月十三日に、「す、納、武家町方ともに此日専す、はき成り」とあり、『東都歳事記』にも、「煤払、貴賤多くはこの日を用ゆ。大城の御煤払の例は、寛永十七年庚辰十二月十三日に始まりし由」などと記されている。

当日は、近所に煤払いする旨をことわり、一家みな類かぶりにたすき掛けの出で立ちで大掃除をし、最後にお祝儀として、主人以下一同の胴上げをして、目出度くはき納めると

いう習慣であった。

\*

四たびめの竹ハめでたく黒くなり

拾八 28

―正月、七夕、盆、四度目の煤払い。

二四 35

女竹から男竹へうつるいそかしさ

二四 35

―煤払いから門松へ。

二四 35

老人もの一トなぐりだと笹をかい

六 7

―独り者が大掃除をするとは感心。

六 7

両隣へ届け畳ミをむちうち

宮二 5

―両隣へ断りを言つて。

宮二 5

取次に出る顔の無イす、はらひ

初 4

―皆埃まみれなので、来客に応対が出来ない。

初 4

十三日梅へうぐひす籠をかけ

三三 3

―飼っている鶯をいたわつて。

三三 3

あいた口へもちを入れる十三日

安七 鶴 5

安七鶴 5

―おやつを餅を直接口へ入れてもらつて。

天井へ下女のくつつく十三日

安四 鶴 3

―胴上げされた下女が宙を舞う。

安四 鶴 2

年よりハだいたりの十三日

安四 鶴 2

―年寄りは胴上げの真似だけ。

安四 鶴 2

飛込んでこよふがす、の仕廻也

五 25

―風呂へ飛び込むと煤払い終了。

五 25

## ○餅搗き

『東都遊覧年中行事』の十二月廿六七日に、「此頃迄にもつはら餅つきあり、賃搗にて餅屋に搗かせるを賃餅といひ、釜を持ありきて搗を引つり餅といふ、是等は町家にて便利にしたがふ事なり、引すり餅は通夜(よどほし)の業なれば、深夜の街上、寒月の下に餅つきの音をきくは、昌平鼓腹の光景なり」と記載する。

正月の餅を搗くのであるが、これには特別に決まつた日はなく、およそ二十日過ぎから廿六七日頃までに行われたらしい。

\*

餅ハつく是からうそをつく斗

初 36

―間もなく掛取りとの攻防が始まる。

初 36

夜ツびとい地主の餅でねつかれず

五 40

―一晚中餅を搗かれて寝られず。

五 40

とんだかわい、御備を大屋くれ

傍三 2

—大屋から店子に鏡餅が配られるが、それはしみつたれた鏡餅。

互に義理を照し合ふ鏡餅 二二二32乙

—餅を搗くと「配り餅」といって、親戚知人等に配る習慣があった。本句の場合はお互いの配り餅。凶らずも鏡餅の交換となる。

さつ／＼とくばれと渡すかゞみ餅 五13

きり／＼くばれ師走だぞく 二二42

—配り餅ものんびりやつてはいられない。

大道へかまどの出来るいそがしさ 傍四3

—貨餅搗が道路に竈を据える。

こねとり八尻のかゆいをもてあまし 九24

—濡れた手では尻も搔けない。

すまぬ事となりてハもふ餅をつき 九40

—我が家ではまだ餅どころではない。暮れの支度が遅れている。

### ○年忘れ

—現代で言う忘年会を当時は「年忘れ」と言った。

「年の暮に、親類朋友互に酒宴をなすをいふなり。唐土にも此事あり。名づけて潑散又は別歳といふよし、東坡集にも出たり」と、

『改正月令博物笥』は記している。

—無礼講で、はちやめちやな酒宴を催し、一

年の憂さを晴らしたのであろう。

\* 四8

月ツはくに寄て一ト夜さのみあかし

—「月ツはく」は月迫と書き、押し詰まつた意。徹夜の年忘れ。

としわすれとなりハあるかないかなり

—辺り構わずの大騒ぎ。

来年の樽に手のつく年わすれ 三19

—正月用に買った酒に手がついてしまつ。

年わすれとなりでも今朝おそく起 傍五34

—隣も年忘れをやつた訳ではない。騒がれて寝られず遅く起きたのである。

年わすれそろばん咄しよせといふ 明六桜1

—この場に及んでも仕事を忘れぬ男。これを野暮と言つた。

年わすれとうく／＼老人水をあび 四19

—行灯をひつくり返して、消火用の水を浴びる。

翌日は店を追はる、年わすれ 初17

—大騒ぎの結果、大家の怒りを買う。

○掛取り

—当時の支払いは節季払いであつた。つまり盆前と年末にそれぞれの買掛金や未払金を精算するのである。従つて、普段から用意して置かないと、その支払いが出来ない勘定にな

る。しかし、これがなかなか出来ないのである。そこで大晦日には、債務者と債権者の攻防が徹夜で展開されることになる。

\* 五30

大三十日きもにこたへる頼ましましよ

—掛取りの来訪の音が……。

つかわれぬやうにかけ取りひよくら来

—居留守を……。

つねていのうそでハ行ぬ大三十日 明二義5

—普段のような生ぬるい言い訳は通用しない。

寝たかつて懸取を待ッ能イ工面 一一17

—中には準備万端の人物も居る。

いつかい、春におもてハなつて居ル 安五智1

—二年間にわたり「古川柳歳時記」を書かせていたが、意図的に文献を多用しましたので、現代川柳をやつて居られる皆様には退屈だったのでないかと思つております。このテーマはここで一段落し、新年号からは、「誹風柳多留二四篇研究」を掲載させていただきますことになりました。相変わらずのおつき合いをお願い申し上げます。

# 秀句鑑賞

同人吟 内海 幸生

—11月号から

秀句鑑賞のご依頼を受け川柳塔欄の全句を拝読し大変勉強させて頂きました。編集部からはあまり多くない句について鑑賞文をとのことでしたが余りにもいい句が多く拙い鑑賞文で紙面を埋めるのは勿体ないので、鑑賞文を削り秀句を多く頂きました。

以前、恩師西尾葉先生に「川柳とは」とお尋ねしましたら「川柳とは愛の文学です」と教えて頂きました。何にでも愛のフィルターを通して物を見つめること、愛の心で句を詠むこと、一読誰でもよく句意の分かるように、今も私はその教えを心に刻んでおります。

さて先ずは川柳塔欄の看板、巻頭句から  
八月は苦い月なり黙禱す

新家 完 司

八月六日、九日、一五日、八月は我々日本人にとつて、戦後半世紀以上たつても忘れることのできない重苦しい事が連続した月です。敗戦の虚脱感から立直るまでの日々、長いトンネルの中の苦しき、虚しき、やり場の無い怒り、死んで行った人も、生き残った人々

にもそのやるせない思いは決して消えることはなかった。沸々と湧きあがる苦い塊を腹の底に吞み込み皆必死で働いたのです。そしてやっと今日を得たのです。戦争で亡くなった人、戦後の復興の過程で死んでいった人、その人たちの汗で今日があるのです。その人たちに応えるのは空しいけれど、祈れるだけ。

改めて八月とその人達に「黙禱」。

生き残るため枯れ草に火を放つ

鈴 木 公 弘

環境問題は百も承知だけどうする以外仕方が無いのです。外に方法があれば教えて！

子が帰る独りの部屋の風の中

清 水 絹 子

叱られる孫へおろおろしてるだけ

山 本 半 銭

一読とてもよく分かる川柳味のある句だと思います。頷いて居られる方も多いのではないのでしょうか。孫の句は詠むなと言ふ人もありますが、子より可愛い孫を詠めないのも、不自然かと思ひます。

旅に出る鉢にいっぱい水をや

小 枝 ふさふ

他人さまから見ればありふれた花や木でも一鉢一鉢に大切な思いがあるのです。帰ってくるまでどうぞ枯れないでおくれと祈るのみ。石垣の石の絆を見て飽かず

森 井 菁 居

がちりとした石組みを人と人の絆のよう

に捕え詠みあげられたのは見事です。

諍った日も何気なく茶が入る

早 川 盛 夫

知人で夫婦喧嘩の最中に主人が振りあげた手に奥さんの髪飾りが刺さり血が出ました。

慌てた主人が「赤チン赤チン」と叫ぶと奥さん

も大慌てで、赤チンを取りに走り傷の手当てをしていました。

夫婦とはそんなものではないのかな。

苦むせばどれも変わらぬ兵の墓

市 丸 晴 翠

兵の墓が一番多かったのは先の尖つた細長い墓だったように思う。戦争中はよく手入れが行き届き墓参の人も多く花や線香の絶えることが無かった。

墓標には階級も刻まれ、近寄り難い威厳があった。苦むした今は野の草花に護られて平等に安らぎを得て居られる。そう思いたい。

隙のある人に深読みしてしまう

神保 坊太郎

どう見ても隙だらけに見えるけど？敵を欺く術なのかも？信じたいけど迷います。

父さんの酒はうまいと子は信じ

岸 桂子

そうですね。本当にうまいんです、子らと一緒に食卓で呑む酒は、義理もお世辞も不要です。

デパートで妻が血圧下げてくる

美田 旋風

不用意な一言が妻の血圧グッと上げブイと飛び出して行ったけど、結局デパートで少し高めの服を買い、やっと血圧下げました。

医者のかすりより良いのかも？

長男の扶養家族にしてみたらう

土橋 螢

今までは世帯主できたけれど色々事情がありまして、此の度長男の扶養家族になりました。保険証の扶養欄をつくづく眺めています。

皮肉ったのにふかぶかと礼言われ

河内 月子

アングリと開いた口が見えるよう、でも憎めない人なのかも、悪人で無かったのが救い。

遊び上手忘れ上手で生き上手

宮西 弥生

身近なところで見渡せばいるいる。けれど

他人に迷惑をかけるでなし、とやかく言われるすじ合も無い、一種の世渡り上手かも。

近頃トゲトゲした世相、何とかうまくリードして、楽しい世間にして欲しいもの。

挨拶はいらない南向きの部屋

小池 しげお

立派な応接室に気取って通されるよりも、少しぐらい散らかっていても（失礼）南向きの暖かい家族団樂の部屋へ通される。これ以上のご馳走は要らない、温もりの伝わる句。

私が掃いたから妻がまた掃く

滝北 博史

余程綺麗好きの奥さんか、自分のポジションに誇りを持っておられるのか、自分の守備範囲を侵されたと思われたのか。拙宅などでは動かぬ私をケシかけるとも、万一私が掃いたとしても当り前。決して掃き直しなど。

乾盃する背中のみならず隙だらけ

堀端 三男

喜びのとき人には必ず生まれる隙を見事に突いた秀句。まだまだいい句が続きます。下手な鑑賞文は止めて秀句を次に掲げます。

借りるとき拝み倒してそれつきり

川島 颯風児

傷口をじわじわ開く人の口

川上 富湖

近道がズボンをぬらす夏の草

麻生 アート

庭に花咲かせて笑いの洩れる家

岸本 豊平次

衣装分けしつけの糸が付いたまま

島 ひかる

種なしの西瓜に夢を託せない

菊地 政勝

FAXは計報と地図を音もなく

竹内 紫鏞

逃げられた小鳥が庭の隅に居る

斉藤 島

法守り走る車が邪魔にされ

岩原 喬水

枯れてゆく木と知りつつも鶴を折る

茂理 高代

喜色満面いまさら嘘と言えませず

山本 玲子

夫の手の記憶うすれて秋深し

神原 文

カラフルな薬とれかが効くだろう

浅野 房子

亡母からの便り時雨に濡れて着き

吉岡 美房

息切れの部下を労るコップ酒

北岡 波留吉

# 先輩 ↔ 後輩

川柳界にはいろいろな意味での先輩・後輩があるが、その交流・思い出・句の感想などを誌上で語り合っていた。

## 後輩の好漢

本吉宗光さん

小西雄々

川柳塔で、心の通う立派な後輩に沢山恵まれ、私は幸せですが、今回は、本吉宗光さんを組上に乗せました。

彼は現在七十五歳、川柳作句は昭和二十五年に始め、本格的に川柳と取り組んだのは、昭和四十二年「出雲からさて」川柳会に、初投句してからと聞いている。

その後、米子市の川柳会へ入会し、研究心の強い彼はめきめきと腕を磨き、五十年代の後半には、全国的な柳社の同人として、暫く活躍されていたが、どうしても川柳塔社同人の仲間に入りたいと、その同人を辞し、待つこと数年、今年二月、私と松下たつみ氏(故人)で同人に推せんし受理され、一層活発な川柳活動を続けている。昭和五十九年には川柳句集「道しるべ」を発刊し、祝福を受けた。

平成五年五月には「米子にしき川柳会」を創立、月刊誌『川柳にしき』を発行し、この十月で六十四号になる。

月例会も欠かさず開催し、句会のあとはカラオケで自慢の喉を披露し、句会での緊張感を解消するというユニークな発想もある。

創立一周年、三周年、および五周年記念川柳大会を、その節目には盛大に実施している。

彼はまた、エッセイにも優れた才能を持ち、政治、経済、文化と多様で、鬱勃たる公憤を叩きつける、血の気の多い面もあるようだ。

宗光さんと川柳の話をする時、時間の経つのを忘れる。好漢、宗光さんの益々のご健吟をお祈りし、今後とも応援を続けてゆきたい。

## 川柳の塊

先輩の小西雄々さん

本吉宗光

風邪で寝て働き蜂の背が痛む 雄々  
青空へやさしい言葉まつ私 雄々

小西雄々さんの川柳には、常にポエムが盛られている。師と仰ぐ麻生路郎師の薫陶によるものだろうか。

川柳塔の平成十年七月号二ページに、雄々さんが「麻生路郎師を偲ぶ」と述べておられるが、川柳を始められたのは昭和二十四年四月からだという。昭和三十年四月、松露川柳会の創立以来、川柳道のより美しく、より楽しいものを目指し、常に前進しておられる。

昭和六十一年十一月、物故者供養松露川柳大会を開催している。創立から三十年経過して、前会長の三鴨美笑氏をはじめ、二十名のご冥福を祈った。地元の米子市と島根県からも参加があり、約八十名の出席者であった。

また、平成二年九月、句集「松露」発刊記念川柳大会を、米吾ビルで開催した。川柳塔本社から、当時の西尾菜主幹、橘高薫風理事長および副主幹の黒川紫香、野村太茂津氏等川柳塔社幹部のご出席があり、県内外からのご支援もあり、出席者は百五十名を越えた。国鉄一筋、定年後も後藤興業(株)と国鉄関連

会社に勤務され、課長から取締役の経歴をもたれる小西雄々さん。何事も真一文字。

私が平成五年、米子にしき川柳会を創立した時、雄々さんには麻生路郎師譲りの、「川柳とは何か」を、懇切丁寧にお話して頂いた。

本年二月、私が川柳塔社同人になったのは、雄々さんの推せんのお陰だと感謝しています。



### 先輩は路郎賞

### 後輩は川柳塔賞

小島 蘭 幸

森井菁居さんは、川柳の先輩であり職場（竹原郵便局保険課）の上司でもあった。その菁居さんが昭和52年度の路郎賞を左記の作品で受賞された。

生き方の違いを敵のように言う

当時の川柳塔社主幹の中島生々庵氏は受賞作について次のようにコメントされている。

「人生の世渡りをはっきり捕えて居て、エゴに似てエゴではない。結局男一匹の姿であろう。作者の進展ぶりが近來特に著しいのを感じる私は一入ご健吟を祈る一人である」

菁居さんは昭和40年4月に結婚された。その頃の作品を紹介させて頂く。

エンゲージリングご縁を不思議がり  
愛すればこそこの冬をこの坂を

終点が無い愛情を誓い合い  
お揃いのパジャマ明治の目にまぶし  
さわやかな感動あなたと呼んでくれ

当時17歳の私にはお揃いで句会に出席される菁居ご夫妻はともまぶしかつた。よし私も恋の句を作るぞと思ったのだが……恋百句贈れるひとがひたに欲し……で終ってしまつた。今、菁居さんは60歳になられる。三年前に職場を勇退されて悠々自適の彼は、平成11年2月に句集「愛すれば」を発刊される予定だ。とても楽しみである。

一方、後輩といっても三宅不朽さんは、竹原川柳会に入会されたのが私より6ヶ月遅いだけである。初めてお会いしたのは昭和38年11月の文化祭句会であった。その時私15歳、不朽さん34歳。

請求書見られかえって気が休み

初参加の句会でいきなり天位を取られた不朽さんの作品は歳を重ねることに厚みを増してゆく。そして彼もまた昭和42年度川柳塔賞を左記の作品で受賞された。

雲の峰あるけばあるくほどひとり

記念すべき第一回の川柳塔賞を受賞して不朽さんは「背筋からゾツとするほどの驚きでした。真実なのだろうか、まだ実感が湧いてきませんが、ゆっくり感激を味わいたいと思っています」と受賞のよろこびを書いておられる。この年の不朽さんの活躍は素晴らしく多くの佳句を発表されている。

とぼとぼと動く灯とぼとぼ動く闇

白紙凝視喜怒哀楽の無尺藏

春愁の花弁づたいに夕日落つ

なすこともなく脈搏を見えたり

このように、みんなから不朽調といわれる程に風格ある作品を発表され続けた不朽さんだったが体調をこわされて平成6年から3年間、作句を中断された。しかし平成9年11月の文化祭句会で見事に復活された。

菁居作品の深いところで自分を見つめる眼と、不朽作品の格調の高さにはずっと憧れてきた。お二人のますますのご健吟を祈る。

### 後輩小島蘭幸君

を語る

森 井 菁 居

君との出会いは約三十五年前にさかのぼる。外柔内剛長男として生まれける 蘭 幸

これは昭和五十二年五月発行、結婚記念句集「再会」の中の一句である。彼は昭和二十三年三月二十日生、三十八年三月竹原川柳会入会、四十二年六月には川柳塔社同人となっている。しかし、いが栗頭だった当時の彼は今の貫禄とはばしる風貌には似ても似つかない、モヤシのような長身と無口がほどよくつり合い、好漢蘭幸への成長は疑う余地はなかったが、その後、私と同じ簡保マンに変身しようとは……。人生は小説より奇なりである。

師山内静水歿後は新進気鋭の会長職をこなし東奔西走の身である。「蘭幸」を語るとき、ドラマチックな再会を果たした愛妻尚美さんと、ファミリー存在を避けては通れない。その人生ドラマの中で、彼の人間性は着実に磨かれ自己陶冶がなされて行ったに違いない。外柔内剛的な性格は今もって物足りなさを感じる時もあるが、それも彼の持ち味であろう。そして、いつも豊かな精神生活を目ざしているロマンの男蘭幸君!!

羊の瞳の中の炎を見ましたか 蘭 幸  
竹原川柳会のアイドルはいつの間にか「川柳塔」の貌に変じ、「日本」の貌になろうとしている。君はまだ五十路にさしかかったばかり、豊かな感性を更に磨いてほしいものである。

## 後輩へ

尼 れいじ

良き後輩の一人に竹治ちかしさんを選んだのは、年がかなり下というのも理由の一つです。私が正式にいずれも川柳会へ足をつっこんだのは父が亡くなって一二年してからです。で、ちかしさんを後輩と呼ぶのは失礼かも知れませんが……。ただ、柳歴は私の方がかなり古く、十九歳頃千葉の市川市に二年半位住んでいた時、近くの小さな医院の前を通って見かけた「川柳句会は○日です。宿題は○○」に早速、作句し届けたところ柳誌が届けられ、「凝る」という題で「天」になっており、びっくりしたのを今も時々思い出します。

それから時々新聞に投句など続け、帰郷してからは父に雑用係ということで句会にもひっぱり出され、作句もいくらかやっています。だが、ちかしさんが入会した頃は十数年の間中断していました。

久家会長が亡くなられ三代目会長に推されたからは、それこそ先輩後輩に助けていただけながらどうにか続けております。また、何かと猷身的に動いてくれるちかしさんに感謝

しながら甘えている現状です。彼は作句数も実力も私の上を行き、嫉妬さえ感じています。が、嬉しく、また頼もしくも思っています。

近詠の「親に似た道を歩んで親の顔」というような父母を題材にした佳吟が多く、今後はこのような句の他にも目を向け、何時かは路郎賞もとってくださることを期待しています。

そして良いセンスの奥さんにも是非川柳を始めていただきたいと心から願っています。ろです。ちかしさんより上に行く奥さんと思っっている私の目には間違いはないはずですよ。

## 信頼できる先輩

竹治 ちかし

数多くいる先輩諸氏の中で、信頼出来る先輩の一人が、この人である。どこでこうなったのかは解らないけれど……。

尼れいじさんと初めて出会ったのは、確か尼緑之助会長の句集発刊の記念句会だったと記憶している。もしそうだとしたら昭和五十八年、今から十五年前という事になるけど、ただその時は句集を車で運んで来ただけで、言葉を交わした訳でもなく、儀礼的な挨拶をした程度だった。

その後、いずも川柳会も会長の死去等、色々な事があり、その頃から、れいじさんも句会等に顔を見せるようになった。そこで話をするうちに、また飲み合いうちに、れいじさんをより深く知り、包容力のあるのに敬服し、この人とならずと川柳を続けていけるのではないかと思えるようになった。そして今では「いずも川柳会会長れいじ」の下で、微力ながら何事でもお手伝いをし、応援していることと思っている。以前のいずも川柳会の尼

## 同輩として

### 田口虹汀

下手の横好きという言葉があるが、それがそのままに当てはまる。同じ寺の総代である三浦ひろ坊氏が法要後の宴席を中座して帰るところに、運良くばったり会った。「三浦さん、何で帰るの」と聞くと「ああ、今から川柳の会へ行く」という返事。「良かったら連れてってよ」が川柳との出会いである。

一介の職人の頭で思ったが、十五、六歳頃に俳句を習っていたので五・七・五ぐらいのことはと自信を持っていた。三浦ひろ坊氏

緑之助、原独仙、久家代仕男先生の関係のよ  
うに、れいじ、ちかしの結び付きが持てれば  
よいのだが。

最近では、夫婦共々のお付き合いをさせて  
もらい、家内などは勝手に「れいじファンク  
ラブ」の会長を自認している次第。もちろん  
私もれいじさんの奥さんのファンクラブ会長  
でもある。

これからも、れいじ、ちかしという良き先  
輩、後輩の間柄を続けていきたいものである。

の会は七、八人で会長は川柳塔社同人の新岡  
回天子、虹川柳クラブと名乗り会員募集中。

先輩・後輩などということもなく、事務員・  
小使いの役すべてを受持ち、会のために一生  
懸命に動き回った。

特別会員に井上五木<sup>ゴキ</sup>さんが居られ、番傘の  
安武九馬氏と昵懇で「虹汀さん、井の中の蛙  
じゃ駄目だよ」と佐賀、久留米、長崎と近郷  
の句会毎にお供した。その行き帰りの車中に  
こんこんと参考になるお話を承り、少しずつ  
川柳とは何かが耳に入る思いだった。私の処  
女作は、中央は大統領の車なり（菊沢小松園  
選）であった。

この道に案内してくれた故三浦ひろ坊先輩  
の句は、大拍手ロードレースのピリが着き。

「僕のお通夜に見知らぬ顔が二三人」である。  
現在、川柳塔唐津支部には虹川柳クラブで  
共に学んだ久保正剣・仁部四郎・山口高明さ  
ん等が居られ、先輩・後輩の意識などなく、  
お互いに同輩として作句に努めている。

#### 第4回「オール川柳賞」作品募集

作品 未発表川柳20句（タイトルをつける）

締切 平成10年12月15日（当日消印有効）

規定 オール川柳の応募用紙、または市販の

原稿用紙に住所・氏名・電話番号・年  
齢・性別・所属結社・柳歴を記す。

賞 オール川柳賞大賞1名 賞状・30万円

〃 〃 準賞4名 〃 5万円

〃 〃 奨励賞1名 〃 5万円

〃 〃 選考委員特別賞 1名 〃 5万円

〃 〃 オール川柳賞佳作30名 〃 5千円

選考委員 大野風柳・竹本瓢太郎・尾藤三柳  
吉岡龍城・読者推薦選考委員1名

投句料 2000円（小為替を作品に同封）

応募・問い合わせ先

〒556 大阪市浪速区恵美須西2-8-11  
葉文館「第4回オール川柳賞」係

発表 「月刊オール川柳」平成11年6月号

表彰 平成11年3月27日（土）

オール川柳賞記念大会'99 in 東京



河内天笑選

羽曳野市 徳山 みつこ

笑顔よし実は詐欺師でございます  
だんじりは元気な衆を食いたがり  
税食った口はチャックで閉じたまま  
文人の色紙しみじみ飛驒の宿  
ナナカマド私も燃えておわりたし

横浜市 秋元 可

どんぐりもころがる先は分からない  
還暦の抵抗赤を遠ざける  
どの草も自分に合った花をつけ  
列島を錦の幕が南下する  
高校もプロも野球を横浜に

高知県 百田 幸

ひとくちで月を呑み干す酒供養  
保険屋も相手にしない年になり  
ひと言が多くて損をする女  
微笑まし傘寿の夫の身だしなみ  
雑草と根比べする農作業

富田林市 山原 昭水

恵比須さんみたいな顔で泣き上戸  
不況でも酒とビールは売れている  
梅干しを薬のように日に一個  
童謡を歌うと心和むんだ

元気だせと米寿が喜寿に言うたはる

高槻市 左右田 泰雄

生きもののように歯をむく波頭  
わだかまり解けたビールの白い泡  
組む腕の流れるような円舞曲  
秋晴れをワゴン車でゆく三世代  
清流に祈りを込めて稚魚放つ

大阪市 榎本 舞夢

大仏が大きなクシャミして秋に  
ひとり歩きを教えられてから楽し  
コスモスと同じくゆれる恋心  
からだ中真っ赤に燃えた恋だった  
情熱を燃やした日から大胆に

大阪市 立 藏 信 子

方法は最低ふたつ考える

空白のページを繰って冬になる

口げんかわたしの弱さでてしまう

平等な君の笑顔に嫉妬する

夢を抱くと鉛筆ばかり走らせる

堺 市 見 本 ちや子

ノーマークで静かに過す日曜日

順番が狂うて孫の一周忌

小麦色の肌で迎える秋日和

五十階迫る夜景に酔う二人

名月に出した手紙の返事こず

和泉市 横 山 捷 也

紀行文載ってた花に足のばし

演壇の咳の一つが句読点

風向きが変った一言多すぎる

二次会で仮面をはがす一人者

ルンルンで一寸濃い目の老いの旅

藤井寺市 太 田 扶美代

こっそりと夫に点をつけてある

派手を着る隠したい事一つあり

カンナが枯れる他人事とは思えない

こんなに悲しいのにおいしい夕ごはん

信じ切ってカレーライスを食べている

羽曳野市 川 口 信 子

妻の味ほめもしないがお代りし

コーヒーを混ぜるばかりで言い出せず

足と脳私のスベアほしいです

表札が齢を取ったと呟いた

浮雲と流れて行つたにがい恋

羽曳野市 安芸田 泰 子

盆栽に小さい秋が訪れる

詫び言が素直に言えぬ情けなさ

優しさはあなたの愛のおかげです

女らしい男が人気あるらしい

すれ違うバーゲンで買った同じ服

河内長野市 水 谷 正 子

文化祭ナイスミドルのパワー見せ

再会の握手流れる時を止め

スピリット磨きに秋の美術展

からだから力が抜けるまた汚職

月見酒兎がダンスしていない

河内長野市 大 西 文 次

少しならよいと主治医もいける口

セールスが美男で少し気を許す

喜寿傘寿今や老人真つ盛り

農を継ぐ覚悟棚田の米作り

演技する涙に客のもらい泣き

大阪府 澤田和重

叩かれた杭が力をたくわえる  
自由とはこれかと暇をもて余す

妥協して声に丸みを取り戻す  
お開きを待ってたように下戸は立つ  
近頃は妊婦めずらしがられてる

横浜市 山下省子

満腹になると優しい心持つ

明日こそ真実言おう髪洗う

本性をさらけ出したら友が出来

バス中が耳そばだてて聞いている

ゴキブリと同じ空気を吸っている

横浜市 三村八重子

秋の陽が落ちて行くのに蝶が舞う

五右衛門風呂から温もった声がする

政治討論脳細胞がアクビする

長雨のあとの日射しが目に沁みる

音止んで昼を知らせる造成地

横浜市 平達也

点滴のしずくと語る無常観

魔が巢食う吾が身だったか手術台

病室で夫々見せる夫婦愛

人生の最後の闘い無菌室

麻酔切れ頭髮無事か撫でてみる

横浜市 福田由美子

休日にとり残される親になる  
出張の夫の仕度すぐ出来る

癌の怖さが解っていないスモーカー  
おんなから母に変えさす家のドア  
われながら呆けを疑う探し物

東京都 吉田土風

川柳に出会え人生豊かなり

女には優しくないと悔い残る

弱者こそに光当ててるが政治なり

温もりのある人柄に人が寄り

温もりのある女なので罔つ惚れ

東京都 井上つよし

人生の復活戦と趣味に凝り

銀杏のカブレ懐かしむず痒し

旅心飛行機雲に呼びかける

心底にマグマを秘めた眼の光

バリウム飲んで宇宙遊泳させられる

静岡市 大村正雄

隣から煮物の焦げを教えられ

ジャンボくじ当たらないねと言って買い

子の寸志孫にまわってお年玉

新札に換えて並べるのし袋

往年の笑顔しので出す賀状

伊丹市 榎谷郁子

歩道橋上った親子に陽はうららは  
はや彼岸亡夫の墓前に萩桔梗  
露しとど百度詣りの母の脚  
朝露を集め写経の墨をする  
携帯で監視されてる亭主たち

尼崎市 清水久美子

お飾りに祭り上げられ霞む地位  
子育てを終えて気楽さ持て余す  
吉本の舞台さながら壁隣  
敗北の癖が弱気にさせている  
悪友は決して足元掬わない

尼崎市 森安夢之助

名残おしいが農を捨て村を捨て  
鬼の面ぬいで妥協の判コ押す  
風は気ままだ僕を置き去りにする  
てきばきと指図している兄の嫁  
亡妻は暇らしくちよいちよい逢いにくる

兵庫県 植村雄太郎

ローンすむまで死なせてはもらえない  
命がけ六十年振りのクラス会  
鈍行がごとんと今日の日が終る  
手に掬う水ある故郷に下水道  
印刷代にもならんほど下がる株

綾部市 藤田芳郎

老農に雨 これでもかこれでもか  
耕して蒔いて浄土は荒れさせぬ  
断りに行って地酒に落とされる  
ひよっとせぬままに終った旅疲れ  
お供えに僕の好物ばかり買っ

三重県 佐々木森哉

CTが捉えた僕の老いの影  
点滴が僕の犯した罪洗う  
肚の虫宥める酒を買いに行く  
秋風に抱擁されてそして冬  
寒そうな影に誘われ縄のれん

和歌山市 森口美羽

人間の隙を見抜いている鴉  
もう過去にしたくて絵の具塗り重ね  
やせ我慢だけは誰より上手です  
わたくしの中でぬくめているドラマ  
けんかするたびに絆が太くなる

和歌山市 水田秀男

人間を責めてるような酸性雨  
汚された空には出ない虹の橋  
日の丸が歪んで見えるパスポート  
狭い日本でよく売れる大型車  
ダイオキシソゴみに仕返しされている

和歌山市 福重美子

診察券老いの財布を膨ます

カーテンに耳のあるのを忘れてた

睨まれている方を買った鯛のあら

暴れ蚊に一手遅れるもどかしさ

汚染した土は所を替えるだけ

鳥取市 中村丸金

実る穂を雷様が食べちゃった

木筒のかすかな墨が息吹する

無造作に投げたさい銭では効かぬ

それぞれの神寄り合つてどうなさる

ご破算を重ねて今の妻がいる

鳥取県 山本益子

歳隠しやる気見せるがパワー負け

土鈴振りつれ合い起こす平和な日

諭吉さんどっさり連れてはずむ旅

明日もまた渋口叩く夫と居る

仲人に桜湯注ぐ時を待つ

鳥取市 有沢せつ子

ずぶ濡れの心砂丘で干して来る

おみやげと思い出提げて駅に着く

風邪少し癒えてこっそり掃除する

幸せな鯛だと雑魚が噂する

伸び過ぎたスカートのコム笑えない

鳥取市 録沢風花

えびで鯛釣って心が落着かぬ

ときめいて心朱色に染めている

しきたりも蝶もおちた世を嘆く

熱燗に一句添えたし十三夜

散髪は心預ける店に行く

米子市 門脇晶子

やさしさに揺れる秋さくらの素顔

終着駅軽い荷物にしてしまふ

陶器磁器 土の違いで顔をかえ

幸せな陶器旅館でフル回転

壁一重ピアノの音で仲たがい

出雲市 岡あきら

コスモスに似てときどきは風に揺れ

郷愁とのどかさが鳴る祭笛

嫌な記事見なくてもすむ休刊日

あるもので食べてとサツと言ひ残し

また一つ歳が貰えて秋日和

鳥根県 福岡博利

しがみつき離れるもんか濡れ落葉

こら財布時にはふっくらしてくれろ

ほめられたブラウスそれからが忙しい

ご詠歌のその時だけは無心です

影法師今日はふらふらするでない

島根県 武島 ちよえ

吹き溜りで笑い転げている枯葉  
思いつきり脱いでさっさと秋はゆく  
喧嘩して一日空気が激みがち  
たっぷりとスパイス効かす妻の乱  
その時は近くに頼る他人が居る

島根県 松本 聖子

誕生日一人で祝うのもいいね  
留守がちでネズミちよろちよろ出入りする  
木洩れ日に秋だ秋だと囁かれ  
病夫には花で季節を見せてやり  
口きけぬ夫から教わることはかり

宇部市 高山 清子

ダンボール住めば都のホームレス  
老いてなお胸の火焦がす恋螢  
会えばまた憎まれ口を叩く仲  
受付の応対で娘は見初められ  
金婚式迎えて互いに礼を言い

今治市 村上 久美子

母老いて厨の音も小さくなり  
天井の節穴何となく父似  
そつときて秋は虚しさ置いてゆく  
気力では負けぬつもりへ膝笑う  
今更に地中の遺跡揺り起す

愛媛県 安野 案山子

晩秋に濡れる夫婦の遍路笠  
いつまでも若い気持ちの綱渡り  
がむしやらな夫に付ける力水  
心棒の妻が元氣な三世代  
シングルの宿に安心した軒

今治市 越智 青園

なつとくのいかぬ話に胃がもたれ  
鈍行で行く人生は見栄をすて  
有り過ぎる自由が落ちる深い溝  
残された日記に鍵が匂うてくる  
またあした言うてる内に年をとり

唐津市 樋口 輝夫

サヨナラをしてから続く長電話  
もう遅いうっかり乗った口車  
炊事場が乾いてしまふ妻の乱  
幾坂も越えて女が熟れてゆく  
喉ごしの良さが税金忘れさせ

北九州市 岡田 幸生

子も孫も同じ鳥居で七五三  
飽食の咎めと悟る尿コップ  
バスツアー妻の眠りに肩を貸す  
争いをゆっくりとかすロゼワイン  
加害者が包帯巻いてくる見舞

横浜市 山梨 雅子

よく寄った店も不況で閉められる  
リニューアルして若向きの品ばかり  
いろいろな顔で人生楽しもう

譲られた席すぐ次で降りにくい

横浜市 金森 徳三

古い二人トイレのタオル湿りがち

枯葉散り抜け毛も惜しい古希の秋

もう慣れた茶髪ピアスも驚かぬ

あちこちと巡って今は鍼と灸

札幌市 三浦 強一

出る当てのない一日の無精髭

切り札を持つ沈黙の頬ゆるむ

近未来宇宙のゴミの収集車

一部屋にテレビ一台ある孤独

秋田県 湊 修水

つるし柿民話つまっている色だ

卒寿まで道はるかなり竹を踏む

成し遂げぬ事があるからまだ逝けぬ

泣きの中に本音がこぼれ出る

新潟県 高野 不二

夫婦箸買って帰ってひとり者

金利下げするように香典下げられず

一人でも遺族年金では食えず

毒物の勉強させる記事ばかり

福岡県 本田 忠男

新米の香り豊かになる厨

秋の旅阿蘇の花野と決めている

人を刺すことば弱者が武器にする

欲しいとき茶が出る嫁が弥陀に見え

鳴門市 八木 芳水

無農薬野菜は虫も大好きよ

割高は承知見栄買うおんな連れ

純だから怖い何色にも染まり

定年の石がだんだん丸くなる

高知県 桑名 孝雄

枯葉にも山を彩る意地がある

台風の前路に孫が四人いる

携帯電妻から逃げる術がない

金だけで野球は勝てぬものらしい

愛媛県 黒田 茂代

娘が病んで虫一匹を殺せない

足切断 娘は癌に勝つ決意

日も月も忘れ娘の容態を案ず

秋霖や微熱続きの娘の窓辺

愛媛県 宮本 末子

女ですもの残り火は抱いてます

エリートも金におぼれている地獄

人目にはつかぬ苦労に咲いた花

悪人も乗っているはず救急車

今治市 野村清美

手の上で豆腐を切ってまだ無傷  
おめでとう湯呑にさくらパツと咲く  
とんがった月にずたずた切られそう  
寝る時に気付く釦の掛け違い

今治市 中村好恵

限界に気付いてギアを切り替える  
友情のやさしい音で鳴る土鈴  
ドングリを拾う生け垣出来るほど  
蒲団ぬい終えて安堵の秋日和

横浜市 田中笑子

子が巢立ち手持ち無沙汰の日が続く  
番犬のつもりか小さい犬が吼え  
夜行バス寝つけぬうちに目的地  
言訳がつい先行をしてしまう

横浜市 川島良子

チヨコパフェ胃袋二つあるらしい  
才能はないけどながく続いている  
アラアララ夫の会社潰れそう  
日曜討論明日の株価が揺れている

横浜市 長島亜希子

家主より熟し具合を知る鳥  
ああ言えばこう言うあなた呆けてない  
異常気象金の成る木を枯れさせる  
再婚の妻が流行着せたがる

横浜市 伊藤ふみ

初孫にババ抜きゲーム教えない  
棘抜きは愛する人の手に頼る  
母の傘破り宇宙へ翔んでいく  
吹き抜けで少女の笑い乱舞する

横浜市 岡田芳江

山は紅心の中へ染めあげる  
捨て台詞残してからの日の長さ  
けんかあと少し多目の唐辛子  
絵手紙の五七五がはねている

横浜市 小野句多留

好き嫌い多く招待躊躇する  
旅の床妻の温もりはるかなり  
酒煙草やめてながあい日を送る  
秘め事の二つや三つ夫婦坂

横浜市 近藤道子

嘘でしょうと思うほんとが多すぎる  
充電がしたくて本屋はしごする  
秋風が吹いて多弁なもみじ達  
真心の入った嘘に礼を言う

川崎市 和泉見早子

休日は休日なりの朝の音  
秋晴れを見てると家出したくなり  
空気よし水よしやがてグムの底  
仏さまになって大事にされている

静岡市 増田扶美

育ち過ぎ母の心配また増える

流行は着ても似合わず背をのばす

人生は待ったなしねと灯消え

揺れに揺れて吊り橋やっぱり渡れない

島根県 菅田かつ子

急患へナースがバタバタと走る

夕立へ蟻も何処かへ雨やどり

草むらへ南瓜ごろんと放つとかれ

けんかしたあんだといそいそ買物に

島根県 谷岡ふみ

病院で元気ですかと友は問う

流れ星父母の化身か二度続く

通院も年金あつて気兼ねなく

しとど雨明けぬ朝待つ眠れぬ夜

倉敷市 家守政子

父さんのうしろ姿にありがとつ

子育てに燃えてる頃が華でした

育つ子にダイオキシンの邪魔をする

門札は亡夫も娘もいて大家族

米子市 猪森スミエ

石臼が睨んで回る粉挽き唄

せかせかと月日が回る長寿国

減反で案山子はいらぬ秋ざくら

看板に似合う老舗が生きている

鳥取県 高尾京

みどり見るただそれだけで気が晴れる

歩きたい風も受けない車いす

大水害被災地支援に税金を

首脳会談後臨界前核実験

鳥取県 加藤公子

小包みに小言もちよつと詰めておく

運動会ベストつくして六等賞

同一線上でミーティングする雀

独身にピリオド打たぬ息子もつ

鳥取県 西垣美知子

のみこんだ秘密が出そう喉仏

よく食べて動いて古希のまだ達者

焼きもちも色よく焼いて角かくす

人生の岐路に合図の音がない

鳥取県 平井栄翁

縄のれんゆらりゆらりと客を飲む

同居して一輪咲いた台所

日本海北朝鮮の謎を飲む

美人なら注がれた酒は下戸も飲む

鳥取県 夏目健一

人のために咲いた花ではないですよ

足を食う蛸にわが身を置きかえる

天の壁をそろりそろりと月登る

念入りに磨く粗末なわが心

鳥取市 福島 庸二

京都府 前上 英一

方言で肩の凝らない会話する

休日は脳が盛んに動き出す

酔いどれを送り届けて酔いが醒め

しきたりに磨きをかけた伝統美

鳥取市 近藤 秋星

「秋ですよ」百舌がうるさく告げている

大声で笑ってみても秋寂し

悪声の虫も交じって鳴いている

世界一明石大橋今渡り

鳥取市 田賀 八千代

表向き病名知らぬことにする

念のため喪服もさげて見舞いに行く

神様はいじわるだけど足が向く

再会に発火ボタンが動きだす

三重県 尾崎 勤

少しだけ食べるから美味しい試食

ブランドで良ければサイズあると言おう

汚れ出し気楽に履けるスニーカー

芋よりも古新聞に手が伸びる

京都市 高村 吉之助

ふっ切れましたときれいな字で書いてくる

大声で泣いたらスツとするだろう

女史が先酔ってしまつて座が白け

兄弟もそこそこ保つ車間距離

爪赤く染めて三児を育てあげ

そして今もとの二人に広い家

何気なく漏れた言葉にある本音

ときめきの種火はいつも消さず持つ

京都市 本庄 福子

簡単に人が死んでる今朝の記事

法華経を無言電話に聞かしてやる

とても良い友に夫はなりました

学校で命やりとりする子供

和歌山県 坂東 和代

押し入れのポロが私をはなさない

ストレスを埋める穴を深く掘る

改札機ものも言わずにひつたくり

降るほどの縁談あると言いなながら

和歌山市 吉村 さち子

しばし現実忘れさすよな秋の空

熱い涙出して人間とり戻す

常識の尺度が違うから揉める

向かい風妻のひと押し効いてくる

和歌山市 上地 忍

さんま寿司秋のふる里連れてくる

柵を忘れて姉妹旅をする

無理せぬようポツポツしなど無理を言う

千大根刻む手元に亡母の影

主婦業を脱皮し少し翫んでみる  
兵庫県 円増純子

抜打ちへぼろり本音が出てしま  
い  
じわじわと追い詰められている年金  
カルチャーへ燃えるものあり軽い足

兵庫県 安達厚

清流の小魚のように過疎に住む  
二三行読めば眠れる本を持ち  
だらしのない奴だと下戸は酔いをみる  
本当のことが聞けるぞ酔うている

兵庫県 西山八重子

いのししに追われ稲刈りヨードン  
残飯がもつたいたなくて妻太る  
私の重さに負けた自動ドア  
血の絆切れずに届く送り物

西宮市 長谷川淳

化野に万霊御座し身が凍る  
責めないで裏金と言う潤滑油  
披露宴親は他人のように座す  
聞いているぞと言わんばかりに咳払い

尼崎市 松下比ろ志

折鶴と一緒に見てる青い空  
歩数計は要らないいつもの散歩道  
夕焼けを一息吸って窓を閉め  
少しうんざり夢のままで妻がくる

ほろ苦い記憶の詰まる小引出し  
自己暗示私のなかに神がいる  
呑み込んだはずの本音が出る酒場  
自分史に振られた恋はカットする  
尼崎市 田辺鹿太

網を縫う漁師帰って午後は雨  
地獄の灯ちよつと覗いて引返し  
吐き出して観光バスはリラックス  
表札は生前のまま妻のまま

大阪府 奥野義夫

電話から霊が漂い寒気する  
注文のゴルフのタオル今日出荷  
初孫を土産に今日の里帰り  
掃き溜めのような顔だと兄が言う

泉佐野市 大工静子

回診を前にそわそわ薄化粧  
ストレスの度合いがきついコップ酒  
お茶汲みは仕事でないと言まし顔  
野心より良心選び平のまま

岸和田市 木村正剛

いつの日か母を飛び立つ滑走路  
誘われた時からふるえ止まらない  
針の先ほどの出会いが実を結び  
こだわりは水に流そう秋の天

富田林市 中井アキ

河内長野市 印藤 智子

お月見は双眼鏡で夫とする  
同窓会娘の指輪借りて行く

豊橋の菜飯 田楽食へる旅  
体育の日に腰痛で動けない

河内長野市 妹背 尽呂久

熟年の見合い打算を垣間見せ

古里に着いて長閑な風に逢う

星の数ほど居る女から一人

夫婦喧嘩急に繕う電話口

藤井寺市 楠 昭子

秋の陽は短く直角に落ちる

折れそいで折れぬわたしもコスモスも

夫も浮気もしも大統領ならば

おだやかな顔になりたくもう許す

羽曳野市 川 田 晋

時間切れ近づき油乗ってくる

心療科みなストレスで片付ける

横着を通せるうちは登り坂

嘘泣きを覚えた孫に騙される

藤井寺市 岸 本 寿 代

犬の糞ちゃんと取らずにかっこだけ

意地張っていつも損するお父さん

おかしくて人にも言えぬどじをした

薬漬け体を割って見てみたい

豊中市 みき わきみ

長寿国親も停年子も停年

金菌みな使命果して総入菌

築二十 DIYのこと多し

それぞれの人生同期会解散

八尾市 山本 宏

ペンダコがかわいがつてる古机

均等法男がいれる茶がうまい

ビデオレター孫の元気がとびはねる

面長の月と散歩の十三夜

八尾市 田中 トシエ

ふる里の味がほしくて小芋煮る

降って湧く食中毒もあると知り

哀悼の辞へ方言も添えて読み

建て増しに泣いた子のエゴ親のエゴ

東大阪市 北村 賢子

太陽だ星だ言われた若かった

夜が白む鳥がさえずる生きている

人間が好き下町に住んでいる

太陽がさんさん早く芽を出そう

堺市 村上 靖雄

この不況儲かりまっかの声も出ず

禁煙を勧める友も思案中

パソコンを始めた動機はボケ防止

赤い羽根百円出して胸を張り

寝屋川市 井上 すみれ

ハラハラしサッカー通になるテレビ  
すれ違いなぜか気になるのが笑い  
ぜいたくな服見て帰る案内状

年の暮れなぜにセカセカ暮れてゆく

枚方市 大昇 隆 広

雨雲が蹴散らす主婦の立ち話  
大事な娘思う心もピンとずれ

バカ息子いつしかバカな親父越え  
面倒な狡さは要らぬ里暮らし

大阪市 中澤 伽 羅

後ずさりしてたら皆にほっとかれ  
運動会ひとり小さな子が速い

千円やから映画ファンになりました  
松茸を買ってやるぞと馬券買い

大阪市 一本 勇 太

そして夕立伝言板にある別れ  
忘れない忘れられない水溜り

体験のない饒舌に距離をおく  
忘れるのも悟りの一つ生かされて

大阪市 平井 露 芳

電気みな消して夜空の星見よう  
大仏もでかいが鐘も負けとらず(東大寺)

美しく老いるつもりがボケてきた  
コスモスがおいでおいでと風に揺れ

大阪府 伊藤 博 仁  
パンツの紐直してくれる妻がおり  
十円を探し確かめ賽銭に  
住所録思い巡らし斜線引く  
水中のように戸外を歩きたい

大阪市 小泉 ひさ乃

思いやる心を命あるかぎり  
ブランドの財布中まで見ないでね  
百度踏む女の背なに秋落ちる  
余所事のはずが我が身に降りかかり

大阪市 松岡 千恵子

主が逝く下駄を大事に持ち帰る  
立て結び凜凜しき夫の旅支度  
白装束仕付けの糸に情を絶つ  
母の日に届いた花を亡夫にも

羽曳野市 西村 りつえ

ぼそぼそと錆びてきた脳庇いあう  
泣いてません月の雫で眼を冷やす  
母の味にまだ追いつけぬ五目ずし  
出直しにじっくり時期を待つ裸木

岸和田市 不破 仁 緑

指切りが好きで年中忙がしい  
この月を去年は友と眺めてた  
ふんふんと返事していて念押され  
判一つ押すのに三日考える

東大阪市 今岡 貞人

意欲だけ述べて社長は澄まし顔

生涯を危なく続く綱渡り

掌の中で握り続ける負の思考

堺市 梶本 哲平

よしもとと川柳笑いで共通項

この暗い世を川柳で吹っ飛ばそ

笑ろて腹減ったミナミで食て帰ろ

岸和田市 井伊 東吉

運動会 親汗だくでヒデオ撮る

糞始末する人真の愛犬家

国守る気概の失せた防衛庁

岸和田市 亀井 皎月

低迷が一割以下にする株価

古希を過ぎ夢も希望もかすみだす

そんなこと月が見てるよ笑われる

貝塚市 吉道 時子

半分の半分食べるおまんじゅう

働き蜂が荒れた両手のみつめてる

追いかけて寄り添いながら影一つ

泉佐野市 稲葉 洋

割り勘で飲んでほんとの俺お前

四五軒のわか銀座で歳の市

屋台酒自分勝手に忘年譜

富田林市 大橋 鐘造

聞き上手裏の裏まで喋らせる

厚化粧鏡に無駄を知らされる

よく動く尻尾で盃注ぎにくる

河内長野市 木太久 正一

台風のように孫来て孫が去り

秋の日の吟行うれし天野山

雨音とテネシーワルツ聞く深夜

唐津市 岩崎 實

減反のたんば黄金の波が消え

継続は力とって門を出る

手を抜けばいつかはツケが回りくる

唐津市 宗 弘

失恋を知らぬ忠告堅すぎる

ほんとうの水を飲みたく山の奥

不景気に浮気の虫も気を遣う

唐津市 井上 勝視

カロリーに詳しすぎてるまずい味

老い二人手の内とうにバレている

よくもまあ喋るわ食うわ娘の帰省

今治市 渡邊 伊津志

ほどほどの陰り潤い作り出し

何もかも捨てると広い海に出る

鯛網にかかった雑魚は捨てられる

今治市 塩路 よしみ

言い勝って心が疼く重い傘  
ついてくる影が時には邪魔になる  
髪染めて今青春のど真ん中

愛媛県 中居 善信

振り上げた拳がふっと虚しいね  
言いすぎた悔い二三日眠れない  
百姓が政治の狭間知っている

徳島県 安宅 美代子

マスコミの土足白紙に戻せない  
死後になりやっとな解決した保証  
駅止めの祖母を迎えに来た手押し

香川県 向山 治延

友が逝き生命線をしつと見る  
節抜けの歌でも宴は盛り上る  
老いてなお余命に笑顔たやすまい

香川県 松村 輝夫

生も死も自然の中の一部なり  
うわさの芽摘んでも脇芽潜んでる  
杖よりは年金たよる私生活

日立市 加藤 権悟

妻の吹くラッパに今日も励まされ  
リストラの背中の疵は触れずおく  
いつからか手綱捌きは妻だった

千葉県 大川 晚翠

泥と汗いいなやっぱりポランテイヤ  
瓜太る悠々自適といきたいね  
電話から儲け話が絡み付く

八王子市 井上 京一郎

万障をすぐ繰り合わず飲み仲間  
ことば尻とらえ手練の返し技  
宣誓の声秋空へ突き抜ける

横浜市 保田 絹子

最高のメイクあなたの笑顔です  
土用干しの梅にっこり舌鼓  
隠れてた病巣写す闇魔鏡

横浜市 生坂 サト子

玉葱に涙ふきふき夕仕度  
子の使い握る硬貨が温かい  
腹の中少々菌が棲み元氣

横浜市 豊田 羊子

サスペンスドラマの先を娘と競い  
算盤がいらぬ我が家の暮しむき  
孤高の人にもなり切れず一人ぼち

横浜市 荒井 広和

甘い水飲むと弁解うまくなる  
リストラの首が羨む蟻の列  
節約の文字官僚の辞書にない

滋賀県 中 宗 明

週刊誌ペラペラめくり買う気なし

宝くじ強運信じ買ひあさり

土壇場に身分を明かし仮面脱ぐ

京都市 高 島 啓 子

冬の来る音にきき耳立てている

なにわからみれば眠たい奈良の町

歯が抜けたままにしているひとり者

京都市 勝 山 美千代

同じ職親子で円くやっています

テナント募集やたら目につく不況風

仏花にも横文字多くすぐ忘れ

益田市 岡 田 たけを

年金日待つ首次第伸びてくる

夜神楽へ月も眠れず冴えている

世の中に未練あるからまだ死ぬぬ

島根県 槻 谷 仲 子

友一人つれて来たよと長居する

世渡りが下手で気まずいタイムिंग

禁煙に煙草売るのがわからない

出雲市 栴 ミツエ

コスモスが井戸端会議聞いてゆれ

アルバムをなつかしがっている夫婦

朝ぼらけすずめチウンチウン休耕地

出雲市 加 藤 スズコ

吉報は他人事でも温かい

治療終えやっ顔見た歯医者さん

愛情を裁ち切る今日の収集日

出雲市 加 藤 要 子

価値観もモラルも変える新人類

出発式終えて新米走り出す

大安に検診結果を聞きに行く

松江市 小 川 忠 憲

叱り方さっぱりしててあとがない

破たんしても退職金は億円です

美人妻も腹が出てきた四十坂

松江市 松 浦 登志子

寝る前の一杯うまい爛牛乳

挑発に乗るまい骨を折ったから

投票が増えても減っても不安がる

松江市 山 根 邦 代

これからの出逢い大事にしなくては

病む友の文字が細かくやつれてる

遺憾の意だけでは納得いきませぬ

鳥取県 橋 谷 静 江

前向きに生きて笑顔の良い女

やりとげて無心に眠る受験生

やりすぎは悪意に見えるお節介

鳥取市 谷岡清子  
しがらみもさだめと生きるやじろべえ

愛犬に心かよわず姥様

赤い羽根きき流す人止まる人

鳥取市 松本つね子

念願の孫の対面ガラス越し

人生のラスト笑顔で旅したい

この味はプロの秘密と教えない

岡山県 土居ひでの

灯明の向こう笑顔の栗御飯

七色の虹日記はいつももあるがまま

セピア色の記憶の中で炎える夏

岡山市 清水金太郎

平凡にただ生きて行くむつかしき

一流になって恩師の鞭を謝し

どの家も他人に話せぬ悩みあり

和歌山県 中後清史

改築をしてから友が顔見せず

万策が尽きて森から出られない

土になるいのち大事に今を生き

和歌山県 杉山精子

青山へ隙間だらけの背を晒す

世界地図広げて夢が泳ぎだす

レトロめく看板旅の車窓から

和歌山県 武本碧

濡れ落葉などと言わせぬ自負がある

ふんばりが効かなくなった甘え癖

ジベタリアンここにも群れる場所がある

倉吉市 大下智子

不意に夫やさしくなって要注意

謎解かぬ方が長持ち夫婦仲

父と母喧嘩の謎を子が解かす

和歌山県 和田美寿子

強がりを言って孤独の武者振い

ほどほどに長生きをする深呼吸

悲惨なる昔を偲び水供養

海南省 谷口義男

じんわりと愛を感じる父の鞭

昭和史の悪夢自然に風化する

平和論唱え片手で核を抱く

和歌山県 中村君枝

世渡りのコツを覚えている尻尾

活力剤朝のみそ汁からもらう

七輪のサンマで夕餉盛り上げる

兵庫県 高見末野

電話口ちよっと待ってとガスを切る

招かれて孫の嫁入り嬉し泣き

嫁ぎゆく朝の味噌汁かみしめる

着ぬ嫁に躊躇しながら買う土産  
還暦で孫にあけくれ元教師  
絵葉書の実物見たさにまたスイス

兵庫県 徳平 毬子

顔色のいいのを褒めて年を聞き  
台風禍老いの手に合う後始末  
年の所為と諦めるから治らない

兵庫県 仲井 素水

控え目に生きてストレス吐けぬまま  
ふと触れた言葉のあやに責められる  
連ドラに合せて朝が動き出す

兵庫県 北川 とみ子

赤ちゃんも金魚も名前つきました  
布団被っておぼけになってやることに  
ほんものになろうなろうと脱皮する

兵庫県 倉垣 恵美

年一回弱音を吐きに帰省する  
バス待ちの親子トンボに遊ばれる  
働き蜂誇りを持って過労死へ

姫路市 服部 一典

趣味のない夫で退職後が怖い  
仲直りしてから家が広うなる  
携帯電 家計に響く六基分

尾宮 弘治

風と住みいつしか孤独にも慣れる  
気楽だと言っていられぬ老い支度  
再びの命手にした手術明け

尾崎市 内田 美也子

犬の名も入れた表札お気に召し  
明日は旅日本経済どうあろうと  
スリッパで踏んづけておく古い傷

宝塚市 飯西 ミサヲ

老いてなおセンスのよさにふりかえる  
こだわりをすてて昔の友と旅  
栗まだかダイオキシンの送られぬ

川西市 田中 喜俊

好きな娘の家の回りを口笛で  
自己破産断りもなく雲隠れ  
どん臭い奴は何時でもほっとかれ

池田市 木村 一笛

おばあさんと呼ばれて怒る七十歳  
がらくたをみんな捨てたら淋しから  
いずれまた右肩上りを待つ頑固

高槻市 江原 秀夫

ひよろひよろひよろ薬舐めたか油虫  
雑魚なりに批判政治の裏表  
新調の自転車鍵を二つ掛け

高槻市 乙倉 武史

待ちわびた日和忙がし冬仕度  
豊中市 岸田 知香子

秋夜長趣味の続きを上と階下

口下手が寝言でさらり言つてのけ

吹田市 三浦 憩

こうしてはいられないよと遅刻する

少しでもいい目はみたい宝くじ

バランスの良い食卓に愛を盛り

吹田市 西岡 豊

姿見が腹ひっこめろひっこめろ

ブレーキが利かなくなった二人酒

ゆとりある男の腹は動じない

生駒市 川端 きぬ子

グラビアに夢ふくります旅気分

乾杯をジュースであげる下戸の会

還暦を祝う家族の宿浴衣

八尾市 鷺見 章

リハビリ室にモーツアルトの曲ながれ

レントゲン私の胸をよう見たか

ナスコール人恋しさに押ししてみる

八尾市 與田 明

何もかも便利足腰弱くなる

胃に鞭を打ってグルメの秋に翔ぶ

ライバルがすんなり折れて物足りぬ

ないものはないあるは田舎の旨い水  
大阪市 尾崎 黄紅

七味より一味わたしは頑固だな

釘を一つ落して釘六つ購う

大阪市 星野 ひさ

平手打ちくわせ台風足早に

父ちゃんを親父と呼んで声変わり

折り紙の鶴がとぶまで折ってみる

大阪市 亀井 円女

欲得無し術後おまけの命です

ええ子三人此の世に出したのは私

白は白黒は黒です不器用で

大阪市 榎本 日の出

ストレスを溜めて飛びだす腹の虫

意地悪な神様だけに拜んどく

見ていると簡単そうなことできず

大阪市 三浦 千津子

柔らかな言葉で躲す生き上手

完敗へ今日の傷口癒やす酒

口下手もそれなり敵の矢をそらす

沖縄県 杉谷 カズエ

東西のまわしの色を追うテレビ

耳そうじ何にもなくて拍子抜け

震度2でガスの元栓反射的

和歌山市 木村親路

オーイお茶やれどっこいしょと返事くる

気にするななどと言うから気にかかる

倉敷市 森本文子

一人ぼっち見栄張る昼の酔芙蓉

カサブランカに酔うて一人を満喫す

岡山県 国米きくゑ

結ばれるそんな予感のする出合い

結び目をといて早々他人の顔

米子市 小塩智加恵

眼鏡替え三面記事を念入りに

お隣のゴミにラーメン透けて見え

米子市 池尾保子

とうさんに安楽椅子を買ってやる

焼芋でわたしのからだ暖をとる

米子市 足立由美子

時々素足で土に立ってみる

飾らない言葉に本音ありそうで

鳥取県 藤山弘子

天窓のメルヘン入れて家造り

晴天へふとんの並ぶ屋根の上

鳥取市 宮脇道子

物欲をさげて老坂登ります

腑抜けても欲をぶらさげ無精ひげ

鳥取市 西尾敬之介

よいしょしておこぼれもらう餓鬼大将

譲られた老人席の椅子固い

静岡市 中西雅

茶髪の子育てる親も髪を染め

夏ばてのインコ家族の愛みのる

横浜市 北沢街湖

ポストから催促される締切日

かしがった家屋あなたも高齢者

横浜市 鈴江純子

若い気が席譲られて崩れだす

束の間の二世帯同居旅の宿

横浜市 布山嘉信

リストラに人を愛すの社是が泣く

留守電の乾いた声にかけ直す

和歌山県 村中悦男

蟹の爪口と買った幼少期

バッタ追う孫もバッタの仕草して

和歌山市 上地登美代

二人なら揺れるつり橋渡れそう

気配りを過ぎてボタンをかけちがう

兵庫県 北野哲男

てっぺんに鳩とまらせて鬼瓦

税金に孫は美田を売り払い

エルニーニョ暑さ彼岸で終らせぬ  
いたずらのように国宝壊す風  
尼崎市 軸丸勝巳

森林浴緑の櫛で梳く心  
運命を神に託した負のこころ  
尼崎市 河津正治

ピンチにはいつも借りてる母の知恵  
髪染めて幼馴染に逢いに行く  
尼崎市 野瀬昌子

もう直す気もない僕の七つ癖  
晩秋の落葉カサカサ美しい  
羽曳野市 山本たけし

なるようになるさと笑う影法師  
雨の日の散歩コースに環状線  
羽曳野市 芦田絢子

やさしいナースの言葉に痛み軽くなる  
父の日に母も一緒に旅行券  
羽曳野市 森田四三郎

あれやこれカタログ集めダイエツト  
一人居は淋しかろうと猫よこし  
大阪狭山市 伊藤尚子

神宮の森を台風なぎ倒す  
切り株の大きさもつたいない大樹  
橿原市 西本保夫

おそう菜お好きなだけとバイキング  
満ちたりた人生じやないまあいいか  
八尾市 井尻民子

雀君もつと食え食え案山子が笑う  
父母の年齢過ぎて武者ぶるい  
八尾市 高橋明子

オーディコロン男盛りもすでに過ぎ  
敬老日老人達のクーデター  
八尾市 平川幸枝

誕生日子どもがくれた旅の宿  
欲のない夫の寝顔にホッとす  
枚方市 二宮紫鳳

おだやかな顔に隠した般若面  
かげろうも私の残り炎も消える  
高槻市 執行稲子

籤のよな偶然もあり巡り合い  
ヘルパーを続け悔いなき聖婦像  
東大阪市 松山隆

無理なさる無理せな金は残らんが  
むしゃくしゃするので包丁を研いでみる  
大阪市 中井正秀

「ひとこと」原稿募集  
川柳に関する御意見・御感想、そ  
の他、お気付きのことを三百字にまとめてお寄せください。

# 秀句鑑賞

— 11月号から

森田 文

やんわりとかわされてから興味持つ

立藏 信子

それまで気にもしなかつた事がその態度で逆になつてくる、人の心の微妙さですね。

饒舌の友に寂しい影を見る

中後 清史

寂しさの裏返し、の饒舌だったのですね。優しく見つめる作者の瞳を感じています。

良い人ねと言われ鏡と自問する

三浦 きぬ

良い人というニュアンスは様々、でもきっと心から良い人と思われ言われたのですよ。

借りに来た嘘を承知で貸してくれ

芦田 絢子

冗談で流してくれている情け

見本 ちや子

二句共に弱い心を大きな気持ちで受け止めてくれる情け、ほのほの心が和んできます。

スパイスを多目にきかすアドバイス

岡田 幸生

一見きつく思えるかもしれない辛口のアドバイス、しかし親身になればこそその真のことは、大切に受け止めたいと思います。

ストレスを夫婦喧嘩で追い払う

妹背 尽呂久

程度犬も食わないとはこの事ですよ。ストレス解消してのですから心配御無用大いに派手に喧嘩してストレス解消して下さい。

舞台裏ばれて辻褁合つてくる

大村 正雄

その場限りの嘘はどこか違いが出てきます。そうだったのか、真相が分つてみるとなるほど納得ができるのです。

多様化の波間わが舟見失う

一本 勇太

急激なテンポで多様化してゆく時代の中で何だか取り残されてゆく気がしてきます。でもこれからは慌てずマイペースで波に身をまかせられたらと思います。

ひとり言届いたように娘の便り

高見 末野

いまごろ娘はどうしているだろう、ふと呟いてみる。そんなとき娘からの便り、同じ思いだったんだ。以心伝心、うれしいですね。

なあんにも遺さなんだと笑む遺影

大昇 隆広

何とも言えない温かい句で思わず微笑が湧いてきます。逝かれた人も、ご遺族も実に爽やかなお人柄が感じられて、このようにありがたいものとしみじみ思います。

前向きに生きると風も味方する

前上 英一

プラス思考、何事も前向きに進むと自然に運も拓けて来ますし、風も後押ししてくれます。

クローンには使えぬだろうこの個性

桑名 孝雄

何から何までそっくりのクローン。個性のつよいクローンはどんなことになりますか、ちよっぴり見てみたい気もしますね。

その他心に残る佳吟を

失敗の中にヒントが埋まつてる

吉道 時子

わたしにも渡れる橋がきつとある

武本 碧

母さんの膝はまあい吹き溜り

中村 君枝

火を焚けば風はいくさの貌になる

加藤 権悟

冗談の中の小骨が突きささる

野村 清美

# 沙湖抄

八木千代選

裏返る癖 猫だから赦そうか

切ないよおんぶおばけが目覚ます

遠近両用 狂っているは目だろうか

自転車サドル盗まれてから大人

人体図のところどころに神の畏

日常を手許において老いてゆく

ジャムパンの手にしっくりとくる重さ

白いめしどんな事でも知っている

風をかわすと胸の飾りが鳴りだした

若返るためのぜいたく欠かさない

いいことはみなにんげんに洩われる

月見酒とろりと何もかも赦す

私より若く賢い人増える

銃口を自分に向けて眠る夜

泣きどころ抑えて日暮れやってくる

蓋をください傷ついた日の私に

とりあえず進むそれから考える

深呼吸怒ってならぬことがあり

人間は恐い干潟のひとり言

空けられた席が狭くて拝辞する

和歌山市 福本 英子

寝屋川市 森 茜

横浜市 清水 潮華

和歌山市 木本 朱夏

同

東京都 佐藤 季穎

和歌山市 古久保和子

松原市 小池しげお

松江市 川本 畔

米子市 小西 雄々

和歌山市 榎原 公子

富田林市 池 森子

出雲市 竹治ちかし

羽曳野市 吉川 寿美

西宮市 牧淵富喜子

藤井寺市 太田扶美代

和歌山市 川上 大輪

藤井寺市 高田美代子

鳥取県 岩崎みさ江

横浜市 菱田 満秋

現在地捨てても届くラブレター

喜劇ばかりを抱いて渡った橋でない

抱き合うか突き落とそうか丸木橋

寂しいだけ身体はどこも悪くない

転んだらそこが宿命かもしれぬ

なんとない空腹感をみたまで

パンの耳シツペ返しを考える

此処に石打つとびっくりするだろう

いつまでも時効にならぬ素心性

追悼の酒 淋しくて悔しくて

故郷の海がからだを出てゆかぬ

考える力を白紙からもらう

白黒の夢しか見ない男です

ひと眠りしても返事は変わらない

失ったもの それは捨てたものです

しがらみを避けて流れている私

わたくしをリードするのはわたしだけ

生け垣の男結びは本物だ

六法の死角 負けるが勝ちとある

淋しいな 大浴場の唯ひとり

飾るものみんな外すと光るのに

外で逢うタマが他人の顔をする

人の手を借りずに生きりやそれでよし

言い訳をしない坂です待っている

引越しの最終荷物 庭の菊

難聴へパントマイムのような余興

和歌山市 牛尾 緑良

岡山県 小林 妻子

和歌山市 川上 富湖

鳥取県 新家 完司

海南市 三宅 保州

米子市 青戸 田鶴

松原市 玉置 重人

愛媛県 中居 善信

鳥取県 西原 艶子

弘前市 斉藤 昴

米子市 澤田 千春

京都市 都倉 求芽

砂川市 大橋 政良

大阪市 津守 柳伸

堺市 志田 千代

吹田市 山本希久子

堺市 神原 文

堺市 桜沢あかり

倉敷市 小野 克枝

寝屋川市 平松かすみ

八尾市 高橋 夕花

米子市 鷺見 正子

鳥取県 土橋はるお

大阪市 立蔵 信子

茨木市 藤井 正雄

米子市 石垣 花子

千羽目の鶴は白紙で折るつもり  
哀しみを知らぬ顔して通り過ぎ  
それはもう大きい船の乗り心地  
珍しくネクタイをして何処へゆく  
仕合せを諦めきつた訳でない  
みくびつた目で判断も狂いだし  
風だけが動き産声 寂として未だ  
何処で捨てようふところの不発弾  
ぬくもりを感じた方を買ってくる  
稲妻のなかで懺悔のいちべいじ  
命日になるとおろおろばかりする  
これが母だと摘まんだ骨も粉々に  
思い切り咲いても誰も見てくれず  
顔二つ二人三脚して生きる  
プライドを守り通した死に化粧  
お隣へ我が家の秘密告げる猫  
ひと言が根雪となった冬枕  
逆らえばあなたの嘘が倍になる  
十二月古い手紙を燃やさねば  
夏の夜の謎は解けないままに秋  
雨の日は雨よあなたと刻分かつ  
進まない話に塩をふりかける  
夜が明けて眺めてみればただの石  
蝶瘦せている秋の日の曇天に  
クローン化で何が豊かか考える  
茶たく拭く次の言葉を選びながら

富田林市 藤田 泰子  
鳥取県 土橋 螢  
八王子市 播本 充子  
高槻市 左右田泰雄  
鳥取県 林 露杖  
和歌山市 桜井 千秀  
米子市 政岡日枝子  
高槻市 川島諷云児  
米子市 白根 ふみ  
和歌山市 福井 桂香  
米子市 茂理 高代  
鳥取県 乾 喜与志  
羽曳野市 酒井 一壺  
八尾市 大内 朝子  
倉吉市 野口 節子  
三重県 佐々木森哉  
枚方市 海老池 洋  
富田林市 片岡智恵子  
八尾市 高杉 千歩  
鳥取市 植田 一京  
大阪市 渡部さと美  
米子市 野坂 なみ  
枚方市 前 たもつ  
尼崎市 春城 年代  
横浜市 近藤 道子  
岡山県 富坂 志重

通じ合うひとと雨降る夜を寡黙  
迷うもよし悟りを開きたくはない  
生きる道すこし変更して進む  
身のほども知らず雑草を巻る  
生きざまを晒せば風も風いでくる  
刺すほうの蜂もいのちを賭けている  
近づくよと遠のく夢のかくれんぼ  
螺旋階段 愛は単なる遊びかも  
赤もまた悲しみの色パラ飾る  
失ったものを労る影法師  
生き延びた知恵から白い旗を振る  
別れたあともしやべり続けるメロンの香  
地に還る 夏を満喫した木の葉  
杖一本護身用かも知れませぬ  
夕茜 極楽の空連想す  
野に山に宝探しはまだ続く  
飛び出した穂はふる里忘れない  
逃げ道にイエローカード隠し置く  
仏壇を開き浄土の妻に逢う  
わかれても人類愛ということ  
めそめそがいつまで続くこぼれ萩  
四面楚歌花のつぼみを数えてる  
裏のない人間上を見て歩く  
消しゴムが邪魔ばかりする答案紙  
助けると知って増長するバンク  
中だるみしているうちに雨季がくる

綾部市 藤田 芳郎  
吹田市 石原 靖巳  
米子市 足立由美子  
鳥取県 乾 隆風  
和歌山市 山口三千子  
唐津市 田口 虹汀  
八尾市 山本 宏  
出雲市 園山多賀子  
和泉市 中川 楓  
日立市 加藤 権悟  
大阪市 一本 勇太  
尼崎市 春城武庫坊  
羽曳野市 徳山みつこ  
和歌山市 上地 忍  
香川県 木村あきら  
鳥取県 西川 和子  
大阪市 神夏磯典子  
鳥取市 富山檳榔樹  
豊中市 田中 正坊  
和歌山市 宮口 克子  
和歌山市 山根めぐみ  
西宮市 西口いわゑ  
倉敷市 田辺 炎六  
弘前市 中山 雅城  
唐津市 久保 正剣  
倉吉市 米田 幸子

早く謝らないと夕日つるべ落ち  
けじめには男結びの方がよい  
有頂天 父の戒め聞き漏らす  
人生の今トネルを通過中  
原点に戻れば夢が落ちていた  
爪はじきされてひとりが好きになる  
それぞれの訛りでおもいっつき喧嘩  
唸らせる科白をいつも吐いている  
しあわせな噂は風も逃げていく  
べースター勝って男が一人死ぬ  
もう余生 赤の絵の具は使い切る  
生き下手の象は黙って鼻を振る  
追憶の花は多弁で泣き虫で  
私がわたしであってほっとする  
幸せと云うて隙間に気づかない  
本とじてまた空を見ることにする  
どうにでもなれとは雑な思いよう  
横槍が入ると勇んでくる口調  
スパーでメモどおり買うニヒリズム  
ひとまねが上手くて人間にはなれぬ  
ふるさとを踏めば七つの子に戻る  
心をこめて老妻へ手渡す感謝状  
柱にもなれぬ雑木が佗しがる  
恨みごと溶かしてくる琥珀色  
続編は自分に勝てる彩で画く  
カムバックこの一勝は遠かった

河内長野市 水谷 正子  
尼崎市 長浜 澄子  
倉吉市 淡路ゆり子  
八尾市 宮崎シマ子  
美祿市 安平次弘道  
西宮市 門谷たず子  
川崎市 和泉見早子  
和歌山市 森口 美羽  
枚方市 濱田 良知  
京都市 松川 杜的  
羽曳野市 芦田 絢子  
青森県 西谷 大吾  
岡山県 矢内寿恵子  
大山市 早川 盛夫  
八尾市 吉村 一風  
吹田市 栗谷 春子  
今治市 矢野 佳雲  
寝屋川市 太田とし子  
唐津市 仁部 四郎  
富田林市 中井 アキ  
大阪府 榎山 隆盛  
鳥取県 石谷美恵子  
和歌山市 吉村さち子  
八尾市 村上ミツ子  
和歌山市 武本 碧  
大阪市 三浦千津子

夏瘦せも冬瘦せもないプチトマト  
誉めたばかりに絡まってくるくもの糸  
赤とんぼ奏でて寡夫の冬支度  
この人と話せば霧が晴れてくる  
ハンサムな孫は私に知らん顔  
女性の肩叩くおんなではないぞ  
憎いように叩かれてる干し布団  
進言のペンは走らぬ重たくて  
老人の美学しゃしゃり出止めておく  
まっすぐに進み衝突ばかりする  
天秤に掛けられ浮いているころ  
つい吐いた言葉いくたり傷つけし  
良いとものがたくさんあっても留守  
七十歳まだ少しある嫉妬心  
年下の訃報しみじみ虫すだく  
方円に逆らつてくる若い水  
末尾からゆつくり探す宝くじ

黒石市 相馬 一花  
八尾市 村上 剛治  
泉佐野市 稲葉 洋  
和歌山県 中後 清史  
寝屋川市 岸野あやめ  
和泉市 岡井やすお  
大阪府 澤田 和重  
和歌山県 村中 悦男  
鳥取県 さえきやえ  
大阪市 本間満津子  
鳥取市 夏目 健一  
奈良県 鍛原 千里  
鳥取市 岸本 孝子  
大阪府 大森 年子  
高槻市 江原 秀夫  
札幌市 三浦 強一  
海南市 谷口 義男

福本英子さんの猫への呟きにゆつたりと悟りの世界に引き込まれました。深く重い内容なのに、さらりと書いてあるから救われました。何度となく味わった裏返りを、その度に赦しては生き直し大きくなられた境地でしょうね。森西さんのおんぶおはけはおかしいです。哀しくもあるし。山陰地方は妖怪ロードであるお化けの本場です。彼が騒ぐとき大概は一大事の子告です。切なくてつらくてもお化けのメッセージをキャッチして対処すれば、今度はたちまち守護神になってくれます。清水潮華さんの狂っているのは目だろわかとの疑問にお答えします。目を罪はありません。たぶん心のバランスだと思えます。焦りを宥めて焦点を絞れば眼鏡だって素直になるはず。

ハリコフ強制  
収容所の思い出

岡本久峰

やがて、我々はウクライナ州のハリコフで降ろされた。そこはかつてソ連とドイツの激しい攻防戦があった所で、当時まだ戦争の跡が生々しかった。到着後収容所に入れられ、ドイツ軍の捕虜と共同の道路工事業や、石材積載などの重労働が待っていた。そういう厳しい生活環境の中、日本人とドイツ人の国民性の違いを、身近で感じる事が何度もあった。

コルホーズ（国営集団農場）の作業で、日本側は我先にノルマを終了し、遅れる戦友を無視しているのに比べ、ドイツ側は弱い仲間をベースに合わせ、のろのろと一列に進む。

作業の遅さをサボタージュと見られ、歩哨に暴力をふるわれないう、みんなで庇っているのである。

また零下三十度の寒さに耐えきれず、作業の休憩中に焚火をしようと、たちまち歩哨が咎め踏み消されるので、我々は足踏みをしながら耐えていた。それに比べ、ドイツ人は何度消されても平然と焚火を繰返し、ついには歩哨をあきらめさせていた。日本人と違った凶太いゲルマン魂に、教えられることが数多くあった。

ある日、戦友のひとりが空腹に耐えかねて食べたのが運悪く毒草で、苦しんだあげくに亡くなった。その検死に、我々同様捕虜のド

イツ軍軍医がきて胃を切開した。すると胃壁一面に緑青色の苔状のものが、べつとりとくっついていて中毒の恐ろしさを知り、空腹でもうっかりしたものに出してはいけないと、胆に銘じたことである。

当地の農民の言によると、スターリンが農作物を根こそぎモスクワへ持ち去るので、食べ物がないとのこと。農民でさえそんな状態なのだから、我々捕虜の食糧事情は、推しはかっていただけだろう。

二十二年夏、どういう事情が知らされないまま、突然帰国許可がおりた。あとで聞いたのだが、参議院議員の高良とみ女史の尽力との事、まさに感謝のほかはない。

半信半疑のまま、再び元来たコースをナホトカ港に着き、出迎えの信洋丸に収容された。翌朝無事に舞鶴港へ到着、祖国の土を踏んだ時には、男泣きが止まらなかった。

あれから早五十一年が過ぎ、私も来年は八十歳を迎える。今なお現役で商売を続けて居られるのは、捕虜生活に耐えた精神力が糧になっていると信じている。けれど、今後我々の子々孫々、こんなつらい経験をする事がないうよう、永遠の平和を切に願っている。

天駆けて帰れ凍土にねむる戦友 久峰

昭和二十年八月、終戦の詔勅を聞かされた我々元第五軍司令部大隊千名は、心ならずも武器を捨て、ソ連軍の軍門に降った。そして直ちに綏芬河のソ連・満洲の国境を越え、シベリアへ連行された。昭和十六年夏、関東軍特別大演習の名目で、八十五万の兵がソ連に攻撃をしかける予定であった国境を、捕虜として曳かれて越えたわけである。

シベリアでは想像を絶する寒さの中、飢餓と重労働のまさしく地獄の日々を味わわされ戦友が次々と死んでいった。

翌昭和二十一年夏、また移動を命じられた。日本に帰れるのかとの期待も空しく、厳重な警戒の下、我々をすし詰めにした軍用貨車は、一カ月余り走り続けた。それまでに体力を使い果した戦友が、車中で何人も息絶える中、行先も告げられず列車に揺られているのは、大変な不安であった。

## 尚香のむ

西出楓楽選

石投げた私が渦を出られない

知らぬ振りすると尻尾が痒くなる

いわし雲さんが好きでやって来た

かくし針上手に夫立てている

体温に合わせた今日のプログラム

淋しくてころんだふりをしてしまふ

一人でいると昔の傷が深くなる

勤勉と怠け心が喧嘩する

耳ざわりいいから胸に届かない

ふるさとも孫も遠くにありてこそ

あるがまま月のことばが降ってくる

ほどほどに倅せの木を揺さぶろう

強がりの仮面この頃重くなる

伏線がひらひらマジシャンの右手

頼られてるから風邪も引けません

言わずもがな言わせて沁みる秋の風

数冊の辞典を積んで塚とする

秋空の深さを計る飛行雲

合掌の隙間を漏れた運不運

羽曳野市

西村りつえ

鳥取県

田村きみ子

今治市

塩路よしみ

熊本市

永田 俊子

米子市

政岡日枝子

あきる野市

佐藤 季穎

弘前市

佐治千加子

藤井寺市

岸本 寿代

宝塚市

嵯峨根保子

吹田市

山本希久子

西宮市

牧淵富喜子

貝塚市

池田寿美子

富田林市

中井 アキ

和歌山市

木本 朱夏

横浜市

清水 潮華

岡山県

矢内寿恵子

米子市

林 瑞枝

尼崎市

内田美也子

倉吉市

淡路ゆり子

うっかりと一つ足りない黍団子

火を見ると走りたくなる導火線

虫干しの亡母の着物は語り部で

全身で搾って母の胡瓜もみ

満月が俄詩人にしてくれる

いい人と信じています下がり眉

イヤリング言う事をきく耳でなし

帯留めを指輪に直し亡母という

手花火に昔むかしを嬉しがる

窓みんな開けて誰かれにも好かれ

誠実を父はくの字の背なに見せ

月冴えて疑心暗鬼の雲払う

ダブルの棺あつたらいいねお父さん

思ったほど怖くはないな老いること

迂かつにも慣れてしまった聞き流し

ゆり椅子で贅沢の度を測ってる

ストレスを溜めてる花が開かない

自分をほめたら腰がしゃんとしたよ

亡父を想い亡母を想ってまつり寿司

まごころを隠してしまふ美辞麗句

時よ止まれ月下美人が咲いている

すぐ響く人と歩いた萩の寺

お勝手に今日の運勢信じてる

古日記わが分身の如くあり

想い出の糸をたぐれば亡母に逢う

盛り場の朝に素顔の街がある

出雲市 石倉英佐子

和歌山市 川上 富湖

西宮市 緒方美津子

和歌山市 古久保和子

西宮市 西口いわゑ

尼崎市 長浜 澄子

岡山県 富坂 志重

大阪府 大森 年子

大阪市 三浦千津子

徳島県 安宅美代子

倉敷市 小野 克枝

和歌山市 福井 桂香

鳥取市 坂田和歌子

藤井寺市 太田扶美代

和泉市 中川 楓

大阪市 神夏磯典子

芦屋市 黒田 能子

堺市 志田 千代

藤井寺市 高田美代子

八尾市 村上ミツ子

横浜市 秋元 和可

和歌山市 福本 英子

横浜市 田中 笑子

寝屋川市 堀江 光子

和歌山市 上地登美代

鳥取県 岩崎みさ江

仏様に今年の味を見てもらう

骨折れたままで絵日傘仕舞い込む

耳の中さまよってまず魑魅魍魎

いっぱい飾るおんなの淋しがり

想い出のどの瞬間もいとおしい

下手でよし自分に合った筆を持つ

ヘンケルを三つ揃えて料理下手

笑うて話すきつい昔のくらしむき

明日生きる保証はないがプラン練る

ジェラシーをかくす女の厚化粧

言い過ぎた悔いを煮つめる片手鍋

金木犀の下で私はやわらかい

視野に母おいて横道には行けぬ

わたし用にお子様ランチ注文し

しつくりと亡母の指輪が似合う齡

問うて下さる人の温さを抱きしめる

伏線は敵か味方か蟬しぐれ

蛩飛ぶ川面に戻す新世紀

まだ暑くても新調の秋の服

いやな事すつぱりと脱ぐころもがえ

お節介やくほど暇はありません

カラオケのたかがされどにある気迫

走っても走っても夢追いつけず

柔らかな言葉で心斬られてる

迷うほど無いので楽な外出着

しゃべくりが上手サラサラ生きている

鳥取県 土橋 睦子

和歌山市 上地 忍

大阪狭山市 伊藤 尚子

八尾市 大内 朝子

八尾市 井尻 民子

大阪市 日阪 秋子

和歌山県 坂東 和代

大阪市 本間満津子

和歌山市 吉村さち子

大阪府 米澤 俣子

羽曳野市 吉川 寿美

羽曳野市 徳山みつこ

今治市 野村 京子

八尾市 宮崎シマ子

八尾市 高橋 夕花

尼崎市 春城 年代

堺市 桜沢あかり

鳥取市 岸本 孝子

横浜市 山梨 雅子

川崎市 和泉見早子

倉吉市 米田 幸子

和歌山市 宮口 克子

大阪市 川久保睦子

鳥取市 福田 登美

和歌山市 田中 みね

富田林市 前田 登子

胃カメラに発見された黒い腹

立ち話すとなと秋の陽が落ちる

全快へ折鶴みんな飛んだ夢

筆ひとつもらって趣味がまたふえる

たまさかの和裁へ虫の音がすだく

溜息も寝息も渇く一人部屋

男なら強い楯にもなつて欲し

記念のテレカ面影徳風よ吹け

茶髪にもキャミソールにもある悩み

賑わいの陰で黒子が踊る幕

コスモスの芯の強さに憧れる

プレゼント選るときめきが楽しくて

明月に痛み忘れし十五分

富田林市 片岡智恵子

八尾市 生嶋ますみ

今治市 野村 清美

鳥取県 さえきやえ

大阪市 津守 柳伸

兵庫県 北川とみ子

鳥取県 西原 艶子

伊丹市 樫谷 郁子

倉敷市 撰 喜子

横浜市 後藤 早智

寝屋川市 森 茜

大阪市 辻川 慶子

守口市 結城 君子

りつえさんの句―作者の人物像が浮き上つて見えてくる。ひとことなのに、親切心から無視ができず石を投げ、その石と共に自分もはまり込んでしまふ。身近に必ずいる、にくめない好人物。きみ子さんの句―多少なりとも社会とのかかわりを持つて生きている限り、誰もが「尻尾」を持っていると言つても過言ではない。りつえさんの句と共通点のある人柄が窺える。果して尻尾は搔かないで我慢できたであろうか。よしさんの句―そう言えばそんな気がするという、着想の面白さをいいたいだ。子供だけでなく大人も楽しめる、一編の童話が出来そうだ。やさしい言葉でさらりと詠んであるところから、空想が次つぎふくらむ。俊子さんの句―古きよき時代の、なつかしい人に出つたような心地のする句。原句は「夫(つつま)を立てている」となっているが、川柳の場合は夫(おつと)と読む方が自然と思うので、「を」を抜かせてもらった。

ぜいたく

近藤豊子選



せめてものぜいたくグリーン車で帰省  
存分に野山の空気を吸いに行く  
ふる里のあるぜいたくを誰も言う  
ぜいたくは真つ青な空音清水  
採りたての野菜づくしの朝の膳  
山村に暮らすぜいたく星と水  
ベッドから月と話が出来る部屋  
サラダ山盛りせめて女の贅とする  
ローン残る我が家の庭に来る野鳥  
ぜいたくは旨い空気を吸う余生  
貸金庫指環を十も眠らせる  
ぜいたくな身分ですねと聞く嫌味  
他人から見たらぜいたく独り者  
五人乗りの車で一人ご出勤  
ダイエツトそんな贅沢しています  
ぜいたくな孫だと思つ戦中派  
七五三たまの贅沢鯛づくし  
炭火焼きさんまちよつぱり秋の贅  
美しい妻にも三年で飽きる  
ぜいたくな願い書いてる笹飾り  
使わない部屋にも花を活けてある  
贅沢に食べて薬を飲んでいる

庸佑 千枝子 宣子 正 匍 たもつ 周 信 あずき 寿 美 あらた 島 あやめ 清 芳 章 久 妻 子 政 良 佳 雲 まさと 仁 清 芳 水 正 雄 清 史 しげお

究極のぜいたく不老長寿乞う  
年金日だけぜいたくの中ジョッキ  
白米のおかゆ ぜいたくだと思つ  
ぜいたくを敵にまわしていた昔  
贅沢な時間をホームレスも持つ  
数億の財を僕なら寝て暮らす  
ぜいたくは子孫曾孫の便りくる  
贅沢三昧つくした父の軽い骨  
夜勤明け父の朝酒贅として  
定年のぜいたく朝はゆつたりと  
里芋の葉がぜいたくな玉作り  
葉巻が好み蝶ネクタイはキザですか  
新築の香もほこほこ新世帯  
手の届く所にいつも君がいる  
足痛む日のぜいたくは車椅子  
佳

輝 夫 啓 子 恭 昌 満 秋 帆 雀 代 さち子 勇 太 能 子 伊 津 志 銀 波 慕 情 みつこ シマ子 哲 男 あずま 和 歌 子 洋 久 仁 於 正 剣 藤 田 芳 郎

手に取つて母は教えはしなかつた  
母さんの皺の中から学ぶもの  
寺小屋で学んだ祖父の硯箱  
疑問から学ぶ気持が湧いてくる  
古代史を学ぶルーツにたどりつく  
入院の母から学ぶ味噌づくり  
ひたむきな愛を野性から学ぶ  
生きて行く手本を学ぶ蟻の列  
おはようの手話を学んでからの仲  
哲学も美学も学び広い視野  
娶らない兄貴に学ぶ女性観  
誠実を盲導犬の目に学ぶ  
耐えること学べと雪の寒椿  
晩学へ大きな文字の辞書を買つ  
逝く日まで学べるように竹を踏む  
偏差値はどうあれ母に学ぶもの  
浅学も非才も揃う屋台の灯  
戦争の悲劇昭和史から学ぶ  
分校の生徒今年も十五人  
黒板も机も秋へ弾む声  
遺跡から学ぶ古代の暮しぶり  
好奇心学びの森に迷い込む

千代 美代子 慕 情 文 時 あずま 清 美 勇 太 岳 水 雄 々 幸 夫 充 子 強 一 宵 草 保 州 鉄 治 俊 路 高 明 久 仁 於 晴 翠 ミツ子



学 ぶ

井上富子選

路 集

前向きに頭脳耕やす秋の夜  
先生は神様の次一年生

こつこつと生きる夫の背に学ぶ  
学ぶこと多し明治の知恵袋

雑学のアンテナピンと張っている  
定年で妻から学ぶクッキング

荒れる子に学んだ愛情の手抜き  
軟らかい心何からでも学ぶ

農薬の怖さをメダカから学ぶ  
学歴はないが雑学なら大家

生涯学習弾みたいのでまだ学ぶ  
ロボットが何も学ばず寿司握る

本の虫わたし大学出てません  
心理学学んで二度の離婚歴

浅学を恥じエンピツ削っている  
佳

ひまわりに学び明るい方に向く  
晩学の森を楽しむかたつむり

極楽も地獄も入試などはない  
盗んで学べ親方も教ええない

学問は宝時々風入れる  
人

ポロポロの辞書と心中するつもり  
地

宇宙学まなんで亡母の星探す  
天

生涯へ日々学習の石を積む  
軸

何はともあれ学校好きなランドセル  
大内 朝子

政子

之男

めぐみ

みつこ

みつこ

克治

剛治

あやめ

仁清

晋

風花

正剣

隆盛

まさと

寿美

失

西村黙光選



失職がじわり家計を攻めてくる  
ゴキブリが気を失った真似をする

生きてゆくために失う愛もある  
めくら判押しして失う家屋敷

失点を重ねて太い糸になる  
逃がしてはならぬチャンスいよいよ脱ぐ役

失ってよかった気がつく恋もある  
そのうちに地球も無くすかもしれぬ

失ってないが減ってる株と地価  
携帯に奪い取られる思考力

ひき金に掛ける指なら既に失い  
失って投資の本を読み返す

失った青春に逢う古本屋  
空白に父母失った孤児半世紀

恋をして望み失い駆け落ちす  
失った若さに化粧派手になる

信用を失い色眼鏡をかける  
父を失い母を失い山になる

混沌の世相人情失われ  
失った愛は保険で取り戻す

失言をすくう柄杓がみあたらぬ  
理性失せいじめの後の自己嫌悪

虎の子を失う酒が牙をむく  
失速へ運命までが加担する

肩書を失うて出る人間味  
神様も何故か方向見失う

自信喪失枯れ葉ばかりが溜まる庭  
茶柱が失せもの出ると立っている

虚と実の狭間で誠意見失う  
舗装してふれ合う石も草もない

飯の世へ情け失い風の中  
失業者うらやましそう蟻見てる

失った和魂恢復いつの日か  
良心を失い溺れる水中花

失敗を取り戻そうと躍起だな  
失望をさせる倫理の無い世相

失うも拾うも二人あの世まで  
佳

筋書きが失せて樹海が深くなる  
煩惱の川で失う弥陀のみ手

獄中で人間失格読む男  
恥という字を失ったまま暮れる

十五夜へ兎の神話地に落ちる  
人

良心を失くしニュースの種を蒔く  
地

清貧の美学だんだん死語になる  
天

心まで失う健忘症とやら  
軸

核兵器失せゆく日々を鶴首する  
土橋 螢

帆雀

鉄治

郁子

次男

たず子

和枝

時弘

岳木

雄々

東雲

俊路

多賀子

はるお

義男

實

# 初歩教室

題一出発

吐田公一

推敲。一口にこうは言ってもこれほどむずかしいものはない。何故かという、自分が一度考えて表現したものはどうしてもこれに拘り易いのが人情だからである。出発でも

○ 出発の息子を送る駅弁を

この句では何の出發か、旅行か就職か、またこの場合の駅弁は？。例えばこれが息子が都会の大会社へ就職が決まり、初めて親元を離れて行く情景を詠んだものと想定すれば

就職を見送る駅に母の顔

で、就職Ⅱ人生の第二の出發となるのではあるまいか。俳聖芭蕉が言った「舌頭千転」とはつまり推敲の根元といえよ。

添削句

○ 出発の旗を振つてる添乗員

寿代

添乗員が旗を振つてるでは川柳にならない。

それを見逃がさないように追う客の姿を

▽ 出発の旗を追つてるツアー客

○ 折り返し人生二度の出发点

隆

折り返しと人生二度は同義語。このため句の内容が乏しくなってしまうている。

▽ 磨かれた再出発の朝の靴

○ 旅上手来るのは出発五分前

忠男

着想は面白い。上五が不適切

▽ 旅なれた人て出発五分前

○ 出発で雑念気妙に晴れ上がる

三美恵子

中八の表現が雑。雑念（辞書を引くこと）

▽ 晴れ男明日の天気は気にかげず

○ 出発の間際のお客尻重い

一典

この場合のおは不要

▽ 出発の間際の客の重い尻

○ 出発の時間が迫るコンコース

勤

下五のために慌てている様子と受け止めがち。それより惜別の情景をはつきりと

▽ 出発の時間を惜しむゲート前

○ 出発までの時間つぶしが乗りおくれ 泰雄

までが不要。下五で十分に理解できるはず。

▽ 川柳は省略の文学とも言えますので。

○ 出発のベルがせかせる二人仲 てる子

せかせるではドラマ性に乏しいのでは

▽ 出発のベルがひきさく二人仲

○ 出発は出鼻を挫け乗り遅れ

晩翠

てにをはにご留意を

▽ 出発の出鼻挫かれ乗り遅れ

○ 栄転の部下旅立ちて心乱る

靖雄

下六は語呂（リズム）が悪い。川柳は特に下五が大切。他に言葉のない時は別だが

▽ 栄転の部下見送ったひとり酒

○ 成功の鍵埋めてある出発日

芳水

埋めてあるの表現にやや無理が見える。

▽ 成功の鍵を握つた出発日

○ 余生とよめてゆるり出発金婚日

幸子

上五が気になる。

▽ 金婚のスタートあせることはない

○ 再出発バツイチ風を切り闊歩

セツ子

風を切ると闊歩は同義語に近い。闊歩を省いて前後を入れ替えると五七五となる。

▽ バツイチの再出発は風を切り

○ 孫六人希望目差してうれしい門出 トキ

上六下七と破調がきつい。

▽ 孫がみな希望を胸に門出して

○ ウエディング惜しみ無い愛誓い合つ サト子

説明に終始。もっ少し軽く

▽ はちきれる愛を包んだウエディング

○ 前向きに出发信号青となる 政子

具体的に誰であるかを詠む。

▽ 子の明日へ出发信号青となる

○ 禁煙の出发点だ明日も又 勝久

句に一貫性を欠く。

▽ 禁煙の出发点も空手形

○鈍行で辿るコースの空の青 信子

原句のままでは出発の意が不十分。

▽鈍行での出発決めた空の青

○出発が同じのあなた先越されてにをはの誤り。何遍も口中で反芻してみ

るとリズムの悪さが分ります。

▽出発が同じあなたに先越され

○出発はこれからにしよう老ふたり

中七に甘さを感じる。

▽出発は慌てずとよい老いふたり

○長い人生出発点になる華燭

長いは不要。誤字のないように

▽人生の出発点になる華燭

○再出発慣れぬ仕事に寒い風

寒い風冷たい風当りがきつい意、慣れぬ仕事でその意は現わされている。むしろ慣れ

ぬ仕事を氣遣う妻の心配りを詠めば――

▽再出発慣れぬ仕事へ妻の酌

○刻迫る出発までの落ちつけぬ

○ハネムーン欲送されて空の旅

二句を咀嚼して

▽出発が刻々迫るハネムーン

○我慢から共に出発やっとな

原句はギスギスした感じ。やっとなが冗慢だしつめ込みすぎ。

▽手鍋下げてから出発のマイホーム

○出発して忘れ物を思い出す

全くの説明句

▽バスツアー出発急いだ忘れ物

○病癒え再出発の夢に酔う

軍配は原句かな。

▽病癒え再出発の夢に燃え

○天国に出発合図聞かぬ振り

てにをはの使い誤りでは――

▽天国への出発合図聞かぬ振り

○日本晴れ今日の門出に幸あれと

説明句といわれる所以

▽カッパルの門出を祝う日本晴

○こもこもの思いを乗せてドラが鳴る

他人の状況より自分達を中心に

▽娘の旅路別れ切なくドラが鳴る

佳句

スタートの出遅れ最後まで響き

出発のバスは園児の夢乗せて

赤飯と鯛が出発祝うてくれ

計画も出発までの夢気分

出発点間違え人生回り道

行き先は駅のポスター見て決める

山車をひく子の出発にママも付き

敬之介

美子

バツイチの再出発の顔は晴

倒産の再出発へ晴れた朝

四畳半二人の愛の出発点

あれこれと出発余生もえている

縋りつく瞳に搭乗のアナウンス

連休の出鼻をくじく傘マーク

出発を五分遅らすみやげ物

出発に母は期待の祝い膳

子の門出見送る母の車イス

出発を見送る母の目が光る

出発をためらう背中押した母

出発の記憶にいつも母がいる

出発の間に久し振りが来る

(下八がいい)

女を捨て再出発を誓う母

二毛作再出発に揺れている

恢復に再出発の日がまぶし

シナリオが書きかえられた夫の葬

わくわくとバスポート持つ出発日

(私までわくわくしそ)

さあ出発と今朝の命に声掛ける

(中七がお見事)

錯覚のバラ色だった出発点

登子

栄翁

徳三

タツエ

つよし

君江

日出男

要子

捷也

宏

羊子

知華子

静子

志重

ひさ乃

純子

美也子

弘子

円女

幸枝

幸枝

幸枝

幸枝

私の句

ご出発一声高き盃板車

## 讃岐・淡路の

### 句碑めぐり

古今堂 蕉 子

NHKカルチャー川柳教室の人に誘われた句碑めぐりは、大型台風十号の前ぶれで決して良い天気には恵まれたわけではないが、川柳を愛する面白いお仲間にもまれ大層楽しい旅となった。十月十五日のことである。

明石海峡大橋を渡り、大震災後、一躍有名になった野島断層を見学して、淡路人形浄瑠璃館へ着く。「傾城阿波鳴門巡礼の歌の段」を見て、伝統を守り熱演する若者達に大きな拍手を送る。五時に南淡路国民休暇村に到着、立派な会場で、お酒も入って楽しい宴会、食事もおいしく、話も歌も大いに弾む。

翌朝八時出発、九時引田駅で木村あきらさんと川柳塔おっぱこ吟社の方々の威勢のよい出迎えを受け、白鳥町を案内していただく。

まず白鳥中央公園にある薫風先生の

島一つ買って暮らせば涼しかりの句碑を見る。

このあたり句碑が建った時はまだ整備されておらず、立派な体育館が一つ建っていただけだったが、今は人工芝スキーが一年中楽しめる公園になり、この句碑のもつ大きな意味は、ここを訪れる若者達に「大志を抱け」にも通じる名碑となっていると思われた。

公園から山に続く散歩道には、九十一歳のかくしゃくたる工藤吟笑さんの

余命など考えなしに種を播くの句碑、続いて、とてもお元気な木村あきらさんの

自画像に少し笑顔を書き足そこの句碑が建っている。

更に白鳥温泉に案内され、亡父西尾某の碑

温泉や坐りらかむに寝る羅漢

に久し振りに会い、なつかしい字に出会う。

平成五年建立の時、元気に母ともども、この碑の前で嬉しそうに写真に納まっていた父。碑の中から「おおきに、おおきに、皆さんで来てくれはりましたんな」という声が聞こえてきそうだった。

温泉の上の大広間で、川柳塔おっぱこ吟社の皆様の茶菓の接待が有難かった。

父を偲んで

温泉の前に建つ碑のあたたかし 蕉子



「島一つ」の句碑の前で

志田千代

十月十五日「NHKカルチャー川柳教室」の一行は「翠洋会」の方々の参加をえて、恒例秋の一泊吟行会へ出発した。目ざすは讃岐白鳥町である。

この教室は薫風先生のもので長い歴史をもち、大ベテランから、ほんのひよこまでがいっせいで学んでいる。

十五日の行事を恙なく終え、十六日「川柳



「温泉や」の句碑の前で

塔おっぱこ吟社」の木村あきら氏らの案内で白鳥町へ。のどかな田園風景の中、突然、現れた立派な建物と公園、その白鳥中央公園の高台に薫風主幹の句碑はあった。

西尾栞前主幹の句碑と石を折半されたという、身の丈を超すスマートな碑。

鳥一つ買うて暮らせば涼しかろ 薫風

あいにくの曇天で小さな鳥々が見えないのが残念。「句碑見るのは恥ずかしいもんでっせ」を連発されていた先生、いきなり句碑にビールをぶっかけられた。大正生れのシャイな先生のわが子に対する愛情表現なのか…。句歴三年余の私には句碑に対面する気持など

想像するよしもない。ややあって残りのビールを今度はいとおしげにかけられていたのが印象的だった。

温泉や坐りらかむに寝る羅漢 栞

前主幹の碑は白鳥温泉の橋のたもとにあった。お目にかかったことはないが、筆太の続け字にゆったりとしたお人柄がしのばれた。

帰途、淡路島の国清禅寺に立ち寄った。こ

こは川柳塔誌の表紙を描いていた。境内直原玉青先生が前住職をしておられた。境内には前々主幹・中島生々庵先生の

輪廻の綾はるけく尊く逞しく 生々庵

と温か味のある字で品格のある句碑。

そのわきの小ぶりの自然石に

睡蓮は万丈光の光源よ 薫風

の句が刻まれ、蘭の葉が二、三本碑に寄り添っていたのも「いとをかし」であった。

また、西淡町立滝川記念美術館の玉青館にも寄り、玉青先生の「うしの一生」の組絵や「天井の龍」の絵を拝見、その素晴らしさに今更ながら、立派な先生に表紙を頂戴しているのだと感激した。

食欲にあちこち見て回り楽しい旅であったが、ノルマの囁目吟に四苦八苦、「これさえなければネー」と友人達とほやきながら降り出した雨の中、大阪へと帰った。

# 第50回 西日本川柳大会

これは現実だ、川柳サミット

高杉 鬼遊

昭和五十四年（一九七九年）「東京サミット」があり、市民の手が届かない遠い存在だったのに、全国川柳サミットが開かれるとなると、どんなものか世代の川柳人として、この目で確かめたくなるのは人情ではなからうか、と問いかげ文になったのは、未知に対する不安と期待からである。

十月三十一日、同行九名（橘高薫風主幹、板尾岳人、奥田みつ子、宮西弥生、西口いわゑ、山本希久子、嵯峨根保子、谷口義さんら）と、開催地、岡山県久米南町へ倉敷ゆきのバスは走る。約二時間後、岡山着、サミット参加の主幹、みつ子、鬼遊の三名は一行と別れてJR津山線に乗車、正午弓削に着。駅前広場中央の「俺に似よおれに似るなと子をおもひ」路郎師の句碑と対面。会場の中央公民館へ向かう。町の家々に祝西日本川柳大会の

ピラが貼られ、私たちを歓迎してくれる。睡蓮へ水もゆれてはならぬ也。丸山弓削平氏の巨大な句碑の建つ会場に入る。時間が早かったので受付はまだ準備に忙しい最中だった。

基調講演は「地域づくりと文化」で美作女子大学学長、目瀬守男氏が迎えられ始まった。

所得（経済）、生活文化、環境等が、地域の活性化に於て、文化が如何に重要であるかを氏が計画した実践の例を約六十分語られた。キヤッチフレーズ「メルヘンの里・新庄」「マング文化のまち・川上」「いっきゅうと彩の里・かみかつ」「川柳とエンゼルの里・久米南」等、何故エンゼルかを、弓削「キュービッド」ウイリアムテル等へ発想展開させ地域の歴史、産業に関連して人口の増加まで述べられた。去年鳥取県で平成十四年の国民文化祭に向けて、「県民一文化」を発信計画された、キヤッチフレーズを私は想い起した。

次はパネルディスカッション、テーマ「川柳による人、まちづくり」に、参加市町の青



路郎句碑

森泉蟹田町から町企画課主幹の柳谷隆男氏、新潟県新津市、大野風柳氏（柳都川柳社主幹）、愛媛県伊予市から仲川たけし氏（全日本川柳協会会長）、地元、岡山県久米南町の濱野奇童氏（弓削川柳社会長）を、パネリストに、コーディネーターには前記の目瀬氏が当り、各地の川柳事情を詳細に語られた。

川柳を人生の友としたい。箱よりも人物だ。人間が大好き（大野氏）。小中学生の例会への参加、文化会館が後からできた（柳谷氏）。普段着の川柳が地域づくりに必要だ。マスコミ、行政が手伝って欲しい（仲川氏）。自分個人の世界の者が寄って社会貢献ができる。行政の理解があり、また他府県川柳人の支えがあつて五十周年大会を催すことができる。仲よくやってゆきたい（濱野氏）。

十八時十分、全国川柳サミット宣言採択、久米南町長から会場一同に発表される。

全国川柳サミット宣言（全文）

二一世紀を目前にして、日本の社会は、成

長から成熟に、物の豊かさから心の豊かさへと、大きく変貌を遂げようとしています。

このようなとき、「川柳による人、まちづくり」をテーマに、久米南町へ結集した私どもは、川柳によって、人間性豊かな地域づくりに一人ひとりが取り組むことを誓い、ここに宣言します。

### 記

1 私どもは、次代を担っていく人材を地域ぐるみで育て、その活動を支援し、いきいきとしたまちづくりを推進します。

2 私どもは、それぞれの地域に住む人が、誇りと愛着をもって、笑顔を絶やすことなく暮らせる、魅力的なまちづくりを推進します。

3 私どもは、新しい仲間の輪を広げるとともに、地域の情報を国内外に発信し、交流し合うまちづくりを推進します。

平成十年十月三十一日 全国川柳サミット

十一月一日 晴

高田 美代子

弓削までの切符を握りしめて、同行二人ならぬ三人(徳山みつこさんと安芸田泰子さん)は藤井寺駅を一番の準急の客となる。六時五十五分発のぞみ503号に乗りおくれな

うにと気が走る。早朝のこととて貸切り状態の車内で「ホッ」とひと息、岡山駅までの約五十分はお喋りをしている間に過ぎてしまっここまで来ればこれから会える人達のことが目に見えて何となく期待してしまっ。

先日、川柳塔まつりの時、弓削川柳社の会長濱野奇童氏が話されていた「カップヒー号」に乗車、カップヒー君やミス岡山たちと写真に納まつたりで、まるでおばさんの修学旅行だ。

通過駅のホームに課題を記したブラカードが三ヶ所現れて、各二句ずつ軽く頭をひねる。大会終了後に会場で発表されるそうで、回ってきた投句箱へ入れた頃には一年振りの弓削駅へ九時十分無事到着。受付場所の公民館までの空気がひんやりとおいしかった。

創立五十周年ということで大勢の参加が予想され、弓削小学校体育館が会場となっている。前日サミット参加の薫風主幹や鬼遊相談



役、それにマイカーで早朝より駆けつけられた天笑理事長と月子さん、バス旅行を楽しまれた方々と旅先で会うと妙に懐かしい気がしてくるから不思議だ。さつぽろ、岡山、兵庫県他お顔馴染みと元気で会えたことを喜び合ったり、川柳を通じての人々の温もりをひしと感じて五時起ききの眠気はもう無い。

まつり寿司を校庭で頂き、ますます遠足気分だが、披露が始まると周りの空気が引き締まる。後方から「ええ句や」「上手や」「綺麗な句や」と囁きが洩れられてくる。この方達もつまり川柳を楽しんでおられるようだ。約東通り川柳列車での募集吟の作品発表もあって、弓削川柳社・役場・JR津山線の方々の御厚意お骨折りで、秋の一日を思い出多いものにしていただいた。皆様ありがとうございました。

~~~~~

記念句会には第一部(事前投句)462名

第二部(当日出句)427名の参加があり、左記の天位その他、三才に出口セツ子・清水潮華 安平次弘道・高田美代子・岸本孝子・林瑞枝 中塚礎石・河内天笑の本社同人が入選した。日めくり尻尾を曳いたあとがある

大橋 政良  
土橋 螢  
昔からひとが通った道がある

# 本社十一月句会

十一月七日(土)午後五時半

アウイーナ大阪

翌日が立冬とはとても思えないほど暖かな七日、九十七名の出席者を迎えて十一月句会は定刻に開かれた。

今月から記名係が交替したので、河内天笑理事長のお話は記名係の役目の重要さ。各人のタイミングのよい、はつきりした呼名が記録係を助け、句会を盛り上げると強調する。数人の呼名の声色を真似て、会場を笑いを誘いながら、これからも良い呼名でますますの御協力をお願いすると話をしめくくった。

初出席は尼崎市から清水久美子さんと竹内満寿蔵氏を迎える。

月間賞は榎本吐来氏(羽曳野市)に輝く。  
(司会—ダン吉) (受付—楓楽・千歩)  
(記名—いわゑ・澄子)

席題「宇宙」 川端一步選

金魚鉢を宇宙と思ふ金魚たち (岡美代子)  
即興詩人の森はわたしの小宇宙 寿美

来世はきつと宇宙で花を咲かせたい  
母星が銀河にひとつ流される  
ああ宇宙わたしミクコロで四苦八苦  
神様も宇宙の果てはまだ知らぬ  
フアッションにもうかき入れた宇宙服  
宇宙から来た嫁わが家かき回す  
無限大の宇宙にもある落とし穴  
宇宙いっぱい呼んでみたひとがある  
宇宙から見れば何でもない悩み  
宇宙船の真下日本はヒ素騒ぎ  
ふところ手宇宙の星を読んでいる  
古レコード回すわたしの小宇宙  
栄光の日を忘れない向井さん  
宇宙史にわたしを埋める一行詩  
褒められて宙を舞ってるやつこ胤  
宇宙でも戦争したがるハリウッド  
地球の恵み宇宙から教えられ  
光年の旅に寿命は短すぎ  
途轍もなく拡がると少年の宇宙  
大宇宙たわごとなんかに止めました  
姐さんの河内音頭が宇宙まで  
億光年人生小さく短くて  
ペンダコに期待抱かせている宇宙  
宇宙船希望が見えて竹を踏む  
口説いたら星がきれいとかわされる  
依万智の詩で宇宙のメッセージ  
胃カメラで覗く神秘的な小宇宙  
ちぎり絵に母にはははの小宇宙  
宇宙無限地球は豆つぶなんだろう

千里 森子  
文 鹿太  
扶美代 正一  
保州 弥生  
正一 みつ子  
雅文 正一  
みつ子 女  
千秀 雅文  
いわゑ 比呂志  
弘もつ たもつ  
富湖 保子  
天笑 比呂志  
澄子 たもつ  
天笑 勇太  
隆盛 たず子  
ダン吉

住 外助の功向井夫人は宇宙駆け  
友達をたくさん持つている宇宙  
宇宙への欲が古希にも湧いてきた  
かまくらで遊ぶ僕等の小宇宙  
夢語る 心に宇宙持つ人と

人 限らない夢お砂場に子の宇宙  
地 よろこびを宙に浮かべて草に寝る  
天 宇宙より広いところを母は持つ  
軸 小宇宙胎児元気に蹴り給う

兼題「持ち味」 大内朝子選

持ち味を保護色にして秋の坂  
持ち味の温みで丸い風を抱く  
それぞれに持ち味だしてかやく飯  
達筆でなくともひかる彼の文  
持ち味に期待をかける沢山  
持ち味でその場楽しくさせる人  
平凡な人へコショーを振りかける  
持ち味も似てきた二人金婚式 (岡美代子)

アキ 剛治 舞夢 靖巳 賢子 弘一 天笑 勇太 正一 伽羅

持ち味を上手に生かす京料理

あの人が一人はいいと座が和み

聞き上手持ち味にする友がいる

持ち味にわきびを足せば良い夫

持ち味をマイライに流し司会する

ワープロはやらない老いの筆達者

持ち味は失うまい蛙の子

持ち味をあなた好みに変えられる

泥臭い持ち味だけ憎めない

持ち味をたつぷり盛った母の皿

持ち味が出るまで長い目でみよ

本当の持ち味別にあるピエロ

持ち味を真つ直ぐ伸ばせネギ坊主

持ち味をミックスさせて半世紀

肩書がとれ持ち味が光り出す

マイペースいま持ち味の勘どころ

老優の持ち味はえるいぶし銀

西陣の帯の持ち味締めてから

一寸の虫も持ち味もって生きている

住

平凡が持ち味でした父と母

退き際がとてきれいな持ち味で

妻が居てばく持ち味生きている

軽妙な持ち味まわりを楽しませ

持ち味の舌ソムリエとして自慢

人

持ち味を逃がさぬように泣いている

地

持ち味を押さえて丸く生きている

たもつ

義

ダン吉

保子

隆盛

一風

周信

隆盛

萬的

いわゑ

三男

周信

洋

かすみ

柳宏子

雅文

洞庵

英子

たもつ

天

持ち味は笑顔にあったお母さん

軸

持ち味をいかす子育てから未来

兼題「打算」 吉村一風選

手鏡の裏にひそんでいる打算

聞き耳を立てて打算の枠を極め

母の辞書どこ探してもない打算

菓子箱の底に打算が貼ってある

無料招待ちゃんとするは弾いてる

握手握手白い手袋忙しい

金策じゃないとわかって出す鯉井

儲かっているうちははいはい従いてくる

損得ですまぬ情けで生きている

打算などないふりをしておく打算

微笑みの中に打算を忍ばせる

おふくろの味に打算などはない

打算などあるはずも無い母の愛

打算なき母の愛にも子が背く

損得を抜きで女将の太っ腹

打算家でないからみんな従いてゆく

仮面すらし互いに覗き合う打算

打算から遠いところでみかんむく

計算が見え隠れする言葉尻

その裏がちよっぴり覗いている打算

打算抜き自分の為に善を積む

たんとんとお肩を叩く子の打算

見通しの甘き打算が狂い出す

ダン吉

朝子

打算かも知れぬ女の泣き上手

定年のあたりで漂っている打算

風向きを読んでゆつくり手を挙げる

長生きをしようお年玉をふやす

美しい薔薇を贈られても困る

打算と野心におう男で隙がない

花束がちと立派すぎはしないか

父の靴打算は追わずちびている

献血の友に打算なんか無い

住

賽銭を少しはずんだのも打算

只酒の時だけやってくる男

にっこりと打算が酌ぎにやってくる

お遍路の歩み打算のない祈り

打算など知らずに向かい風の中

裏町に打算持たない笑みがある

人

人間のころろがやせてゆく打算

天

打算などなかつた荒れた手を洗う

軸

マザーテレサ抱く子へ打算なんぞない

兼題「後押し」 山本希久子選

正論に後押しがない多数決

脱サラへ妻も後押ししてくれる

うちの孫だから何でも買ってやり

六十は若いわかいと妻が押す

たず子

扶美代



人  
幕引きは妻だと決めているのんき  
勇太

地  
大陸で生まれたせいにするのんき  
久美子

天  
いざという時は実家をあてにする  
洋敏

軸  
お尻に火ついているのにまだ寝てる  
月子

兼題「短所」 橋高薫風選

ほつといて短所は長所生きてきた  
照子

すぐカネを数えるそれが短所です  
四郎

短所には錆止め塗って古稀という  
螢

長所短所うまくとけ合う若夫婦  
舞夢

短所かな夫が鍋を光らせる  
鹿太

同じ短所持っているから仲がよい  
正坊

割れ鍋にとじ蓋ですがつつがなし  
一步

父ちゃんの飲む打つまでは目を瞑る  
仁清

短所かも知れないガマンばかりして  
謙美代子

謙譲の美德あなただの短所です  
千歩

好きな人短所だなんてあるものか  
寿美子

短所長所もくらめて好きなあなたです  
たす子

短所も緒 あなたの籍に入れました  
おとなしい嫁だが少し舌足らず  
たす子

短所だと思ふところが取り柄だと  
小石にもつまずきそうなほど短気  
森子

アメリカの短所武力をちらつかす  
ボキヤ貧の短所は僕も持っている  
靖巳

外見の短所を埋めている話術  
澄子

担任が変わると長所になる短所  
弘一

履歴書の短所の欄はすぐに書け  
短所でも長所でもあるしたたかさ  
睦子

これからは私の短所が番です  
今はずも亡母の短所なつかしく  
舞夢

香辛料ふる短所の消える僕  
わたくしの短所を夫が嘆きにくる  
義子

人間の短所鑑から見ての猿  
せつかちを長所短所と使い分け  
富湖

短所は長所直す気もなく年を取り  
短所と長所繋ぎ合せて五十年  
洞庵

いつからか短所をかばい合っている  
美しく生まれ短所に触れられず  
高栄

顔立ちが短所になった美人妻  
短所さらけだす友達が増えてくる  
希久子

達人の短所に光るものがある  
人  
千里

短所もつ者が集まりうまい酒  
そこそこの短所は問わぬ実力者  
哲郎

ふところが男の短所支えてる  
しみじみと妻の長所がわが短所  
弥生

軸  
吐来

久峰

一歩

本年1月から11月までの皆出席者の氏名を  
左記に掲載します。もし誤りがありましたら  
事務所へお知らせください。

橘高薫風 黒川紫香 西田柳宏子 阿萬萬の

高杉鬼遊 小池しげお 山本義子 吉川寿美

宮崎シマ子 福田満州 北山悟郎 前たもつ

嵯峨根保子 石原靖巳 鍛原千里 籠島惠

神夏磯典子 坂上高栄 川端一步 吉村一風

森下愛論 岩佐ダン吉 小林周信 金井文秋

堀端三男 福本英子 高須賀金太 海老池洋

門谷たす子 高杉千歩 稲葉冬葉 大内朝子

平松かすみ 楠昭子 榎山隆盛 西口いわゑ

八十田洞庵 芳地狸村 一本勇太 寺井東雲

藤井正雄 高田美代子 坊農柳弘 川原章久

安藤寿美子 川上富湖 奥田みつ子 (47名)

本社句会皆出席(順不同)

選評 河内 天 笑

第2回 「好き」

投稿先 5425 大阪市中央区難波千日前11-6

〒0075 吉本文芸館(06-6437799)

投稿締切 平成10年12月末(隔月開催)

投句要項 便箋に3句以内 80円切手5枚同封(作品集代)

掲載誌 月刊「よしもと」

入選発表と 1月29日(金)午後6時から

没句評句会 吉本文芸館(ナンバ月東隣)

吉本川柳

# 冬せぬ城

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

## 岸和田川柳会

長谷川呂万報

店先の梨もルーツを持っている  
 あんさんのルーツは熊襲かその鬚は  
 ルーツなどわが家は誰も気にしない  
 深い闇私のルーツ探してる  
 お笑いのルーツになった大阪弁  
 冷却期間置いて益々冷えちゃった  
 冷却期間越えて二人の笑いじわ  
 冷えていた過去ゆつくりとどりかけ  
 冷却で心解かせる彼の愛  
 リストラに冷却される愛社心  
 冷却期間おいた小言は間が抜ける  
 老練な社長もまける不況風  
 老練の出番を仰ぐ社のピンチ  
 老練なタクトで酔わす人を待つ  
 喋っても手は休めないタコ焼屋  
 ゴシップをわざと初耳らしく聞く  
 きっかけはわざと落したハンカチーフ  
 わざとらしい笑顔で無理を言いにくる  
 ひとり住み女は靴を並べてる

盛之 蛙城 白光子  
 ダン吉 狸村 美智子  
 美津江 俣子 苑子  
 基子 さよ子  
 昭二 一齋 洞庵  
 柳宏子 洋弘子  
 甚一 ひで

あげ足を取った女が今の妻  
 あげ足を取るから答弁素つ気ない  
 あげ足を探しているも惚け防止  
 一言のあげあし悲し寡婦日記  
 あげ足を愛のしずくと受けとめる  
 正論はないがあげ足だけは取る  
 あげあしを取っても責任とらぬ人  
 あげあしを拾って歩く天邪鬼

## 川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

軽い嘘まぜて話を盛り上げる  
 繰返す老婆の話へ耳を貸す  
 賞味切れしてもタテ喰う虫が居り  
 お隣の堀越しに聞く痴話ゲンカ  
 工夫して愛情皿に盛り分ける  
 人間の知恵が善産む悪をうむ  
 運動会孫と三脚腰も伸びる  
 洪水だ核だと地球影褪せる  
 彼岸花一度に秋が押し寄せ  
 米の飯夢にまで見た少年期  
 慎重な人は近道通らない  
 寝ていても腹が立つよな記事ばかり  
 男女同権だけど炊事は妻まかせ  
 虫食いの野菜作って自慢する  
 モクの蔭浜風が待つ憩いの場  
 俵せの中で幸福気が付かず  
 悲しみが家族の絆強くする  
 破壊から守ってほしい地球星

和歌子 東吉 鹿太郎  
 松風 辰郎 路子  
 呂万 富志子 金太  
 あきら 放任 坊太郎  
 よしみ 節かり 文仙  
 かおり マツエ 吟笑  
 輝夫 治延 捨楽  
 チカエ くに子 はつ恵  
 正雪

## 川柳岩出

小倉アサ報

種袋切れれば彼岸の風が吹く  
 一粒の米の大事を論ず母  
 芯通す女性に似たり彼岸花  
 いつの日か流れつきたい母の海  
 噂だけ流れた運のない男  
 情念が炎えて悲しい彼岸花  
 彼岸花無縁塚から咲き乱れ  
 杭打って流れを変えてみる夫婦  
 人の世は流れ流され皆一緒  
 世の流れ黙ってにらむ不動さん  
 流れ雲乗って行きたい古里に  
 流れ作業見学者には目もくれず  
 歳重ね減ってきたよな脛の傷  
 働けるよろこびがある朝の靴  
 人間の仕事を怒る大自然  
 ご利益と一つずつ行く石だたみ  
 ひとつ聞き一つ忘れて風の道

## 川柳東大阪

森下

たもつ 雅文 弘直  
 東雲 シマ子 賢子  
 治也 愛論

人の輪がひとつになつた紙コップ  
 奇跡待つしかない集中治療室  
 根気よく待つなと思ふ花時計  
 資本切れきつと痛手が待つてゐる  
 パーゲンで主婦戦いの場所となる  
 子沢山母の戦はなかならぬ  
 宗教の違い地球にある戦  
 ライバルの背中に書いてある戦  
 戦から学んで生きたちの詩  
 慰安婦の皺に戦は終わらない

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

朝子 恭昌 庸佑 文秋 萬度 太郎 正博 湖風

天空にまたたく星は亡父ははか  
 点滴のぼとりぼとりと天の声  
 天国へ行けそつもない道辿る  
 登りつめ慢心するとすきま風  
 天高く拳突き上げ活入れる  
 晴天に運動会も順調に  
 満天の星空ロマン果てしなく  
 天界を思はず雲が山覆つ  
 天の声信じ活動しています  
 うるおいをあたえる天に合掌す  
 旅立ちの心かろやか天も晴れ  
 天焦がす花火わたしたは胸焦がす

サークル檸檬

小林

一夫報

雅子 雅子 雅子 雅子 雅子 雅子 雅子 雅子 雅子 雅子

あずき いわゑ あずき いわゑ あずき いわゑ あずき いわゑ

コスモスと私もゆれている野分  
 頬を刺す風に怠惰を責められる  
 逆立ちや背のびも混じる余命表  
 きりぎりす風吹く夜は膝を抱く  
 ポリシーがないので誰とでも笑つ  
 爽やかな風が悩みを和らげる  
 大切にしまつて忘れている敬語  
 思ひ出を辿れば春の色ならむ

高槻川柳サークル卵の花

川島諷云児報

房子 みつ子 智恵子 薫 楓 楽 正坊 希久子 一夫 秀夫 晴美 一篠 美智子 比ろ志 透太 稲子 石舟 紫香 芳子 波留吉 高栄 靖巳 大輔

おさむ 一篠 美智子 比ろ志 透太 稲子 石舟 紫香 芳子 波留吉 高栄 靖巳 大輔

献花する列に沈んでゆく孤独  
 リハサルしとかなあかん黄泉の列  
 嘘のない顔が最前列にいる  
 雑学を広げて列の真ん中に  
 ミサイルを放ち国際無視をする  
 大空へきれいに放つ今日の鬱  
 祈り込め丁寧に折る千羽鶴  
 丁寧なお辞儀だけなら猿もする  
 修復へ包帯まかれた持国天  
 丁寧に頭を下げて娘を盗む  
 あらお珍しや松茸さまがある夕餉  
 珍しく隣の犬が尾を振つた  
 珍しい貝を見つけた海が好き  
 珍しい人と出逢つた祭り笛  
 珍しい妻に頭を下げられる  
 晴れ姿父の涙を見てしまい  
 珍しや妻が女の声を出す  
 じっくりと急所ついているイヤリング  
 啄木をじっくり読めば絵が浮かぶ

じっくりと言つて聞かせて嫌われる  
 台風外れじっくり秋の絵を描こう  
 親友をじっくりと見たことがない  
 回転の寿司に疲れた海老が乗り  
 左遷地の甘い地酒がほろにがい  
 枯草の匂いを残し孫帰る  
 むし返す話に豆腐またたつべれ  
 彩びいたくちびりの遠出をして困る  
 毒舌へもつぎりぎりの腹の虫  
 日本人ですビフテキは箸で食う  
 影法師すこし短くなって秋

川柳若葉の会

吉田あずき報

舞っている時は聞こえぬ他人の声  
 クロイン牛の乳は我が子に飲ませない  
 欣史子

佳句地十選 (11月号から)

米田 幸子

どの子にも届く目線の位置にいる  
 むるま湯の中で拳が風化する  
 古傷は何度なめてもほろ苦し  
 どこまでが本音が試す大ジョッキ  
 子の事になると近視の度が進む  
 神の目の死角で口を拭いている  
 血が滾るうちに変わった事をする  
 五十年妻の手のひらから飛べず  
 大銃をふるう何ともつらい役  
 無事な顔見れば小言が二つ三つ

シメ子 霜石 楓楽 まみ子 宣子 朱夏 石花菜 順三 代子 欣史子 勝 諷云児

信号を待つと儲けが逃げてゆく  
舞う蝶の人に気づかず舞いつづけ  
フイナーレの舞は足音たてて舞う  
乱舞とも見えてきまり手踏んでい

城北川柳会

神夏磯典子報

原稿紙鉛筆で見る過去未来  
まだまだと銀行だけは自身ゆく  
遺言の下書きします鉛筆で  
箱庭も繁り我が家の蟬しぐれ

残り火が新しい夢呼びもどす  
絶筆の友の手紙は破れない  
破れても握手を交わすさわやかさ  
すぐ消せる鉛筆だから本音書く

東京は砂漠家出の夢破れ  
犯人の顔を子供の鉛筆画  
清純な少女の夢は虹の色  
菊人形夜の化粧が忙しい

茶髪の子イヤホンつけて墓詣り  
タブーだと思つて破つてみたくなる  
温めた殻を破つて子が巣立つ  
天も地もおこるヒト科にかつてる

墓場まで不足不満がつき纏う  
忙しい嫁がよく食べよく笑う  
逃げ口上鉛筆立てて考える  
現実を夢をかぶせて生きている

感動の余韻断ち切るコマージュナル  
遠花火一期一会の絵を描く  
鉛筆を削りつづけて何を待つ

清芳 香住 能子 あずき  
義江 登美子 あやめ  
政子 睦子 高栄  
久留美 典子 一枝  
史風 賢子 一步  
トヨ子 ただし  
昭子 朝子 順三  
あい子 とし子  
千里 倫子 白峰  
春蘭

丁寧な断り状にほっとする  
迷わずにさばさば生きるマイペース  
計報欄に置き換えてみるあすの風  
掌が丸めて捨てた嘘一つ  
白装束仕付けの糸に情を絶つ  
破れたら繕う針を母は持つ

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

珈琲タイムタ立のめぐり逢い  
傘を干す昨日の暎消すように  
エルニーニョ夕立雲も顔出さぬ  
虫干しをして脳味噌を入れかえる  
干してある梅を頬ばる暑い夏  
正座して太陽に干す心あり

十九歳振り袖を着て大人びる  
目が覚めたらもう昼ですよ日曜日  
恋になりそうなまあるい月が出る  
月参り嫁に連れられお蔭さま  
丸い月肩の力を抜きなさい  
不況でも今宵の月はまん丸い  
母の命日昔の月を見ていよう  
月はいまでも神話の中に入れておく  
針のない時計ふたりは逢っている  
孫の胃は十時と三時よく覚え  
狂わない時計どうにも肩がこる  
目覚しを止めてやりたい良い寝息  
棟梁の一服たしかな腹時計

千歩 達子 寿美子 志華子 千恵子  
螢 きみ子 睦子 春恵 信子 多哥由  
一路報

竹原川柳会

時広 一路報

お父さん私の苦情だれが聞く  
苦情にも言い方ってあるやんか  
緩やかな風に甘えて背伸びする  
我が家には無駄なフロアが多すぎる  
緩やかな風に誘われ寝てしまふ  
玉葱が今日の苦情の顔に見える  
子の苦情痛いところを突いてくる  
ワンフロア与えて威厳取り戻し  
緩やかに極く緩やかに歳をとる  
美人なら苦情もいつか言いそびれ  
生も死も包むガンジス緩やかに  
ゆるい坂も余生は妻と手をつなぎ  
苦の道を行け母さんの声を聞く  
エルニーニョ春夏秋冬消えそうで  
緩やかな流れに乗ったローヒール  
緩やかな坂も長いと愚痴になる

大史子 高<sup>3</sup>千枝 蘭幸 喜久恵 房牛 蝸牛 貞子 一枝 静風 不朽 栄恵 力

天井の広さと同じほどの視野  
無人駅せめてトンボが来て止まる  
いつまでも夢追いつづけ卒寿まで  
おかげさまおかげさまで母卒寿  
動かれて長寿花咲く実もむすぶ  
晩酌も長寿の薬なめてます  
ストレスをためず長寿の村ができ  
長寿の夢音を切られても抱いている  
医療費がぐんぐん上がる長寿国  
四世代明治の気骨生きていく  
優しくて月は心に忍び込む

喜美子 笑子 夏喜 淑子 千年枝 規代 笹舟 正宏 節居 一路  
まゆ子 真紀 芳子 末坊 高<sup>1</sup>圭 多香 河南子 川笑 川童 照月 かよこ 一風 ダン吉 洛醉 美花 鉄心

川柳大阪

坊農 柳弘報

お父さん私の苦情だれが聞く  
苦情にも言い方ってあるやんか  
緩やかな風に甘えて背伸びする  
我が家には無駄なフロアが多すぎる  
緩やかな風に誘われ寝てしまふ  
玉葱が今日の苦情の顔に見える  
子の苦情痛いところを突いてくる  
ワンフロア与えて威厳取り戻し  
緩やかに極く緩やかに歳をとる  
美人なら苦情もいつか言いそびれ  
生も死も包むガンジス緩やかに  
ゆるい坂も余生は妻と手をつなぎ  
苦の道を行け母さんの声を聞く  
エルニーニョ春夏秋冬消えそうで  
緩やかな流れに乗ったローヒール  
緩やかな坂も長いと愚痴になる

喜美子 笑子 夏喜 淑子 千年枝 規代 笹舟 正宏 節居 一路

まゆ子 真紀 芳子 末坊 高<sup>1</sup>圭 多香 河南子 川笑 川童 照月 かよこ 一風 ダン吉 洛醉 美花 鉄心

天井の広さと同じほどの視野  
無人駅せめてトンボが来て止まる  
いつまでも夢追いつづけ卒寿まで  
おかげさまおかげさまで母卒寿  
動かれて長寿花咲く実もむすぶ  
晩酌も長寿の薬なめてます  
ストレスをためず長寿の村ができ  
長寿の夢音を切られても抱いている  
医療費がぐんぐん上がる長寿国  
四世代明治の気骨生きていく  
優しくて月は心に忍び込む

喜美子 笑子 夏喜 淑子 千年枝 規代 笹舟 正宏 節居 一路

まゆ子 真紀 芳子 末坊 高<sup>1</sup>圭 多香 河南子 川笑 川童 照月 かよこ 一風 ダン吉 洛醉 美花 鉄心

安普請だつたうぐいす貼りの床  
おかえりと駅緩やかな顔をする  
男まだ初志は緩めぬ道半ば

比呂志  
希久志  
雅巢

憧れは心の奥の玉手箱  
放言がフロアにひびく大安日

柳昌  
一步

憧れのハワイに一回行きました  
9号に憧れているのによろ食べる

まつお  
敏

憧れは二十歳の年にしてました  
全米を揺るがす不倫だつてある

信醉  
本蔭棒

あこがれた橋見通しが甘かった  
本当の苦情はビール飲んでから

金太  
笑風

事毎に隣に憧れるから困る  
総務課が苦情マニアを知っている

柳宏子  
重人

恋に酔うダンスフロアの薄明かり  
川柳ささやま

柳弘

定年の靴さりげなく脱いである  
あの時の刺をはずかに抜いた人

純子  
恵美

スーツケース一つが家出するドラマ  
翫雲二人のドラマ振り返る

美智子  
多美子

千切れ雲届けてほしい恋の夢  
当分は甘えていよう母の膝

末野  
八重子

自分史を綴るドラマの一代記  
肩書きが消え当分の靴を干す

素水  
とみ子

朝ドラに学ぶ努力に実る秋  
母さんの小さな背なにあるドラマ

つや子  
ヒサ子

あの世界から届く郵便あつたら  
飯茶碗今日のドラマを山盛りに

和子  
かほる

富美

届かない幸せもある片思い  
輝きのドラマが飛ばす今日のうつつ

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

何軒も設計だけで古希を越え  
敬老の文字に負けない年をとろ

割り切れぬ端数へもめる子のお菓子

専守防衛燃やす隠し旅支度

侘びしいが沈黙こそが老い之道

線香の漂う病院南無阿弥陀

人材を求めていきますオウム教

中腹の眺めも可なり秋の風

ガラス戸をピシヤリと閉めて敵味方

風立ちぬ雲が鯛や鯖を呼ぶ

長生きを国是にしたくない福祉

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

なよなよと色気あるほど毒がある

負け犬の悔し涙で腹は満つ

毒キノコ食べてあの世はまた早い

波静か夫婦の愛が船出する

花道を夢見ています天狗茸

新婚の門出で遭つた霊柩車

負けてから素足で歩く冬之道

各論になるとそぞろ出る小骨

暑気当り夏に弱いと北の性

生きさまは負けるが勝ちの羅漢さま

新婚は二飯つぶまでやわらかい

可住  
靖子

勝視  
虹汀  
久仁於  
實

孫という魔力が背骨まで溶かす  
月誘う茸に魔女の貌がある  
初心者をころりと騙す月夜茸

腹の子も新婚旅行に連れてゆく  
蛇口から妻の恨みが顔を出す

核燃に北の背骨が凍り付く  
勝つことを諦めてから旨い酒

宮口 克子報

名人が磨くと石が生きてくる

躰いた石の重さを持ち歩く

平均点以上を求められる靴

父を越すととき少年の太い眉

みんな帰ってそれから重くなる時間

医の倫理重い命と向い合う

重い重い約束をする落とし蓋

紙一枚こんなに重いものを知る

リストラへ重い鎖を切る袂

正解が欲しく重さに耐えている

毒カレイ以後靴が鳴らなくなった街

退社ベル靴が夕やけ歌い出す

愛一途ラストダグシに燃える靴

一山を越えたいき靴の跡

精一杯生きて余生の靴磨く

太陽へ行く子と歩くスニーカー

耐え切れずボツリ開いた重い口

頼る気にはさせる貴方の太い腕

両の手にもうおさまらぬ記念樹よ

黙人  
花峯  
一花  
愁女

大吾  
五楽庵

敏人

さち子  
英子  
保州  
輝子  
大輪  
高夫  
富湖  
佐代子  
ふみえ  
誠子  
三男  
豊太  
良

利治  
めぐみ  
紀美女  
富美子  
あつむ  
呑天  
寿子

ウエストの大きさも女の一大事  
 名人が居るので村の名が知られ  
 名人の繰り出す扇子槍となる  
 パチンコの名人裏にあるリスク  
 名人を育てた名もなき人  
 名人も家では並のお父さん  
 名人芸扇子でうまいうどん食う  
 名人の絵筆支えた細い腕  
 下駄箱にいまも未練のハイヒール  
 名人の子も名人で魚釣る

紀久子  
 紫香  
 鉄治  
 健三郎  
 和重  
 美子  
 稚代  
 君枝  
 克子  
 緑良

リハビリの水着は少し派手を着る  
 ミサイルの恐怖を背負う世紀末  
 忠孝の歴史も消えた世の乱れ  
 生活のリズム狂わす模倣犯  
 クラス会武蔵音頭で肩を組む  
 切りすてた噂ひとつが舞い戻る  
 虚と実のはざま見事に泳いでる

川柳塔鹿野みか月 土橋

たづ子  
 ひでの  
 昭子  
 絹子  
 和子  
 あすなろ  
 寿恵子  
 蟹報

何よりの賞姑さんに褒められた  
 尋卒の賞状だけが神棚に  
 菊花賞いきおい込んで馬になる  
 賞罰もないが欠点ならこざる  
 人生のどこかで区間賞を取る  
 旗をふる役で脳味噌忙し  
 赤丸で唇が埋まり気忙しい  
 気忙しく動く政治の頼りなき  
 気忙しいなど考えず日を暮らす  
 気忙しく振る舞うように生まれけり

くに子  
 睦子  
 富久恵  
 はるお  
 盛桜  
 智恵子  
 実満  
 茂  
 汲香  
 諷人

大原川柳社

矢内寿恵子報

モリハナエ着てもすつきりせぬ私  
 戦中戦後嫁妻母と守る店  
 感情線の太さで妥協してくれる  
 縄叩き探してるまにアブが逃げ  
 良い風に逢いたく優しい眉をかく  
 夏休み我が家民宿さまた秋の風  
 風鈴へ御苦勞さまと秋の風  
 天高く平和な彩で雲流れ  
 すつきりと別れ話が出来た夜  
 十指みな遊び上手で空財布  
 ひと雨がほしい畑が背伸びする  
 逮捕するお巡りさんが逮捕され  
 生きている証の杭がまだ打てぬ  
 老いた手の隙間をにげる運  
 恵みの雨人も草木も乞い魚がれ  
 名月に愚痴も悩みも流される  
 叱る子にうかつに見せた一しずく

はじ芽  
 みづえ  
 妻  
 さちこ  
 玉恵  
 あやこ  
 朝代  
 辰江  
 和歌子  
 悦子  
 喜美子  
 巴子  
 正己  
 敏子  
 こふゆ  
 はるみ  
 地佳平

心安いひとに貰った大南瓜  
 専農の一代憎の汗を拭く  
 土壇場の竹槍笑い事でない  
 若葉マーク信号無視で突っ走る  
 こんなにはとつきに名前浮かばない  
 川柳も五七五もおもしろい  
 川柳に浸っておれぬ家計簿だ  
 秋晴れに干さねば損をするようで  
 御祝いのあちらこちらに札が飛ぶ  
 あちらから風邪を貰って三日寝る  
 手の内を見せぬあちらの下心  
 ふて顔はあちらを向いてほしい  
 とぼとぼすればあちらに追い遣られ  
 蕎麦の花やがて子孫のため稔る  
 お茶作り一等賞の汗涙  
 まぐれ当りと謙遜をして賞を抱く  
 生前に賞を飾ってあげたいね  
 ツキの薄い女賞状を抱きしめる  
 金一封は賞状よりも有難い  
 賞状に亡父の遺徳をまた偲ぶ

野草  
 節子  
 幸枝  
 武子  
 初子  
 孔美子  
 弘子  
 久枝  
 かつ乃  
 宣子  
 公子  
 和子  
 きみ子  
 菊野  
 隆風  
 房子  
 三千代  
 由利子  
 八重子

自慢した口から崩れてゆく積木  
 母が積む積木をくすず憎い風  
 子には子のでっかい夢がある積木  
 手作りの積木に貰う親の愛  
 五十年積木つんだりくすしたり  
 カンナ屑流石親方らしい技  
 珍しく素直な妻にうろたえる  
 さあという時うろたえるのはいつもババ  
 本心を打明けられてうろたえる  
 栓抜くとラムネの泡がうろたえる  
 女ばかりのエレベーターでうろたえる  
 うろたえる程の男が見つからぬ  
 ヘルメットぬぐと女の顔が見え  
 つまずいた女正味で立ち向かう  
 長話正味のとこは聞きもらし  
 「傘の天気」と呑気な日本人  
 ライバルに口惜し涙は見せられぬ

友照  
 友照  
 杜的  
 ルイ子  
 芳子  
 紫香  
 諷云児  
 柳宏子  
 白溪子  
 百合子  
 豊次  
 礫  
 武庫坊  
 吉之助  
 求芽  
 てる  
 笑女

京都塔の会

松川 杜的報

父親という看板はおろさない  
大物と言われ規格に合わぬ人  
片影を片影をと拾いけり

他人ごとであつてもいいこと聞きうれし  
限りなく黒に近いと治るとする

待ちました正味五分の治療なり  
じわじわと正味を吐かす老刑事  
軽くても重たく見せる芸の技

一瞬の際に素早い掏摸の技  
うろたえるばかり大黒柱逝く  
うろたえる形に下駄が脱いでいる

履歴書に正味の私書いている  
薬をやめてひたすら歩くのも良いか

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

わたくしの行方はきつと星になる  
風を集めて父の行方をきいてみる  
わたくしの行方を見て娘が二人  
ゆくえまだ知らず明日の風に乗る

どなたかとお話したい秋夜長  
老いとや納得すくの秋の中  
恨みごとと言えば心が寒くなる  
山里の恨みを呑んでダムの底

恨みの深さ埋めてくれるのは時間  
恨みから酒におぼれてゆく弱味  
遣伝子を替えねばすらりとはならぬ  
失言をすらりとかわす二枚舌

誘惑をすらり交わして風になる  
無農薬すらりは望まないキニューリ

しげお

正坊

春蘭

美穂

水客

和歌子

波留吉

ただし

庸佑

欣之

英一

典子

年代

宮崎シマ子報

朝子

夕花

シマ子

弘直

春子

森子

千里

秋子

剛治

信博

三男

泰

ますみ

柳伸

まだ女すらりとしたい美容機器  
本論になればすらりとかわされる  
馬に鞭見せて励ますゴール前  
船と鞭使い分けるも人の智慧

愛の鞭痛みが止まる頃わかる  
心の門とぎしてしまふ鞭の音  
愛びしりびしり手加減しない鞭  
鞭見せぬ情に少年飢えている

夏やせもなし味覚の秋がこわい  
想い出ばかり数えて秋の万華鏡  
古里は星の数など数えない  
十まで数えた風呂に亡父が居る

歳月へ数え切れない罪と罰  
あ何回夫婦げんかが出来るだろ  
誰も居ぬ部屋で数える貯金帳  
歳の差を数えておことわりをする

村人はバスの遅れを咎めない  
村はずれ風ひそひそと道祖神  
木喰仏守る村むらめぐる旅  
ほろ苦い想い出がある村の駅

バスコンを提げて村から嫁が来る  
村祭り花子と太郎結ばれる  
リストラのニュース夫の顔を見る  
そつとしてやろう卵を抱いている

そつとして下さい敗けた後だから  
再起するあなたへそつと肩を貸す  
そつとしてあげよう祖母のいい寝息

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

能子

たず子

周信

柳宏子

いわゑ

貴代子

春蘭

晴美

てる

トミエ

義子

澄子

文

房子

透太

しげお

富喜子

鹿太

紫香

洋風

一風

東雲

勝美

弘一

宏

欣之

弥生

ラストダンスそつと口づけして別れ  
里帰りそつと小遣い母の手に  
自動ドア開いたままの立ち話  
拝む手に朝日真つすぐさしてくる

少年の声が戻った仮設跡  
一人では何もできないお父さん  
旅の宿ボンボン船の目覚めかな  
帰省子のひたいの汗も毛楯振る

年寄りの無病息災小うるさい  
乗り継ぎの駅ではぐれた影法師  
薬屋の老舗変らぬ灯を点す

孫たちに高い高いをしたあの頃  
あの晩の酒一杯が高いツケ  
長生きが幸せかつて恥もかく  
お医者さん高熱出してうなつてる

観覧車に満足してる母の旅  
すべらせた口が払った高いツケ  
高いハナきつと心は貧しかろ  
マネキンに着せればすぐに買うお客

リバイバル下駄が風切るニューモード  
ファッション誌見て鏡見て諦めて  
流行語知ってるだけで使えない  
ウィンドーの流行見ながらショッピング

流行より十年きても好きな服  
カラオケで世代がわかる流行歌  
流行に遠いところで生きている  
報道の自由信号青やない

ほたる川柳同好会

井上

直次報

吉太郎

よしろう

柳童

喜美子

桂子

まみ子

和歌子

善守

祥風

勝

見清

眞昭

保子

セツ子

久子

ただし

マスコミが早ばや首を据えかえる  
 マスコミも蜘蛛になったか網を張り  
 マスコミの誇大表現憎々し  
 マスコミの書かない記事に事実あり  
 広告で読んだつもりの週刊誌  
 報道の自由を錦の御旗にし  
 大雨で流れた牛が泳ぎ切る  
 息子から親子の縁を切る電話  
 鮮血が滴りそうな手形切る  
 延長戦急遽ラジオに切り替える

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

直次 馬洗 正安 竹二 昭子 明光 博史 正三郎 雪子

錦鯉スリルほしくてはね上がる  
 なつかしい祭ばやしについうかれ  
 風向きが変り蛭はだまりこみ  
 ほたる来い孫に引かれて蛭来い  
 果てしない野外ステージ舞う蛭  
 蛭など見てはいられぬ塾がよい  
 うっかりと肩を叩いた知らぬ人  
 なにげなく楷書のよくな返事した  
 なげなしのスリルぶくじ買ってみる  
 五万ポルトの上で雀のランデブー

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太報

はるみ 鈴江 かつ子 聖子 恵美子 好栄 ちよえ 博利 清泉 白汀

ロマンの芽育って欲しい水をやる  
 孫からの帽子が似合う敬老日  
 泣き虫の君の魅力は泣きばくろ  
 白秋の唱歌少女に戻らせる  
 人生の垢を溜めてる背の丸さ

一閑 江美 鹿太 摩托コ まさ

貴方しか言えぬ言葉を待つ女  
 敗者復活いちちの望み捨て切れず  
 今か今か孫の吉報待っている  
 松茸の味も知らずには娘は嫁ぎ  
 時間待ち冷めたコーヒス飲みながら  
 湯上りへ魅力を隠すバスタオル  
 飼えと言う母の声待つ拾い犬  
 夕暮れは一寸寂しくなつて秋  
 待った雨二日になると嫌になる  
 住み慣れた街が一番性に合う  
 夜明けまで待とう風はきつと止む  
 敗れても明日に向かつて奮い立つ  
 魅力ある足が向かいの席にいる  
 山に来て山の魅力を知るこだま  
 落武者の墓ひっそりと埋もれる

うぶみ川柳会

上田

宣子報

まだ芯に匙の投げられぬ意地がある  
 いま匙を投げるの僕の敗けになる  
 西瓜割り大上段から真つぶたつ  
 細腕が見事天狗を振伏伏せ  
 触れ込みのことばに見事踊らされ  
 太陽は見事休んだことがない  
 また自殺若い命が軽すぎる  
 軽率なひと言のどが痛みだす  
 煮物にも母には勝てぬ匙加減  
 軽妙なジョーク傷口としてゆく  
 耳打ちの割には軽い内緒事  
 盆棚の母も見ている遠火花

満寿蔵 正治 いわお 勇次郎 向次郎 六浦 弘治 昌子 夢之助 澄子 石舟 十四郎 紫香 風云児 柳宏子 健一 孝男 天雀 良雄 あづま 鬼桜 天人 葉士人 華子 雄人 正和 登美枝

軽がると人を捌いている数字  
 責任を軽くしてから寺まいり  
 祭り中毒町が認知の一日だ  
 雑談の匙に私も乗せられる

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

満ち足りた主婦ですボランテアに燃え  
 秋雨に洗われ柿が艶を増す  
 皿洗い不十分だが褒めておく  
 山積みのを器を洗うめでたい日  
 フルムーン洗い流した傷いくつ  
 山小屋で歓声あげた流れ星  
 トラクター山の悲鳴を無視してる  
 コンパクト女の弱さ持ち歩く  
 こころ一番弱い女のふりをする  
 因縁の赤い糸でもすぐ切れた  
 わき水の喉ごし山の味がする  
 外交の極め手にゆくら過去への傷  
 揺り籠にまさる豊かな母の胸  
 洗濯機の中でももつれあふふたり  
 今こが分水嶺とたちどまる  
 豊かさの中で不況がすねている  
 気の弱さ隠すピエロの化粧台  
 山眠る遭難の子を抱いたまま  
 墓洗う心のトゲを抜くように  
 貝塚に豊かな海を重ね見る  
 ルノアールの裸婦に暫く立ち尽す  
 帰国して蛇口いっぱい手を洗う  
 山高帽笑いと涙振り撒いて

ひろ子 螢 くに お 宣子 充子 純子 亜希子 見早子 絹子 笑子 道子 ふみ 句多留 羊子 街湖 徳三 和可 良子 八重子 鈴美 広和 省子 十三子 サト子 あらた 雅子 かず枝

リストラを目前にして首洗う  
幸せは家族の皿を洗う朝  
皿洗う音に機嫌が知れてくる  
不景氣の日本に米が余つてる

岩美川柳会

羽津川公乃報

昔話をそろそろネタが切れてきた

きみ子  
圭一郎

ユニークな持ち味句会盛り上がる

睦子  
公乃

どんぐりの背くらべかな持ち味は

正和  
孝男

スパイスを利かせ持ち味引きしめる

忠良  
一夫

頑固さも老父の持ち味憎めない

美恵子  
節子

善人が取り柄スツテンテンになる

一夫  
節子

のど自慢よい持ち味が節に出る

美恵子  
節子

ライバルの持ち味いつも気にかかり

一夫  
節子

ボカばかりやる持ち味で情けない

一夫  
節子

画布の蟹持ち味がでてあるきそつ  
たつぷりの墨に持ち味いかし切る  
麦ごはんの持ち味忘れたくはない  
持ち味を褒められてから出た調子  
生きているふりが持ち味かも知れぬ  
持ち味は大き器晩成だと信じ  
持ち味をほどよくいかす妻がいる

富柳会

森子報

池

南大阪川柳会

吉川

三幸川柳教室

保州報

治恵  
文子

内縁の夫あてにはせぬ女将  
内縁を夫婦茶碗も淋しがる  
好きだから内縁のまま気にしない  
内縁と呼ばれて久し姥桜

凡一  
咲

節り気のない質問が的を射る

鉄治

政勝  
早智  
潮華  
満秋

落ちたまま戻る気のない低金利  
十階の窓から見てるまるい月  
美しい噂に揺れる秋ざくら  
満ち欠けは月の吐息よやがて闇  
積んどいた本に視力が追いつかぬ  
銀の鈴まだ無欲ではない音色  
ライバルの八重歯に負けてはかりいる  
パレットに虹の七彩出てこない  
中年の指からもれる熱き砂  
ふりあげた拳の行方愚痴になる  
風化せぬ夢を抱いてる恋ごころ  
補聴器が内緒話を聞きたがる  
納まりが悪い私の恋ごころ  
恋文を枕に敷いて夢で逢う  
花がらを摘んですつきり風は秋  
地球から眺めた月は美人だな  
駅から五分間と話を捨てきれず  
恥から五分間と話を捨て帰る  
指輪返しに出向けば俄雨になる  
梵鐘の余韻に乗っているいのち  
秋風へ茶髪が枯れてくる  
人間を一枚脱いで素っ裸  
満月はときどき孤独死を想う

三和子  
昭子  
冬虹  
美代子  
勇太

内縁が先にもらつてある遺産  
ます器中身あとから考へる  
それなりの中身出てくる高い椅子  
秋風に財布の中身覗かれる  
中身ある話のあとはレモンティー  
恋の中身は小人が踊つていただけ  
孫の結婚中身は驚く程入れる  
内訳が中身と違う接待費  
たやすくは心を見せぬ赤いバラ  
空蟬の中で哀しい恋をする  
さあという時埒のあかない代理人  
百歳を生きた誇りのある詠り  
風の益ぐるりは温い里詠り  
アナウンスの詠りは消えた故郷の駅  
キンギンさん名古屋なまりの戎顔  
トンネルを抜けると変るアクセント  
マナだけは分っています赤ちゃん語  
カタカナ語わかつた顔で聞いておく  
難解をすんなり解かれ恥ずかしい  
ほうせんか母は意けたことがない  
掃除機が欠伸しているひとり者  
コオロギが鳴いて慌てるキリギリス  
水やりを怠けて花の悲鳴聞く  
朝市の詠りへ客がどつと寄り  
怠けたら怠けたように木は育ち  
無人駅同じ詠りと握手する

千梢  
直子  
たもつ  
正博  
ひさ乃  
アキラ  
清水  
蛙



川柳ねやがわ

江口

度報

少し値上げしてやと孫の肩叩き

お小遣いアップアップと長女次女

値上げには情け容赦もない政治

改正になります値上げとは言わず

年金の背中が寒いまた値上げ

値上げなどせぬ一徹の旗を揚げ

薄利多売値上げ抑える策を練る

川柳へほとほと妻の無関心

バイアグラ何ら関心ありません

関心を持ってほしいと茶髪の子

ライバルの噂へ耳が立ってくる

関心は我が子ばかりの鬼子母神

暗い日本みんな待っているいいニュース

関心をひくのに少し毒を舐め

父の忌や遠い記憶に下駄の音

自分史の支えになつた記憶力

九十五のたしかかな記憶舌を巻く

目撃者共通点はギョロ目です

嫁さんが樂觀主義で救われる

妻だけは不倫しないと決めている

携帯で樂觀的な話す

なるようになる樂觀へさんま焼く

咳払いして追い越していく影も秋

消費税なければあれもこれも買っ

お裾分けに行つて倍ほど貰ってくる

箸を手にも単身赴任の独り言

保険屋と妻がたびたび会っている

文秋

かすみ

とし子

小路

礫

高栄

庸佑

仁清

たもつ

三郎

洋

あやめ

一風

淳朗

透太

波留吉

ルイ子

順三

勇太郎

利昭

英王子

朝子

茜

博泉

恵子

光子

弘一

老人と自販機増える街に住み  
敬老の祝詞本音は皆悲鳴  
煙草の輪楽観してのように見え

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

毒茸も知らずにうんと採つた籠

毒を盛る匙は小さい方がよい

毒蛇も血清残す免罪符

毒舌を通す男で頼られる

薬にも毒にもならず鍋と蓋

毒消しの薬この頃よく売れる

山彦が返つてこない心配だ

幸せすぎて心配して苦勞性

心配を打ち消す空が晴れてくる

成るようになるさと心配などしない

小穂とびはねて心配はかりする

心配をよそに口笛吹いている

評判があちこち一人歩きする

評判は大評判のラーメン屋

評判は気にせぬ細い道をゆく

評判の映画ひとりでかみしめる

評判がよくて豆腐の美味い店

そばの花咲いて評判村が出る

休肝日何度も枕裏返す

やる事が多く休日すぐ暮れる

少しずつ時計が狂う休み明け

休みたい時もポケットベルは鳴る

ひと休みして乱されたスケジュール

講演会欠伸ばかりの休み明け

重三  
一途  
度

早苗

満江

忠憲

房子

雪代

多賀子

螢

茂美

静恵

小み

小鹿

秀子

登美子

幸子

知恵子

邦代

きみえ

きみ子

与根一

静江

太泡

桂子

友子

芳枝

退職の父が欵持つ収穫祭  
収穫を終えて迎える雪おんな  
収穫へ鉢巻締めている気骨  
芭蕉忌は収穫時と覚えたよ  
収穫の祭目玉で人集め  
跡継ぎが育ち祝つた収穫祭

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

食通もグルメ雑誌をひとめくり

私には母の料理がグルメです

海の幸地平線見つ食べたいね

美食家がパリで喰つたそばの味

グルメ好きいつしか小さい店のママ

グルメ嗜好カンパンたべた日思い出せ

秋と秋のあわいを走つてグルメ

父さんによく似てきたな声がわり

罵詈雑言吐いて残つた風の音

日暮らしの女の音が耳障り

ソプラノで孫と娘が跳んでくる

とても優しい声が聴こえてくる街だ

声を無くして芒の唄うのが解る

日の菩薩身内に秋の声を聴く

切り札があるから強く押してみろ

浜風に押し戻されて一球に泣く

横車押し通すにはわけがあり

耳遠い男が押ししているボタン

一番憎い女はわたくしのクローン

空蟬の背なに一會の名残りあり

年金の生る木へ手入れ怠らず

米子  
石花菜  
義良  
日出子  
ひふみ  
叮紅

節子

千恵

正子

日出男

昌子

愛

芳子

夢之助

武庫坊

一笛

弘治

翠子

美子

一

十四郎

義芳

久子

伊三郎

年代

比ろ志

富美子

風の駅少女がくれた秋ざくら  
だんじりを押しに戻った里の秋  
都会の死角に咲いた曼珠沙華

秋風に無帽の手足乾きけり  
戻ること拒んだ風の糸切れる  
長雨に包丁二本研いでおく

秋のなが雨あくびしている洗濯機

川柳塔打吹

米田 幸子報

信仰に拘わりすぎて毒される

逃げた蚊がまたぬけぬけと刺しに來た  
陰で紐引くから話揉めてくる

陰口がばれて上司に左遷され  
拘わった野良猫いまは居候

ぬけぬけと失樂園をやっている

トラブルに拘わり好きな人が居る

不義理した奴がぬけぬけ金借りに  
陰の花目立たないけど情がある

虫の息つないで長く生きのびる  
ぬけぬけと持てて困ると彼が言う

今日も掛けぬけぬけ帰る千鳥足  
拘わらぬ喧嘩大きい程がいい

一言に拘わっている長い夜

昔から拘わり知った山や川  
この人は拘わり程に味が出る

虫かごの中でもだえる永田町  
まことげな事ぬけぬけと舌の先

その時が来るのを陰で待っている  
ぬけぬけと問わず語りをするのろけ

光穂 紫香 ヤス子 薫 静 昭三 キク子

隣からぬけぬけ世辞を言って飲む  
拘わりは知らぬ存せぬ藪の中  
ぬけぬけと自分の事は棚に上げ  
ぬけぬけと兄貴の背広質に入れ  
男の留守にぬけぬけと這いあがる  
亀裂から毒虫たんと出馬する  
島国の山陰に住みまんぞくまんぞく  
もう十日ほど陰口を言っていない  
拘わりが嫌で霞を食っている  
金銭に拘わることは知らんぶり

川柳高知

川竹 松風報

塾通い個性を伸ばす暇がない  
個性美を知らぬ女の厚化粧  
個性などないから奴は出世する  
三人の子に三様の個性見る  
払っても消えない罪を一つ持つ  
姑に当らぬように石をける  
秋の陽を集めて柿の色となる  
嫁と飲む酒は極楽浄土なり  
盟友と逢うて話は過去ばかり  
湯煙のムードに負けた酒の量  
貸し借りの無い友情の酒を酌む  
香水をつけて男の値が下がり  
安物の香水乗ってくるラツシュ  
四十万の詩情をそる沈下橋  
丸木橋やさしい兄を思い出す  
お月様この橋渡るべきですか  
陸橋を見上げて老いの独り言

睦子 孝恵 富枝 一夫 和歌子 石花菜 節子 完司 幸子

川柳クラブわたの花 吉村 一風報  
恨んでも家族親戚まるい鼻  
酔いしれて本音をはいてみたい人  
風を読む男の眉が動かない  
母がゆく花いっぱいいに囲まれて  
玉の汗男が光る炎天下  
じいちゃんか男の約束をしたね  
いつからか男も愛嬌と言われ  
終電車男盛りは忙しい  
平成十年おやじが習う護身術  
角切られ雄鹿しおしお糠せんべい  
口下手の手紙じくくり胸をつつ  
オーデコロン男盛りもすぐに過ぎ  
栗の花おとこは遠い絵となりぬ  
愛の鞭心で泣いて打つつらさ  
ブランコで恨みのおとこまでゆらす  
バスツアー女性いてこそ花が咲く  
いただきます御馳走さまが言えました  
愛の鞭先生うまく笑わせる  
平坂名の増えた手紙に老いを知る  
男かてどつと泣きたいときがある  
男の子でしよう泣かずに立ちなさい  
面くいでまだ独身とおしえる  
酒の場でまじと見せ場の無い男  
満点のパパで昇進遅れる  
今頃に効いて来ました父の鞭  
まだ七十老人会は五年先  
恨みごと一時精算夫婦ツア―

松風 京子 佳風 テルミ 圭風 和江 良雄 朱坊 竹萌 千恵子 有佳 菊野 幸泉 快風 孝雄 功 幸子 節子 完司 幸子

友甫 逸子 美智子 朝子 一道 ますみ トシエ まさと いつふみ 春江 知佐子

カマキリの雌に食われて死ぬ運命

いずも川柳会

園山多賀子報

鬼遊

面影を追って四国の旅遍路

旅路には一本線が引いてある

老夫婦出雲風土記の旅半ば

一病を持って旅路が深くなる

終章の旅路で浴びる花吹雪

挑むしかないカマキリに秋の風

挑戦の数ほど挫折繰り返す

人間の驕りが神にまで挑み

挑むよ間にテトラボットの波しぶき

祭笛ジュニアが挑むバチ捌き

祝福にきらりと光る良い笑顔

太陽に祝福された柿の色

祝福のドレスは白い方がよい

きれいな箱に祝福が詰めてある

花束も新婦と共に泣いている

台風が逸れて殊更寿ぐ日

おめでとく真珠の涙一しずく

よい空気がもす女将は美人だろ

君は空気が風の形に流される

柏手が空気に触れる神の里

いい空気がいずも川柳会が好き

いい空気の中ふる里の母元気

善人の部屋は空気が澄んでいる

親と子の對話空気が弾んでる

飾らない母の苦勞を聞く夜長

着飾って金魚の唄を唄います

芳子 主詩朗 章峰 寿美 多賀子 一葉 昌枝 ちかし 文子 まこと 芙佐子 芳枝 満江 町紅 茂美 草丘 秀子 蘭水 青湖 房緒 正朗 明朗 明子 蘭水 房水 きみえ

飾り気のない人となら歩けそつ

牛歩でも余生を飾る墨をする

最後まで女は飾る準備する

終章を飾る頁を朱に染める

川柳塔おおとり

原みさを報

朝ごはん湯気の向こうに母がいた

父親を心に朝食とつたころ

朝ごはん日々幸せをかみしめる

献立はワンパターンの朝ごはん

おふくろの味白米の朝ごはん

愛らしい口が平気で人を食う

いい笑顔愛が育っているらしい

精子まで減ってるらしい僕もかな

すり減って仏の頭らしい石

ホステスのおめずらしいは高くつき

ねていても良い夢らしい笑い顔

真実は裏を返せばすぐわかる

裏木戸を開け大根を置いて行く

妻の乱かあるくみてはいませんか

七人の敵より怖い妻がいる

ありがとく妻にはとても言いにくい

実印と私の目方はかる妻

札束にとつても妻は敏感だ

同乗の妻がアクセル踏みたがる

やりにくは妻にまかせた高いびき

横顔に妻の不満がチラと出る

休日には課長も妻の指図受け

貧乏も気楽と妻は高笑い

あきら

昭二

篤子

義良

風花

住子

清子

敬之介

小生

ゆきの

せつ子

雄々

艶子

舎人

崇

庸二

伝住

孝子

登美

由多香

千秋

黙光

宏章

野草

道草

以和万津

彰雄

女房の手綱の丈で生きている

翠洋会

児玉

みさを

蛙報

間違えたふり人妻の手を握る

育て方まちがえたかと息子みる

寺巡りしてそれからの夫婦仲

晴耕雨読背中に暇と書いてある

巡る季に追われ追われて生きてる

あの方の背中が見えてドキとする

新しい電池長針早巡り

お化粧をする気にさせるよい天気

化粧した顔より素顔良い美人

待合室で出来た一句に化粧する

厚化粧しても隠せぬ背がまるい

お礼所をめぐって業を一つ捨て

カタログで温泉巡りする不況

口べにがこすきたかしら赤とんぼ

背なに手をかけた男の軽い嘘

意地はつてみても背中が泣いている

客足の途絶え山の湯雪化粧

間違つた薬を飲んで風邪治り

まちがえた電話に頭下けている

秋天をぼつくり寺へ紅刷いて

給くれる人を味方とまちがえる

雪化粧寒さ重さに耐える枝

父の背も心も丸く喜寿の春

誘われる手感で紅をひき直す

間違いを正して深くなるしこり

巡り合い満ち足りた日をありがと

正坊 蕉子 絹子 義良 蛙 叡子 英王子 伽羅 舞夢 日の出 千枝子 志華子 恭昌 千梢 周信 靖巳 石舟 東雲 会美 喜美子 楓楽 希久子 真砂 澄子 みつ子

まらがいを つついで からの冷えた酒  
父の背に曲がった首の子のねむり  
胎内めぐりこれが地獄の暗闇か  
終電車ときどき家をまらがえる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

朱雀門いま満月を押し上げる  
想い出は散兵線の冴えた月  
地球はまだ青いでしょかお月さん  
満月に恋する猫が連れ合つ  
しあわせなこと通帳の桁足らず  
人間のコストもダウンする不況  
現金で買い叩かれてるコスト  
たこ焼のコスト計算するお客  
店じまいコストは別に売り払い  
断ち切ったはずの絆に心揺れ  
ひよつとこの面世間を泳ぎ切る  
ブツツと切れた日もある共白髪  
断ち切ったはずの人が夢に出る  
大胆に切った師匠の花鉢  
臆病で男を上げたことがない  
不景気な顔で診察待っている  
エンピツの芯をなめれば知恵が出る  
やるが多くて日々が楽しくて  
子が去ってプランコ風が来て乗った

ローズ川柳会 山崎 君子報

冷房の程よさサロンの品定め  
遺伝かな孫が音痴という便り

久峰 春  
鬼遊 さと美  
正坊報 田中 正坊報  
しげお 正三郎  
楓 楽 一笛  
明光 正坊  
石舟 博史  
杜的 柳宏子  
諷云児 周信  
享子 庸佑  
ただし 紫香  
悟郎 紫香  
きく子 女

聞こえますか吉田首相のバカ野郎  
上品に喋ると舌がもつれ出す  
ねこ背にも気品の見える上の人  
上品とは言えぬが笑い絶えぬ家  
挨拶がわずらわしくて道曲る  
六十兆ボンと出て来る手品です  
節分の豆だけ孫に勝ちつづけ  
孫という武器を上手に使われる  
上品に飲んでおります初対面  
品定め迷い錦を二往復  
寝冷えなどしないようにと孫のふみ  
こつそりと誇りにしてる孫がいる  
帰郷した孫抱きあやす里の唄  
風鈴の舌が千切れる遅い秋  
二世帯住む結び目に孫おいておく  
ドレス着た孫の姿を夢でみる  
お茶席で品よく食べてむせ返る

川柳会梨花 坂田和歌子報

何もかも頼むたのむと生きのびた  
輪の中のどなたが次に倒れるか  
輪の中を逃げて行くのは負け犬だ  
放し飼いの信頼をしてくれている  
応援に赤旗もってやって来た  
金の有る奴が応援はでにやる  
姑に輪かけた大法螺吹く嫁だ  
輪になってキャンプファイヤー夏の夢  
月が輪をかぶると猫が恋をする  
応援はいらぬ自分の足で立つ

松茸を食べた食わぬと淋しいね  
どんぐりの輪から笑ってきく駄法螺  
松茸を横目にしめじ籠に入れ  
応援に来たのはみんな高齢者  
派手に舞う陰に涙の跡がある  
応援にとんでもない奴つれて来た  
底辺は輪ゴムで束ねられる口  
公平に分けた松茸ごはんです  
この指輪誰に貰った指五本  
汗涙口とんがった応援歌  
三度目の土下座の策にもう乗らぬ  
頼まれたあとでわかつた裏事情  
頼むときだけお辞儀する選挙前  
信頼の重みを肩に栄転地  
頼むより頼まぬ方が良かったか  
日曜日妻に首輪をはめられる  
無口だが頼んだことはしてくれる

大阪文化祭川柳大会秀句

平成10年10月25日・大阪市中央公会堂

完司 螢  
かつかみ  
石花菜  
勝見  
一夫  
蟹郎  
夏生  
季芳  
幸子  
門谷たず子  
高橋古啓  
瀬川瑞紀  
坂元一登  
笠嶋惠美子  
柏原幻四郎  
人見芳江

玲子  
きみ子  
睦子  
美恵子  
節枝  
悦子  
和歌子  
行男  
ただし  
忠良  
求芽  
正和  
檳榔樹  
典子  
義子

## 12月各地句会案内

| 句会名                 | 日時と題                               | 会場と投句先                                                       |
|---------------------|------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| 尼崎<br>いくしま          | 4日(金)午後1時から<br>時・返す・雑詠(A・B)        | サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分<br>〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代      |
| 富柳会                 | 5日(土)午後1時から<br>力・配る・自由吟            | 富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分<br>〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子    |
| ほたる<br>川柳<br>同好会    | 8日(火)午後1時から<br>迫る・ゼロ・糸             | 豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅西へ150米<br>〒560-0033 豊中市蛍池中町3-10-28 井上直次 |
| 堺川柳会                | 10日(木)午後1時から<br>つぎつぎ・影(共選)・むかし(折句) | 堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る<br>〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑       |
| 八尾市民<br>川柳会         | 10日(木)午後6時から<br>なぜ・ねじる・盛り場・暗示      | 八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ<br>〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子          |
| 川柳塔<br>まつえ          | 12日(土)午後1時半から<br>来年・残る・急ぐ          | 松江市雑賀町 雑賀公民館<br>〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅                    |
| 川柳塔<br>わかやま         | 13日(日)午後1時から<br>糸・信用・沈む            | 近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前<br>〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良          |
| 西宮北口<br>川柳会         | 14日(月)午後1時から<br>籤・送る・やがて・自由吟       | 西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分<br>〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子    |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯の花 | 17日(木) 正午から<br>汚点・おでん・かくれる・自由吟     | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分<br>〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島凜云児         |
| 岸和田<br>川柳会          | 19日(土)午後1時半から<br>連続・ロマンス・わさび・甘える   | 市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分<br>〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地理村     |
| 川柳<br>ねやがわ          | 20日(日) 正午から<br>勝負・医者・事故・自由吟        | 寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前<br>〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉    |
| もくせい<br>川柳会         | 21日(月)午後1時から<br>のれん・寒い・飲む・自由吟      | 豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分<br>〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊       |
| 南大阪<br>川柳会          | 23日(水・祝)午後6時から<br>熱・粘り・眠り・練る       | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分<br>〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲     |
| 京都<br>塔の会           | 25日(金)午後1時から<br>筆・とことん・電池          | ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ<br>〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽      |
| 東大阪市<br>川柳<br>同好会   | 26日(土)午後6時から<br>こころ・根気・骨・末         | 東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣<br>〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風  |
| はびきの<br>市川柳<br>会    | 27日(日)午後1時から<br>バス・ふらふら・貰う・「品」     | 羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分<br>〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏     |

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

# 柳界展望

倉吉市教育長賞

木の机 鳥の匂いがして  
ならぬ 八木 千代

鳥取県川柳作家協会賞  
陶工の眼から炎が離れない  
植田 一京

★同日、鳥取県川柳作家協会賞の表彰が行われ、本社の受賞は次のとおり。

〈日 満 賞〉

正直なすがたで息切れが続く  
中原みさ子

〈佳 作〉

足の裏生まれ故郷を覚えて  
政岡日枝子

〈佳 作〉

ぼつぼつと意地悪お婆さんになる  
徳田ひろこ

★一番創立90年記念全国川柳大会は、同じ10月11日に

三井アーバンホテル・大阪  
ペイタワーにて開かれ、本  
社同人の秀句は次のとおり

睡眠がこれからひらく息  
づかい 河内 天笑  
★岸和田市民川柳大会は10

月17日、岸和田市立春木

民センターで開かれ、本  
社同人の秀句は次のとおり。

〈きしせん賞〉

同じなら笑って生きるこ  
とにする 三宅 保州

〈きしせん賞〉

重責を担う尖った影法師  
海老池 洋

〈操 子 賞〉

予約しておこう素敵な人  
に会う 岩佐ダン吉

〈文化協会賞〉

肉野菜魚も好きで元気で  
す 河内 月子

★第10回兵庫のまつり・ふ

れあいの祭典川柳祭は10月  
18日、神戸市立勤労会館で  
開かれ、本社同人の受賞は

次のとおり。

オカリナが低く流れて子  
が巣立つ 奥田みつ子

★平成十年度NHK学園全  
家 族 福原 悦子  
神棚の高さで生きている  
家族 福原 悦子

## 新同人紹介

奥 谷 彩 子

— 薫風・由多香・螢・諷人・露杖推薦

徳 田 ひろこ

— 薫風・由多香・螢・諷人・黙光推薦

国川柳大会が10月18日、く  
にたち市民芸術ホールで開  
かれ本社同人の秀句は次のとおり。

は次のとおり。  
連翹の道かくれんばなら  
出たおいで 政岡日枝子

南には解けぬ方程式があ  
る 政岡日枝子  
★西宮市川柳大会は11月1

日、西宮市民会館で開かれ  
向日葵が大きくなってゆ  
く。ピアノ 林 荒介

石ころもシヨックのたび  
に丸くなる 黒田 能子  
学園の未来の笛はおおら  
かに 林 瑞枝

★吹田市民川柳大会は10月  
25日、吹田文化会館メイシ  
アターに於て百十名の出席  
日、八尾文化会館で開かれ

# 柳界展望

★川柳塔奈良創立句会は、

平成10年10月10日、王寺町  
やわらぎ会館にて開かれ、  
投句者を含む百四十七名の

参加があった。本社同人の  
秀句は次のとおり。

万葉の歌人と逢った風の

中 河内 月子  
ひとりには一人の掟箸を

持つ 門谷たず子

★第二十二回鳥取県川柳大  
会は10月11日、倉吉シテイ

ホテルで開催された。本社  
同人の秀句は左の通り。

鳥取県議会議長賞  
ピラミッド太古を語る壁  
である 林 荒介

倉吉市議会議長賞  
蔵のまわりに親兄弟が住  
んでいる 田中 亜弥

同人の秀句は次のとおり。

貴重品だな 海の青さと

瞳の蒼さ 池 森子

亀の足でもその内にその

うちに 高田美代子

朝の窓働く音になつてく

る 河内 月子

河内野に咲いて画になる

綿の花 高田美代子

信頼の川を流れている絆

大内 朝子

★寝屋川市民立総合センターで開かれ、本社同人の秀句は次のとおり。

★寝屋川市民立総合センターで開かれ、本社同人

の秀句は次のとおり。

スランブを脱けて男の顔  
になる 田中 透太

★鳥取県没句川柳供養大会

は12月13日10時から鳥取共

済五階大ホールで開く。題

は敗者復活吟(今年の没句)

・そつと・因果・今なら・

裏腹・半分・晴ればれ・五

分五分・美学(各題2句・

11時半締切)参加費450

0円、欠席投句は12月10日

までに1000円を同封し

て鳥取市二階町3丁目10

2植田一京まで。

★森田栄一作品集「バスト

ラル」発刊記念特別講演と

公開討論会が12月13日(日)

尼崎中小企業センターで開

かれる。講演「層雲自由律」

主宰伊藤完吾氏、「現代川柳

は21世紀に生き残れるか」

墨作二郎氏他8名による激

論150分。会費2000

円。主催川柳アトリエの会

▽人事往来△

■十月十日、豊中市の障害

福祉センター「ひまわり」

で薫風主幹は川柳について

講演した。

■十一月一日の第五〇回西

日本川柳大会には、薫風主

幹・天笑理事長・鬼遊相談

役はじめ同人多数が参加。

▽同人消息△

■木村あきら氏(理事・香

川県)は選挙管理事務の功

労により勲五等瑞宝章の栄

誉を受けられた。

▽御芳志御礼△

■児島さよさん(和歌山県)

から亡夫・児島与呂志氏の

供養として金一封を拝受。

▼おことわり▲

■11月号P5(川柳塔)

下段21行目「ひとりではさ

びふたりはわずらわし」

■P9(川柳塔)上段17行

目「神々のパレードを見た

天の川」

■P80(水煙抄)上段21行

目「信念は変えぬお経を聞

きながら」以上3句とも本

人の申し出により削除。

▼訂正とお詫び▲

■11月号P2・目次2行

目及び目次下表題「温泉や

座・羅漢に寝る羅漢」温

泉や座り羅漢に寝る羅漢」

■P75(水煙抄)上段9行

目興田明↓興田明

# 編集後記

る他人の句を自分の発想と錯覚して発表してしまつた。たつた十七音字、まして同じような生活・考え方の人大々だから、目のつけ所も似通い同想句になるのも無理はない。しかし、それも度重なる「うっかり」では済まなくなるから怖い。

★第五十回西日本川柳大会に参加して熱気に圧倒された。川柳列車カッピ号ではマスコットのぬいぐるみカッピ君から投句用紙を手渡され、車中で作句もした。弓削駅で降りると駅前では女性ばかりの久米南町川柳傘踊りが華やかに迎えてくれた。街をあげての川柳に対する情熱に五十年の重みをひしひしと感じた。

★作句も年を重ねると同じような言葉をつかつて、前系に作つたような句を作つてしまふことがある。その時の自分を詠めば、そんなことはないはずだが、忙しきにかまけて二番煎じ三番煎じの句を作つて恥ずかしい思いをする。

★まだ自分の句だけなら許せるが、頭の隅に残つていて他人の句を自分の発想と錯覚して発表してしまつた。たつた十七音字、まして同じような生活・考え方の人大々だから、目のつけ所も似通い同想句になるのも無理はない。しかし、それも度重なる「うっかり」では済まなくなるから怖い。

★今月号から「先輩・後輩」と題して特集記事を載せる。先輩にはいろいろな意味がある。年齢・学問・地位・経験などが自分より上の人。または同じ学校や勤め先などに自分より先に入った人。先輩・後輩というと体育会系の上下関係などを思い浮かべる人も、句の上手下手をいう人もいるかも知れない。川柳に先輩後輩はない。みんな同列だともいう。しかし、一日早く生まれれば一日の長、あまり硬く構えずに柔軟な考え方でいいのではないだろうか。(み)

ひとこと

## おたより

拝啓 編集後記いつも楽しく拝読致しております。来る十五日は敬老の日、地区からの敬老会へ招待を受けて今年で四年を迎えました。物忘れがひどく不便な毎日を送っています。

大阪の酒の銘柄、初めて知りまして。脱サラで五年前までは酒の販売店をしていましたので、一つぐらいいは知っているかなと探しい致します。(西村 黙光)

▼一九九二(平成四)年四月から、半世紀続いた日本酒の一級、二級の級別が廃止された。もともと特級については、八九年四月からなくなっていたけれど……

▼では、現在はどうな表示がされているのか。大きなメーカーでは大体「特撰・上撰・佳撰」が圧倒的に多く使われているようで、その外「特等・上等・良等」なども見受けられる。

▼昔、地方の小さな蔵元などでは、特級など値の張る酒は売れないから、審査に出さなかつた。審査に出さ

ました。駄目でした。灘の酒なら多少自信ありますが、他の酒は味どころか生産地すら分かりません。酒は甘口の方が好きです。今でも一升ぐらいいは飲みますが、酔いが翌日まで溜まるようになり、淋しさひとしおです。

作句にも難儀していますが、途中下車などしないよう頑張る所存です。よろしく御指導のほどお願い致します。

(西村 黙光)

▼一方では、「吟醸」「大吟醸」「純米」「純米吟醸」「純米大吟醸」「本醸造」「本仕込」「本造り」「手造り」「秘蔵酒」「生酒」「原酒」「生貯蔵」「生配造り」「山廃仕込」等々、

▼私が今までに出会った最高の酒は、息子の友人が持参してくれた、正月限定販売の生原酒だった。その友人の岳父が但馬杜氏で、愛知県の蔵元から持ち帰られたものである。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（2月号）」

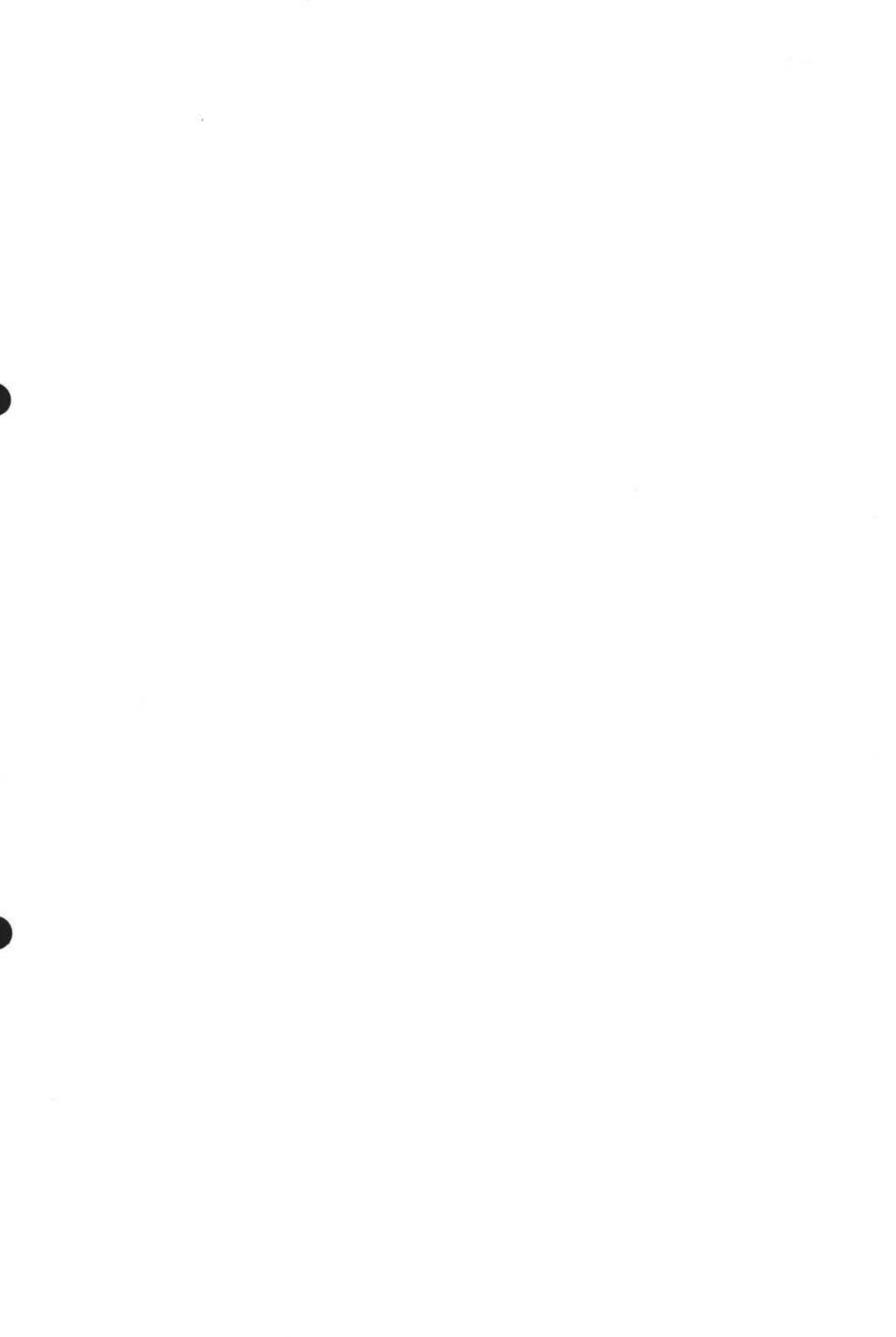
地名

雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

**川柳塔 (8句)** 橋 高 薰 風 選  
**水煙抄 (8句)** 河 内 天 笑 選  
**渺湖抄 (3句)** 八 木 千 代 選  
**茴香の花 (3句)** 西 出 楓 楽 選  
**意 外** 島 ひかる 選  
**うぬぼれ** 桜 庭 順 風 選  
**罰** 稲 葉 冬 葉 選  
**茶** (3句) 吐 田 公 一 担 当

2月号発表 (12月15日締切)

## 本社12月句会

と き 12月7日 (月) 午後5時半  
 ところ アウィーナ大阪 4階  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441  
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分  
**兼題** 「や」と 海老池 洋 選  
**大 根** 八十田 洞 庵 選  
**指 紋** 宮 西 弥 生 選  
**裏** 西 出 楓 楽 選  
**外 見** 橋 高 薰 風 選  
**席題** 1題 当日発表 (各題2句以内)  
**会費** 500円 投句料 400円

## 本社1月句会 7日 (木) 予定

**兼題** 「美しい」「髪」「くすり」  
 「青」「神」

3月号

**課題吟** 「それから」「雑」「近い」  
**初歩教室** 「さめる」

## 夜市川柳募集

第7回「読む」 泉 比呂史 選  
 ハガキに3句 12月末締切  
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺 川 柳 会

## 「川柳塔」への投句について

- 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
- 渺湖抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
- 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所の年末年始休日

12月29日・1月4日

定価 六百元 (送料76円)

半年分 四千元 (送料共)

一年分 七千九百円 (同)

平成十年十二月一日発行

編集兼 橋 高 薰

発行人 橋 高 薰

印刷所 美 研 ア ー ト

発行所 川 柳 塔 社

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二-10-16

ウエムラ第2ビル202号室  
 電話 (06) 6元一六九一四番  
 振替 〇〇九八〇一五十三三三六八番

# 千歩(ちほ)の絵(日本画・きりえ)展

1998年12月1日(火)～7日(月)

AM 11:00～PM 6:00 (最終日はPM 4:30)

第3回展を当地で、ささやかに開催いたします。お忙しいところを恐縮に存じますが、ご高覧頂きご批評賜りたくご案内申し上げます。



★  
**ギャラリー★  
 あけぼの**

〒581-0003 八尾市本町1-4-10  
 TEL 0729-95-2747

高杉千鶴子(千歩)

〒581-0014 八尾市中田2-302 ☎0729-98-0928



【イメージ・キーワード】  
 “Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの  
 紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 941-9631